

浅野誠

私の人生 1

チャレンジ精神とガンバリズムで、
人生「上り坂」を駆ける

1972年4月（25歳）～1992年3月（45歳）

2020年7月編集

ブログ「沖縄南城 人生創造 浅野誠」（2013年2月までのタイトルは「沖縄田舎暮らし 人生創造 浅野誠」）で、2010年から散発的に書き始め、2012年5月から本格的に書いてきた「私の人生」は、2020年7月現在で210回余りとなった。最終的には400回余りになりそうだ。あと10年位かかるのだろうか。

それらを集約したものを4回に分けて編集し、HPに掲載することにした。今回はその第一回で、1972年4月（25歳）～1992年3月（45歳）の110回ほどの記事だ。私は、20年以上前から、45歳を区切りにして人生前半期と後半期に分けて考えてきた。その前半期のなかの後半の時期を扱うことになる。

第二回は、1992年4月から2012（65歳）までの20年間で、人生後半期のなかの前半を扱う予定だ。2020年代半ばの公開予定だ。さらに、1972年までの人生前半期のなかの前半、そして65歳以降の人生後半期のなかの後半については、できるかどうかはわからないが、集約編集の計画はしている。

目次

※ 本文中の各項目末尾の年月日は、ブログ掲載日である。

I	第一次沖縄生活スタート	6
	1. 船で那覇港に着く 金欠→給料前借 授業に追われる	
	2. 私が沖縄に来るきっかけ	
	余談1 大学・大学院選択のころ——私の研究史を振り返る1	
	3. 『事実は小説より奇なり』の沖縄就職	
	余談2 大学教員になるころ——私の研究史2	
	4. 電報電話 老け顔 自動車 知り合い ストレス減少	
	5. レクチャー式授業で苦戦 授業改革へ	
	6. 身体・健康 自動車 自転車通勤 卓球	
	7. 食べ物との出会い ゴーヤ 泡盛 山羊	
	8. 飲み会 冠婚葬祭 広がる人間関係 地縁血縁の囲碁	
	9. 沖縄生活に慣れる	
	余談3 南風原の新川時代の暮らし 1974～76年	
	10. 沖縄生活にノリ始める	
II	長男の死 現場教師たちとの共同追求	20
	11. 長男の病と死のなかで苦闘1	
	12. 長男の病と死のなかで苦闘2	
	余談4 西原小波津団地を買う	
	13. 長男の病と死のなかで苦闘3	
	14. 長男の病と死のなかで苦闘4	
	15. 卒論指導 鬼の浅野からの卒業へ	
	16. 音楽への挑戦 中村透さんとの出会い・協同	
	17. 結婚式創造・文化活動創造	
	18. 琉球大学教育学部でいろいろなことをする	
	19. 沖縄教師たちとの共同研究のスタート	
	20. 沖縄教師たちとの教育実践研究 沖縄教育史研究へ	
	21. 沖縄生活開始ごろの沖縄教師との出会い 現場教師との共同研究1	
	22. 各地に出かけ、実践に直接かかわる 現場教師との共同研究2	
	23. 沖縄の実践の発掘 沖生研紀要の発刊 現場教師との共同研究3	
	24. 実践記録を書き、共同検討するサークル・研究会 現場教師との共同研究4	
	25. 南大東ひまわり学校 現場教師との共同研究5	
	26. 子ども学校 協同実践の展開 現場教師との共同研究6	

- 27. 文化活動の旺盛な展開 現場教師との共同研究7
- 28. 結婚式演出 文化活動研究 現場教師との共同研究8
- 29. 多様な民間教育研究団体とかかわる 現場教師との共同研究9
- 30. 70年代から80年代へ 現場教師との共同研究10
- 31. 首里キャンパスでの研究室
 - 余談5 西原小波津団地に住む1
 - 余談6 西原小波津団地に住む2
- 32. 沖縄・宮古の親戚とのつきあい
- 33. 自動車・バイク・自転車
- 34. 動物飼育 ちゃぼ うさぎ 犬
- 35. 海水浴 水泳指導

III 猛然と打ち込む 大学教育 沖縄教育

48

- 36. 沖縄教育史研究へ
- 37. 沖縄教育史研究初期
- 38. (続) 沖縄教育史研究初期
 - 余談7 沖縄教育史研究への契機——私の研究史3
- 39. 戦後沖縄教育史研究
- 40. 沖生研シリーズの編集発刊
- 41. (続) 本の編集 沖生研シリーズ あゆみ実践選書
- 42. 爆発的に仕事をした1980年前後
- 43. 70年代の担当授業科目 鬼の浅野時代
- 44. 70年代末から80年代への私の授業
- 45. 大学教育論 日本科学者会議教育問題委員会
- 46. (続) 大学教育論 日本科学者会議教育問題委員会
- 47. 健康になってくる 気管支炎とアロエ鼻うがいなど
- 48. 英仏旅行1. イギリス一周ドライブ
- 49. 英仏旅行2. イギリス歩き
- 50. 英仏旅行3. パリ歩き 海外旅行海外生活
- 51. 小波津団地での暮らし
- 52. 日曜大工 遊び道具作り
- 53. 子育て 動物育て
- 54. 小中高校の子ども・生徒相手の実践体験
- 55. 教育実習以外に子どもに直接かかわる現場実践の授業
- 56. 子ども・生徒対象実践での冷や汗体験
- 57. 卓球・旅・学生 1980年代初め
- 58. モーレッツな執筆活動
 - 余談8 体育、音楽など、多様な分野との交流

- 59. 琉球大学教育学部の研究会や委員会
- 60. 琉球大学教育学部移転作業
- 61. (続) 琉球大学教育学部移転作業
- 62. 虚脱から猛然への5年余り

IV 東京での研究生生活 77

- 63. 11年ぶりの東京生活 研修生活
 - 余談9. 研究会と学会
- 64. 研究生生活
 - 余談10. 「若手道場」的研究討論への渴望
- 65. 日本生活指導学会創設準備1
- 66. 日本生活指導学会創設準備2
- 67. 日本生活指導学会創設準備3
- 68. 日本生活指導学会をはじめとする学会とのつきあい
- 69. 首都圏生活でのトピック

V 80年代後半の生活 集団づくりの新しい展開 86

- 70. 講演などでの沖縄の地域とのかかわり
- 71. マスコミとのつきあい
- 72. 子育て
- 73. 学生が集う我が家 親戚付き合い
- 74. 地域との付き合い PTA 卓球など
- 75. 家計のこと けちな私
- 76. 80年代半ばの学生とのつきあい ゼミ指導 悩み相談
- 77. 学生集団を育てる
- 78. 繁忙生活と繁忙への対応
- 79. 上級生のコメントを生かす教育研究入門II
- 80. 学童クラブ・児童館などで子どもを指導する指導技術演習・生活指導演習
- 81. 大学の諸委員会での取り組みなど
- 82. 子どもの発達と生活指導の研究 全生研大会基調提案執筆
 - 余談11. 学術界との付き合いと博士論文提出話題
 - 余談12. いろいろな分野・テーマに手を出してきた私
- 83. 集団づくりの新しい展開
- 84. 日本生活指導学会その後
- 85. 学級に丸一日滞在し、実践を参観参与する
- 86. 子ども分析・学級分析 異質協同 理論創造への歩み
 - 余談13 「生活指導実践の理論を構築することをめぐって、全生研が持ってきた多様な視野の歴史 個人体

験を含めて」その1 (後半にあたるその2は、「私の人生2」に掲載予定

- 87. 大学授業について全国の諸大学・大学人との交流
- 88. 沖縄での地域教育実践とのかかわり
- 89. 沖縄における民間教育研究実践 めだかサークル
- 90. 沖縄教育史研究の本格化
- 91. 全生研沖縄大会の開催
- 92. 仲人ラッシュ 卒業生通信など

VI 愛知への転勤 大学授業

115

- 93. 転勤話
- 94. 紆余曲折を経て、中京大学転勤が決まる
- 95. 転勤 沖縄から離れる
- 96. 義兄たち つながり豊かな沖縄の人間関係
- 97. 第一次沖縄生活をふりかえって
- 98. 愛知時代へ 住宅探しでの驚き 1990年代のスタート
- 99. 大学教員生活の新しい体験
- 100. 教員と学生との距離
- 101. 教室 非常勤講師対応 卓球練習場
- 102. 愛知生活の新居 大学改革
- 103. 大学業務と授業
- 104. 授業での試行錯誤的苦闘

余談14 前半期の後半(25～45歳)を振り返る チャレンジ精神とガンバリズム

I 第一次沖縄生活スタート

1. 船で那覇港に着く 金欠→給料前借 授業に追われる

私個人の沖縄物語が始まるのは、1971年4月28日だが、沖縄生活が始まるのは1972年4月10日である。そこでまずは4月10日ごろから話を始めよう。

4月8日、東京晴海埠頭で、琉球海運「なは」に乗船した。一切の家財道具をダンボール60箱弱に詰め込み、チッキ（手荷物扱い）にした。有名私立大学の学長もしたある先輩が、アパートから港まで車で運んでくれた。

晴海には、何人もが見送りにきてくれた。紙テープ見送りもしてくれた。

偶然、琉球大学に赴任する大学院時代の友人と、同じ船になった。彼の提案で、一等船室に乗った。ゼイタクをした。2泊3日だが、彼と私の2組のカップルで楽しむ旅だった。船酔いする前に酒酔いをしていたのが、実のところだ。

10日、那覇港に着く。彼を迎える人はすでに到着していた。私を迎える人は、30分後に到着。「私の就職は、本当なのか」と、しばし不安がよぎった。迎えの方は、地域で長年活躍され、先日20年以上ぶりにお会いしたが、元気だった。

到着後、紹介された那覇市松川の新築の郵便貯金住宅（アパート）に入居。持参した合計10万円は、アパート頭金・契約金、そして、当座をしのぐ家具で、ほぼなくなっていた。というわけだ、テレビを買ったのは、1年後だった。俵約したが、4月20日過ぎには、底をついた。「苦肉の策」として、管理職の方に給与を前借して、当座をしのいだ。初任給は180ドル。

7階建アパートの最上階。東向きの部屋の目の前は、沖縄工業高校。いつも窓から高校風景を見ていた。2年前、工業高校で高校生相手にワークショップをしたが、すっかり変わっていた。断熱施工が弱い当時は、最上階なのでとても暑かったが、クーラーを買う金はしばしなかった。

「工業線」のバスで「寄宮」まで通勤した。寄宮交差点（真和志小学校前交差点ともいうか）は、風が強い時は土ほこりが舞った。当時すでに信号があったが、信号とはかかわりなく、スクランブル横断をする「おばあ」を見てびっくりだが、のどかさを感じた。

買い物には、よく与儀の農連市場に出かけた。朝9時ごろいくと、売り手の農家が、早く店じまいしたいので、大盤振る舞いの半値以下で野菜を売っていた。相対売りを楽しんだ。とはいっても、全くのウチナーグチの世界。私は、ただ立っただけで、どんどん価格を下げてくれた。

私が赴任した沖縄大学は、3月に急遽、存続ということになり、あわただしい時期だった。教職関係科目を週に7科目7コマほど担当したと記憶している。加えて、琉球大学教育学部でも非常勤講師をすることになり、週2コマ担当した。当時の私の生活は、授業準備（授業ノートづくり）と授業が、生活時間の大半を占めた。典型的なレクチャ方式しか知らなかった私は、90分授業のために、平均して大学ノート10ページ余りの講義メモを作成し、それを読み上げる授業を進めた。

学生には、社会人学生も多く、夜間クラスなどは、私より年上の方が、3分の1位を占めることもあった。子連れ学生さんもいた。当時学生だった人たちは、もうすべて60歳以上だ。

こんな慌ただしい生活のなかで、沖縄の「日本復帰」の5月15日を迎えていた。（2012年5月13日）

2. 私が沖縄に来るきっかけ

私はもともとのウチナーンチュではない。しかし、沖縄生活は今年で通算25年になり、人生の中で一番長く住んでいるところだ。ということで、「どうして沖縄にきたんですか」とよく尋ねられる。

そのきっかけを書くことにしよう。

結論からいうと、要するに、恵美子との出会いである。彼女は、沖縄からの国費留学生で、出会った当初修士課程2年で、私は博士課程1年だった。

大学間を越えた大学院生の組織があり、その連携のなかで出会った。

1971年4月28日。50代以上の人はご存じだろう。4月28日というのは、当時「沖縄デー」と呼ばれていた。すでに「復帰」は予定されていたが、どういう「復帰」になるかが焦点になっていた時期だ。沖縄関係者だけでなく、沖縄と直接の関わりを持たない人たちの多くも関心を持っていた。

ということで、その意思表示の場がもたれ、その時にはじめて会った。

それから急速に「話」が進み、結婚を約束するまで進行した。

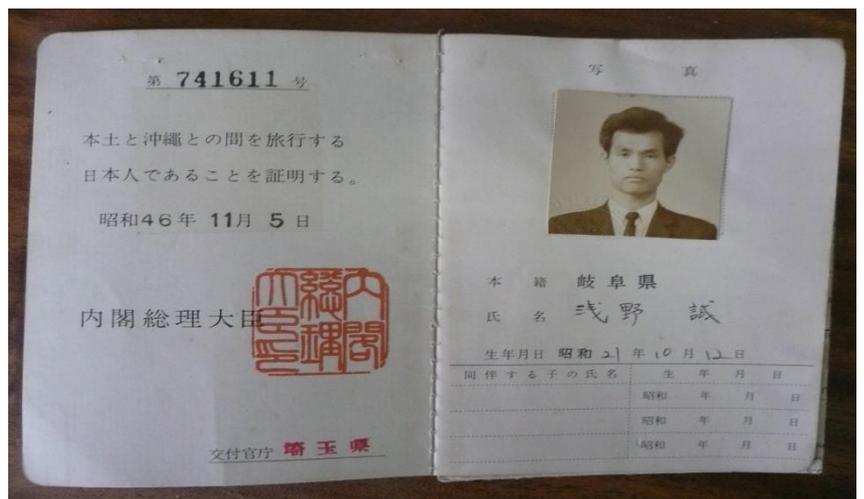
その過程で、恵美子に沖縄での就職話が持ち上がった。国費留学生には、得た奨学金を「沖縄で働く」ことで恩返しするという「義務」めいたものがあった。そのこともあるが、恵美子はもともとそのつもりで、沖縄での就職話に乗る。そこで、「私も」というわけで、私も沖縄で就職活動をすることにした。

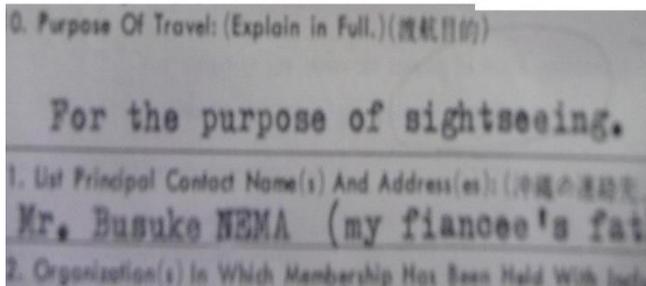
ということで、その年の11月、恵美子の親への結婚挨拶もかねて、就職活動のために沖縄に赴いた。

当時は、米軍の高等弁務官のビザが必要だった。航空券手配とビザ申請などのために、旅行社を尋ねた。手書きでビザ申請書類を書くこと拒否されることが多いと言うので、旅行社のタイプライターで作成と言うことになった。「渡航目的」を、「結婚・就職活動」と、ありのまま書こうとしたら、旅行社はそれもだめで、「観光」にしなさい、と言われた。

予防注射をすませて、『無事』パスポート・ビザを取得した。ともかく外国扱い、というか、外国扱い以上だった。

写真は、パスポート代わりの「身分証明書」の表紙と第一ページ

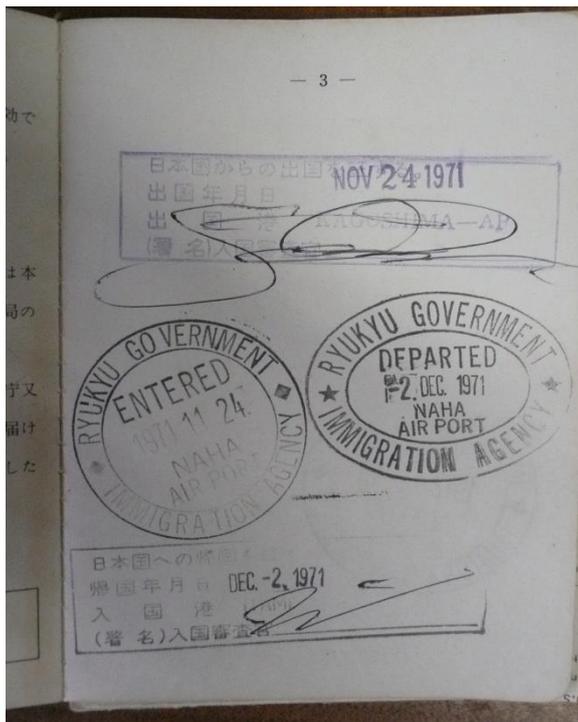
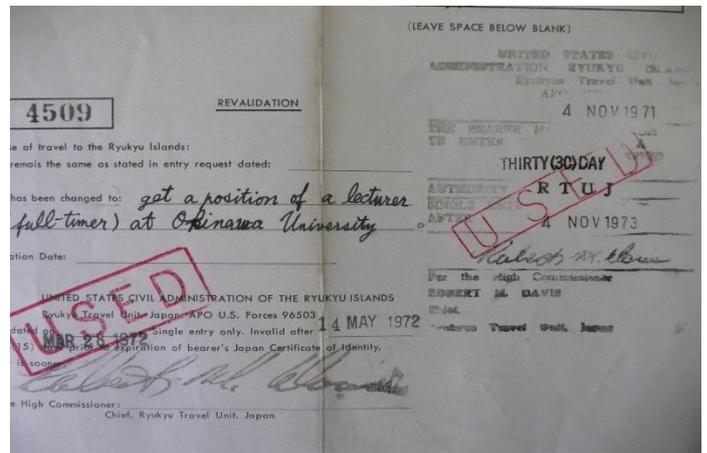




上 「観光目的」「身元引受人」(恵美子の父親)を示す申請書類。

右 高等弁務官の署名付きのビザ(翌年4月のもの)

下 出入国スタンプ



就職活動といっても、あてがあるわけではなかった。知人に沖縄出身者がいたので、その方の紹介、そして恵美子の就職に関わっている人に紹介してもらい、とにかく「やみくもにあたる」ことだった。せっかく恵美子と出会え、結婚まで行きつくのに、ここで上手くいかないが大変になる、という思いから必死であった。

当時、私が属する大学院では、就職が難しくなりそうな予想であった。いわゆるオーバードクター問題、「博士をとっても就職がない」ということもあり、どんな条件でも職を得ることをまずは先行させようという心情が広くあった。加えて、私個人としても東京での学究的生活よりも、地方大学で教員養成の仕事にかかわりたい、という夢もっていた。そんな折に、浮上した話に飛び付いた、というのが実のところだ。

11月下旬、初めて沖縄入りする。初めての飛行機体験でもあった。カバンをいちいち開けての空港での出入国審査。

最初の晩は、佐敷仲伊保の知人宅にお世話になった。そして、2、3日の宮古滞在をはさんで、沖縄本島での就職活動に励んだ。宮古滞在は、いわば結婚披露ホームパーティだった。踊り、オートンなどなど。さっぱりわからないミャークグチ。私に強烈なカルチャーショックを与えるとともに、強烈な沖縄関心をつくりだした。(2012年5月29日)

余談1 大学・大学院選択のころ——私の研究史を振り返る1

いろいろな刺激を受けてきたが、私の研究スタイルはかなり個性的で、独特なありようがあるように思うが、年とともにその傾向が強まっているように思う。

そのいくつかの刺激について、思い出しながら、私なりのスタイル形成について、振り返ろう。

教育学への志を抱いたのは、高校生の時だ。宗像誠也「私の教育宣言」(岩波新書)を読んだのがきっかけだった。そして、生徒会活動をはじめとする様々な体験が大きくなってくる。

そのなかで、宮坂哲文さんや全生研(のちに高生研と全生研に分かれるが、高生研につながるものが多い)の書籍などにも触れる。そのため、職業としての研究を考えるよりも、まずは、教育現場での仕事をしたいということが芽生えた。自分自身が体験したことをベースに「いい教育」をしたいと考えたのだ。

研究職が視野に入ったのは、教育学部のなかのどの学科に進学するかを選択が迫られた大学2年の時だった。進学ガイダンスの際、宮原誠一さんの社会教育の実践的世界を紹介する語りと、理論的探求への関心を触発した勝田守一さんの語り強い刺激になった。

結果的に、勝田さんのコースをとった。高校時代にすでに読んでいた宗像誠也さんの話も聞いたが、勝田さんの語りがとても新鮮に感じたのだった。また、高校時代に読んでいた宮坂哲文さんはすでに故人だった。

大学4年になると、現場教師になるか、大学院へと進学するか、選択が迫られた。当時、中学高校の社会科免許取得だけでは現場教師になるのは難しかった。それと、高校時代の教師に相談して、研究者になる道を選べるのなら、その価値はあるというすすめもあった。ということで、大学院に進学することにした。

学部時代に印象的だったのは、岐阜県恵那の共同調査であった。その際、大田堯さんにとってもお世話になった。卒論も、地域変貌と恵那の教育実践についてだった。

抽象的論理を構築するより現場実践に近いところで教育について考える体質は、すでに鮮明になっていた。そうしたことをふまえて、学部を終えるころには、生活指導実践を専門にしようと考えていた。しかし、修士課程の学科を選ぶ際、適切な学科はなかった。宮坂さんがおられれば、選択の余地なしで決まるのだが、そうではなかった。(2010年1月27日)

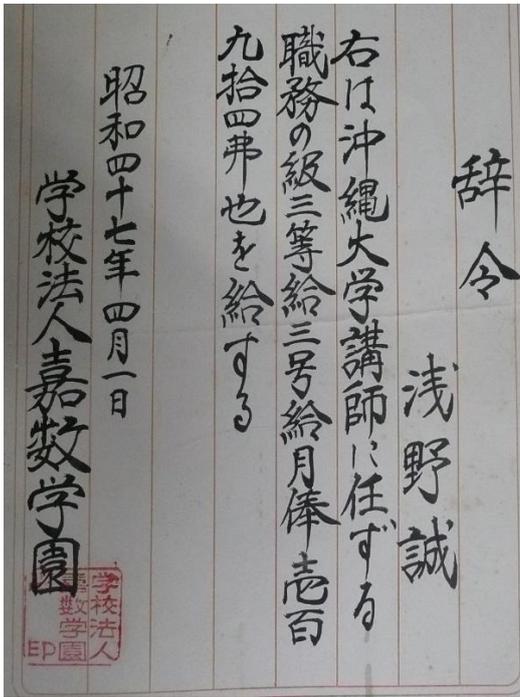
3. 『事実は小説より奇なり』の沖縄就職

1971年11月に沖縄に来て『就職活動』をしたのだ。当時はよくはわからなかったが、後に、大学や県政などで要職に就かれた沖縄でのキーパーソンになる何人もの方々に大変お世話になった。

私の必死さが通じたのか、皆さんのお陰で、結果的に就職したのだ。といっても二転三転どころか、四転五転であり、その細かい過程は大変ややこしいので、省く。その一端を若い人に話すと『冗談』でしょう、といわれてしまう。『事実は小説より奇なり』の類いである。

それでも、少しだけ書くと、恵美子も私も、琉球大学教育学部の助手の候補になったのだが、政府予算の関係で、採用枠そのものがなくなってダメになった。翌年、採用枠が少し復活して、学科主任の「くじ」で、私が応募した枠がとれ、1973年に私は琉球大学教育学部の助手に採用された。主任が「くじ」にあたった「おかげ」だ。

あとあとで、当時どんな方が応募されていたかを知った。私より年長で業績もたくさんある方が何人もおられた。関係者の話を総合すると、どうやら、若い人がほしかったところ、私が一番若かったことと、沖縄まで来て就職活動をし



た熱心さ、それに沖縄関係者であることがよかったらしい。

1971年11月には、琉球大学だけでなく、色々なところを紹介していただいたが、その一つに沖縄大学があった。当時は国際大学と沖縄大学の合併による沖縄国際大学設立の流れだった。ところが1972年3月に、沖縄大学を存続させる動きが生まれ、採用するから4月初めには赴任するように、と3月中旬に沖縄から電話が入った。打ち合わせもあって、当時の学長に、東京でお会いすることになったが、その際、恵美子の職もお願いしたら、「二つ返事」で即決した。

その後も『事実は小説より奇なり』ドラマは続く。

先にも少し書いたが、荷造りして急遽、船に乗った。事態がよく飲み込めないままだったので、大学院は休学手続きを取った。

那覇に着いて大学に赴くと、恵美子の採用は、同日に別の方を採用してしまったので、しばし『名義専任』ということにあいなり、非常勤で授業を担当した。また、私は琉球大学の非常勤講師もすることになった。

沖縄大学での担当科目は、教職のなかの教育系科目の大半を担当した。「そんな科目、授業できるの」と言われると、今でも赤面しそうになる。教育史、教育哲学、教育社会学、社会科教育法、道德教育の研究・・・という具合だ。

(2012年6月28日)

余談2 大学教員になるころ——私の研究史2

私は、1972年4月、博士課程を1年終えたところで、たまたま沖縄大学専任講師の職を得て、職業生活をスタートさせた。その時期より少し前までは、修士を終えたところで大学教員の職を得る例は珍しくなかった。しかし、1970年ころより事情がかわって、修士修了直後の例は減少し、オーバードクターの事例が増加していく。

私が早く職に就いた事情を少し説明しよう。

先にも書いたように、私は小中高校教員になるか、大学教員になるか迷っていた。大学教員になる道を選んだ後も、できる限り学校現場に近いところで、研究活動をしようとした。その点でいうと、大学院、しかも東京という「中央」で研究生活することには早めにキリをつけ、地方の大学の教員養成の場で、仕事をしたいという希望もっていた。

そんなころ、共同生活を始めた恵美子に琉球大学から就職の話がきたのだ。彼女は当時修士2年で修士論文執筆中だった。

そこで、「私も一緒に」ということで、沖縄で就職活動をしたのだ。その舞台の一つが、例のハーバービュークラブなのだ。

この就職活動は、かなりドラマティックな展開をする。この経過は、「事実は小説より奇なり」だ。最近、ある大

学の中堅教員から、「浅野さんは密航して、沖縄に行き、就職したという話ですね。」といわれたのにはびっくりした。密航ではなく、正式にビザとパスポートをもって、だ。

そして、沖縄にきてからも紆余曲折があって、最終的に、私は琉球大学、恵美子は沖縄キリスト教短期大学で、1990年まで、かなりの期間働いた。

沖縄にきてから、学校現場には本当に一杯回った。学校教師とも沢山の研究討論の場をもった。その現場との共同作業、そして、大学授業準備のために、一杯勉強したのもこのころだ。

だから、この時期、つまり1970年代が、「私流の大学院」だったかもしれない。（2010年2月5日）

4. 電報電話 老け顔 自動車 知り合い ストレス減少

沖縄で生活しはじめた1972年夏ごろの思い出をいくつか書こう。

住んだ那覇市松川の郵便貯金住宅7階。新築で快適であったが、断熱が弱い当時の最上階で、暑さには参った。なけなしのお金で、窓枠に取りつける安価なクーラーを買った。テレビはまだだ。

困ったのは、電話設置。引っ越し前、住んでいた埼玉の電電公社で聞くと、沖縄には移転できないと言われた。沖縄に来てから、移転できた人がいたので、がっくりきた。当時はいろいろなところで、こうした「トラブル」があったものだ。沖縄に住み始めて申し込んだら、1年以上待つとのことだ。

だから、ちょっとしたことでも急ぎの連絡は、電報使用だった。当時、沖縄生活指導研究会の会長をしていた宮城ヨネさんから、よく電報が来た。当時の研究会は、ヨネさんがいる名護が中心だったので、電報使用はやむを得なかったのだ。

割合早目に、沖縄の現場教師たちがつくる沖縄生活指導研究会（略称沖生研）の会には顔を出した。1971年に全国生活指導研究協議会（略称全生研）の常任委員になっていたが、その大会等で顔見知りになっていたのが、宮城ヨネさんや平川節子さんたちだ。

当時の私は、とても緊張していたように思う。沖生研の役員をしていたある男性教師が、私を見て「40代」と言う。私は彼をみて、「30才ぐらい」に見えるといった。実は逆だった。私は25歳、彼は40歳ぐらいだったのだ。経験豊かな現場教師と関わり、何らかのコメント・アドバイスなどを要請される場面が多かったので、そういうことになったようだ。年齢よりを老けて見られるのには慣れてしたが、こんなに老けて見られる経験はなかった。

研究会だけでなく、学校現場にでかける機会が増え始めると、バス利用だけではすまなくなり、自動車使用が不可欠だった。

時間のゆとりがある恵美子からまず免許を取る。私は夏休み期間に取得。奥武山自練に通った。今はもうない。3～4万円で取得したと思う。実地試験で、ずっと先にある線路（ペンキで線路が描いてある）の前の一旦停止を怠ったというので、再試験になった。

最初に購入した車は、ホンダのNII、360CCの中古車。5万円ぐらいだったろうか。この車で、しばしば名護まで往復した。名護七曲がりが本当に怖かった。2時間20分ぐらいかかった。最初のころは、途中休憩もした。当然右側通行の時代だ。

このころ、私には知り合いもいないので、恵美子の兄弟親戚や友人たちのお世話になった。車の世話もそうだ。

いつも恵美子に付いて回っていると思われたのか、恵美子の友達から、私には友達がいないのか、と心配された。そのころは、確かに、職場同僚と沖生研メンバー以外に知り合いはいないに等しかった。知り合いは、東京周辺ばかりにいた。

そのころは、「沖縄にいるのは、三年、五年ぐらいかな」と思ってもいた。

そのころ、まだ、沖縄の食べ物になじんでいなかったから、時々、東京周辺の食べ物が恋しくなることもあった。歯ごたえのあるリンゴ、アジの開き、日本そばを探しまくった。リンゴは断念した。日本そばは、三越のレストランで見つけた。アジをどこで見つけたかは、忘れた。

こんな暮らしだったが、沖縄の空気に少しずつなじみ、それまでの東京・愛知生活でためこんだストレス蓄積を放出しはじめたようだ。当時の私を知る人は、1分間の数十回の瞬き、チック症状を記憶しておられると思うが、それも減り始めていた。（2012年7月23日）

5. レクチャー式授業で苦戦 授業改革へ

1972年には、沖縄大学での何科目にも及ぶ授業担当に加えて、琉球大学教育学部で「道德教育の研究」の非常勤講師もしていた。総計週8～9コマ以上していたという記憶だ。初体験のうえに、何種類もの科目を担当した。

最初のころは、たいていの新任教師がするように、レクチャー中心だった。90分の授業に、大学ノート約13ページの講義ノートを作成した。講義のノート作成→講義→ノート作成→講義、で一週間の大半が経過していくという生活だった。

授業では、受講生の顔を見るが、恥ずかしくてできなかつた。だから、講義ノートと窓の外とを交互に見ながら話していた。必死だった。受講生に質問されて答えられるかどうかが大変心配だった。しかし、それは杞憂だった。当時、もともと怖い顔をしていたが、授業では余計にひきつっていたので、学生は近寄りにくかつただろう。

無論、1年間で数人は質問にきた。大変積極的な学生で、彼らは、現在60～62歳だ。教育現場で相当に活躍した人が多く、校長を退任した人も何人かいる。よく覚えている人は10人以上いる。沖縄大学には、社会人学生が多く、特に夜間講義になると、受講生の三分の一が私より年長、ということさえあった。子連れ受講の方もおられた。それまで教育機会に恵まれなかつた方々の学習要求は高いものがあつた。

つい最近、最初の卒論生にあつた。琉球大学学生で、その指導も担当した。現在は、ある大きな図書館の館長をしている。

このように、私には緊張溢れる授業だったが、前期を終了して、大ショックに遭遇した。レポートの大部分が必要レベルに達していないのだ。やむを得ず、追加レポートで補充してもらつた。

私が授業でレクチャーしたことほとんどが受けとめてもらえなかつた原因を考えた。どうやら、その一つに私の早口があつた。今から思えば、現在の話し方のスピードの3倍ぐらいだつたろう。そこで、後期の最初の授業を、テープ録音してみた。それを聴いて納得した。これでは学生が「ついていけないわけがない」だろう。

それから、ゆっくり話す努力をした。と同時に、レクチャーだけでなく、今でいう双方向型、あるいは学生参加型の授業を、多様な形で試みた。

当時は、大学授業に関する書籍はなかつた。そこで、小中高校の優れた授業関係の書籍から学ぼうとした。中でも、

使えると思ったのは、大西忠治「学習集団の基礎理論」「国語の授業と集団の指導」（いずれも明治図書）だった。特に、発問について多くを学んだ。多様な発問を授業で展開した。73年からは、授業で合宿をするなどもした。

だが、なかなか思うようにはいかず、手ごたえを感じるまでに、3年かかった。

別の話。私の沖縄読書の話。

1971年に恵美子と出会ってから、沖縄が、私の読書のなかのかなりの時間を占めた。1972年ごろまでは、沖縄研究には程遠く、そのための基礎学習と言う感じだった。支出の多くは、沖縄関係書購入だった。当時、書籍購入は、月1万円ほどだった。今はそれより少し多いくらいで、物価を考えれば、当時かなり支出したと思う。時間さえあれば、熱心に沖縄学習をしていた。

そうした学習、日々の生活体験、「復帰前後」の多様な事態との遭遇の中で、学ぶことは多かった。

それにしても、日々出会うことが驚きの連続。当時の気分としては、異文化体験とでもいえそうだ。それは、私には、とても新鮮に感じるものだった。そのなかで、よくいわれる言葉だが、沖縄が強烈に好きになる「沖縄病」へと一直線に進む。（2012年8月19日）

6. 身体・健康 自動車 自転車通勤 卓球

このころの体調は、東京時代と比べて事情が全く変わり、徐々に好調になっていき、「健康街道」へのスタートとなった。

72年の5月末に寝込んだことが記憶に残っている。多分、多数の科目の準備と授業の疲れだろうと思う。沖縄の水にまだ慣れていないからだと言う人もいた。当時の水道水は、カルシウム分が多かった。当時と比べると、現在の水道水ははるかにいいと思う。また、ある人は移住から来る様々な疲れだろうともいう。

それでも、2、3日休んで元気になったと記憶している。

私は、10代半ばからいろいろな持病に悩まされていた。一番は、気管支炎。春秋の季節替わりには、ほぼ毎年、高熱を出して苦しんでいた。東京と沖縄では、季節変化の時期はずれたが、沖縄に住み始めて以降も、くりかえし付き合うことになった。それでも、年々症状が軽くなっていった。ストレスが減ったこと、空気がきれいな事が主因だと思う。

病気で休む期間が確実に減少していったのは、大変うれしいことだった。

ストレスと言うと、12歳に始まったチック症状——毎秒一回ほどの瞬きが主症状——が依然ひどかったが、それが減り始めた。ストレス減少のお陰だ。その後ほぼ20年かけて、症状はなくなっていった。

身体を強くすることに、東京時代より一層気を使うようになった。その一つとして、農連市場などを始め、那覇の街をよく歩いた。

それでも、沖縄各地に出かけるには自動車が必需品であることが分かったので、恵美子がまず免許を取った。私も夏には取得した。

免許取得笑い話。

恵美子は、兄に助手席ののってもらって、仮免で練習をした時、米軍のホワイトビーチに入りこんでしまった。気がついて戻ってきたが、米軍があわてたらしい。

ホンダNIIで、ヤンバルにも出かけた。今安波ダムがあるあたりで、急坂をのぼれなくて、苦労した記憶がある。新里ピラもやっとの思いだった。

2、3年後、琉球大学に止めておいた時、帰ろうとしたらクラッチワイヤが切れて、動かなくなった。その時、ある学生が、5千円で買うということだったので、譲った。今、どこかで校長をしていることを新聞で見た。

我が家の財政事情のため、数年間は車一台で、恵美子と共用していた。

1973年には、私は琉球大学に勤務先が変わったが、自転車通勤を試みた。住んでいた松川から首里の大学までは、急坂だ。最初はまっすぐにのぼれないので、勾配が緩い道を探してぐるぐるまわり、途中十数回休憩して、たどりついた。帰りはとても速いが。

それでも、何カ月かすると、ノンストップで、観音堂傍の道を上って行くことができるようになった。これで体力がかなり付いたと思う。

1972年、琉球大学教育学部でも非常勤講師をしたが、その折、教育学部事務室前に置かれた卓球台で、休憩時間に盛んに卓球をする人たちがいた。時々、私も仲間に入れてもらった。この廊下卓球が、今に至る卓球との付き合いのスタートだ。ちょうど40年になるわけだ。(2012年10月1日)

7. 食べ物との出会い ゴーヤ 泡盛 山羊

1971年埼玉で二人の新しい生活を始め、半年後には沖縄生活を始めたわけだが、私は恵美子がつくる沖縄式(宮古式)の料理にはなかなか馴染めなかった。恵美子も私の料理にはなかなか馴染めなかった。というわけで、料理は「先に作った方が勝ち」という風になり、この状態がかなり続いた。何年かして、恵美子式と私式を合わせたチャンプルー式の料理が成立?していく。

今でこそ、沖縄の食べ物が好物の私だが、沖縄生活当初は、苦手が多かった。ナーベラに馴染むのに、10年以上かかった。エンサイ(ウンチュエ)料理は、雑草を食べるのかと思ったほどだ。

ある方の自宅を訪問した時に出てきたイカのシミ汁は、100%完璧シミ汁で、強烈な我慢状態でいただいたことが今でも記憶に残っている。

友人の結婚式の司会をした時、会場中央に、デンと置かれた豚の丸焼きもショッキングだった。一品料理なので、逃げるわけにはいかない。自分でとりにいく勇氣!がないので、とってきてもらったのをいただいた。それでも、ソーキなどは好物になっていった。

熱帯魚のような魚のサシミなどには驚いたが、すぐに美味しいと感じるようになった。

酒は、当時、泡盛よりウィスキーの全盛時代で、けっこういただいたが、そのうち泡盛にはまっついていき、全琉(当時は全沖縄というよりは、この表現の方になじみがあった)の銘柄に挑戦し、数年たつと、その銘柄がいえるようになり、三分の二ぐらいは、飲み当てることができるようになった。1970年代には、宮古つながりで「菊の露」「多良川」そして「まさひろ」などを愛飲した。

しかし、製造技術が高まると同時に、酒蔵特有のクセが少なくなり、均質化しだした80年代になると、銘柄を飲み当てるのが難しくなった。特有のクセを求めた私は、伊平屋の「照島」を愛飲した。

泡盛の思い出で一番は、1973、4年ごろだったか、知人に連れられて、久茂地の居酒屋で秘蔵の「どなん」70度をいただいたことだ。当時は与那国からの持ち出しができない時だったが、なぜかその店にはあった。1合足らずをストレートで2時間かけていただいた。70度は、水割りなどすると、にごってしまってまずくなると言われた。

そのころは、まだ喫煙していた。復帰前、沖縄たばこのたくさんの銘柄に興味をもったし、アメリカタバコも味わった。結局ウィンストンとの付き合いに落ち着いたが、3～4年して、タバコをやめたので、煙草の話は記憶にあまりない。タバコをやめたら、体力が高まり、卓球が強くなった記憶はある。

苦手だったゴーヤをはじめとする沖縄食材も、2～3年たつと、はまり始めた。とくに苦手だったゴーヤは、大好物になった。ゴーヤをそのまま丸かじりするようになった。味付けを何もしないで、苦みを生かした食べ方が好きで、多くの人を驚かせた。

ユシドーフ（寄せ豆腐）にはまった。沖縄そばも好きになった。ヒージャー汁も好きになった。臭い臭いといわれるが、それがまたよかった。当時、ヤギ料理店は、店先から50メートル離れても臭いがしたものだ。

だが、74、75年ごろだったか、はまったヤギとのショッキングな出会いがあった。南大東小中学校で、教師たちの研修も兼ねて、休暇中に子ども学校を開くことになり、その指導のために南大東に出かけた時だ。大歓迎の意を込めて出されたのが、大皿山盛りのやぎ刺身である。火は通されていない、血が滴り落ちていた。それまで私が食べていた刺身は、火を通してあり、10切れぐらいで800円ぐらいだった。この大皿山盛りは、本島で食べたら数万円だろう。

量が多すぎたし、赤い血が強烈だ。見るだけでショックだった。泡盛のつまみに食べるなどというものではない。ともかくヤギ刺身だけなのだ。お陰で、10年間ほど、山羊を食べられなくなった。

数年前、久しぶりに山羊汁を食べる機会があったが、臭みがまったくなく、これが山羊汁だろうか、と思うほど変身していた。

1974年春からは、南風原の新川に住んだ。今の新川とは全く異なる風景で、五〇戸余りの小さな集落で、まさに田舎だった。その借家の前には畑があり、畑作に挑んだ。失敗の連続で、収穫した記憶がほとんど残っていない。近所の老人がいろいろと教えてくれたが、身につかなかった。

1976年春から西原の小波津団地に住み、家庭菜園を試みたが、失敗の連続のなか、やめてしまった。沖縄野菜を収穫できるほど栽培し始めたのは、8年前からだ。（2012年11月1日）

8. 飲み会 冠婚葬祭 広がる人間関係 地縁血縁の囲碁

沖縄生活に慣れてくると、友人宅知人宅親戚宅、そして飲食店で飲む機会が増える。そこでの発見。

- 1) ご飯を食べてから、お酒を飲む。酒を飲み終えてからご飯を食べる他府県とは逆だ。これは健康上、大変いい。
- 2) 座る席は、序列性が他府県ほどには強くない。自由席に近い。これもなかなかいい。
- 3) 目上に注いで回るといった慣習も少ない。手酌で飲むことが多い。
- 4) イチャリバチョーデー。酒場での飲み会で、隣席の見知らぬ無関係の人とも酌み交わすことが少なくない。友達関係が広がる。

人間関係では、他府県と比べると、上下関係が弱い。そして広がる。象徴的なのは、冠婚葬祭。職場の同僚の近親者

がなくなると、お知らせが回ってきて、告別式にできるか、誰かに香典を預ける。きちんとつきあっていると、月に一回以上になる。

結婚式。出席者数百人。南風原に住み始めたころ、字の人だが、顔と名前が一致しない人の結婚式に招待され出席。字じゅうの人が招待され出席した感じだ。

冠婚葬祭の香典や祝儀は、他府県の数分の一の額だ。

ウチナーむく（沖縄婿）、ミヤークむく（宮古婿）になったお陰で、親戚が一挙に増える。親戚の友人・知人という人もあられ、一挙に知り合いが増える。

出会った人と、挨拶というか、声を掛け合うことが結構多い。他府県では、山登りした時には、そうした出会いが多いが、沖縄では日常的にある。田舎にいけばとくにそうだ。1974年に南風原の新川に引っ越したが、そういう機会が増えた。

当時の新川は、数十戸200人ぐらいの字で、今の新川にはその面影はほぼない。数年前訪問したが、私たちが住んでいた家はあとかたもなく、残っていた井戸で場所を確認できた。かつての畑や草地に家が立ち並んでいる。新川から首里鳥堀近くまでの通勤路5分間で出会う車は10台あるかなしかだったが、今では、数百台になっている。

その新川時代に囲碁がうまくなる。正月三が日、近所の家で、中高齢者中心に10人20人が集まって囲碁三昧。私も参加した。

私の義兄たちは、3～5段と囲碁の強者たち。親戚宅に行くたびに、あるいは彼らが我が家を訪問するたびに、私への囲碁指導となる。お陰で、10級以下だった私が、4～5級になった。

東京時代にはイメージがまったくできなかった出会い・世界がぐんぐん広がったのだ。（2012年11月28日）

9. 沖縄生活に慣れる

盆と旧正の時に、ほとんどの店が閉店するには、びっくりしただけでなく困ってしまった。大学などの公的機関は休まなかったが、学生たちのなかで家庭行事のための欠席者が増えた。1～3月のウージトーチ（さとうきび収穫）の季節には、家族総出のため欠席する学生もいた。

東京から移ってきたばかりの私には、お店はのんびり商売の印象が強かった。応対する人がどこかに出かけて誰もいない店は珍しくなかった。公的機関にしても、たとえば定期貯金証書の書き方がはっきりしない郵便局があり、窓口から私の方が「ここに郵便局の印鑑が必要です」と話したこともあった。「本土復帰」といっても、必要な研修がなされていないと感じた。

こんな沖縄生活初期であったが、2、3年もすると慣れてきた。私が、沖縄の水と空気に慣れてきたというべきだろう。高速の東京生活に合わせた私が、ゆったりした沖縄生活のテンポに溶け込んだとっていいだろう。それと並行して、焦りつつ模索していた青年期に分かれを告げる年ごろにもなってきた。

そんな中、人生上の大きな出来事が起こる。主なことだけ記そう。

第一子誕生 1973年 アドベンチスト・メディカルセンター（上之屋在 現ナハテラスホテル敷地）

南風原新川への引っ越し 1974年

第二子誕生 1975年

恵美子の就職決まる 1976年

第一子入院 1976年

小波津団地への引っ越し 1976年

第一子死去 1976年

呆然とする日々を送る。その後の人生に決定的なものを受け取る

「裕樹は生きている」を恵美子とともに発刊 1977年

第三子誕生 1978年

航空券が高い時代であり、他府県行きは、年に2～3度ぐらいだった。当初の心づもりの隅には、3～5年で転勤イメージがあったが、1970年代後半になると、「長居」のイメージになってくる。

授業の模索を続ける。大学教師になって数年後、はじめて授業が上手くいったと思う経験もする。学生とかみあえると思えるようになったのは、1970年代末になってからだだった。「鬼の浅野から仏の浅野へ」と移り始めた。区切りとして、「大学における講義についての教育方法論的考察（試論）」『琉球大学教育学部紀要第一集』第22集1978年）を書く。ありがたいことに、その後今日に至るまで、多くの所で引用紹介された。

そのなかで、私個人だけでなく、同僚たちとともに、大学教育改革に打ち込み始める。このあたりは、『大学教師奮戦記』（日本科学者会議教育問題委員会・原正敏・浅野誠編『大学教育における教育実践』第三巻「実践的大学教育論」水曜社1983年）に書いたので参照されたい。

研究生生活では、本来の専門分野である生活指導論で、1970年代末にやっと、自分らしいものを提起できるようになった。また、沖縄教育論にも少しずつ手をつけるようになった。このあたりのことは、浅野誠「生活指導、沖縄教育、大学教育、授業・ワークショップ、グローバル教育——研究の中間総括（文献の自己解題の形で）——」『中京大学教養論叢』第43巻第3号2002 に書いたので、参照してほしい。（2013年1月5日）

余談3 南風原の新川時代の暮らし 1974～76年

当時、50戸ぐらいしかなかった新川は、那覇・首里に近いが、とつても田舎だった。今では想像もつかないだろう。私たちにとって、自然の中で住み始める最初の機会だった。

元家畜小屋を改造した元倉庫を、手を加えて人が住めるようにした建物で借家だった。

家の前は、畑。野菜でも育てようか、と始めた。半分開墾作業のようなものだった。生まれ育った岐阜県の実家が兼業農家だったので、その時の記憶で始めた。

畑に畝を作っていると、近所の老人が、沖縄では畝はつくらないよ、とご指導を受けた。無口な方だったが、大変親切な方だった。ある時、「おいで」といわれたので、ついていくと、畑の水がめのふたを開けて、中に見えるハブを見せて下さった。玉泉洞などのハブを見たことはあったが、自然のなかに生きているハブをみたのは初めてだった。

小動物が多かったが、野良猫も多かった。赤ん坊がいるので、「住居侵入」が日常的な猫を追い出すのに、大騒動をしたこともあった。それで、犬を飼った。犬の名前にかつての片思いの人の名前をつけて、ひんしゅくを買った。

こういうところだから、地元つながりは盛んだ。住民の結婚式には、各世帯から出席することになっており、まだよく知らない方の結婚式にも出た。

囲碁が盛んなところで、正月は近所の家で、老人会を中心に囲碁三昧だが、私も加わった。このころ、囲碁4、5級だったか。

村の卓球大会があり、字の代表で参加。結構いい成績だったように思う。今度は、村の代表で、島尻郡大会に出場。当時は教員枠があり、島尻郡には教員選手が余りいなかった。ということで、今度は県民大会に、島尻代表で参加。田畑、砂川という元沖縄チャンピオンの選手たちに混ざって、なぜか私も出場している。南風原小学校だったか中学校だったかの体育館で練習があり、汗ではずした腕時計を忘れてきた。それをきっかけに腕時計をやめて、懐中時計に切り替えた。

南風原レストランで、村の費用で、激励だったか慰労だったか食事会があったことを記憶している。

当時首里にあった琉球大学からは近かったので、学生も遊びにきたが、「田舎」に喜んでいて。新川の集落は、大変小さく、一周するのに15分しかかからなかった。東端は断崖になっていた。今では、崖下に北丘小学校を中心とする住宅街が広がっているが、当時は何もなかった。今の県立病院や公文書館あたりはサトウキビ畑だった。道路も細い道路で、交通量も大変少なかった。買い物は、首里か兼城あたりまで出た。

10年ぐらい前、近くに行ったが、まったく様相が変わって、私たちが住んでいたところがどこなのかさえ分からなくなっていた。(2010年6月27日)

10. 沖縄生活にノリ始める

1974年春に南風原の新川に移住したが、当時の生活は、記事8と余談3で書いた。一つだけ補足すると、その借家には、庭というか畑がついていた。アタイグワーだ。初めて沖縄で農業のさわりをした。たいした収穫もないまま、2年間の南風原生活を終えた。

田舎だったので、自動車が必需品だった。安い中古車に乗っていた。二人とも外出する時は、私が原付に乗った。

この時期、いろいろな分野に初挑戦をした。大学院時代の指導教官だった稲垣忠彦さんは、御自身が宮城教育大学に勤務していた経験をもとに、教員養成学部には、いろいろな専門分野があり、それらとの交流が楽しいよ、と語っていたことを、まさにやっていった。

最初は、身体上の理由で、好きなスポーツが不完全燃焼だったので、体育関係の先生たちとお付き合いした。私の研究室前の所在を示すプレートには、「体育館」という選択肢を入れていた。今は、沖縄県立芸術大学がある所に体育館があった。体育の先生に頼んで、体育実技の授業に参加したこともあった。一番関わったのは、水泳だった。体育科には、平良勉先生という優れた指導者がおられた。自らも競泳の県記録を保持されておられたが、研究熱心指導熱心で、学校教師たちがつくる民間教育研究団体である学校体育同志会に参加され、そこで開発されたドル平泳法を教育学部の

学生指導にも導入された。私も、平良先生に誘われて、ドル平泳法の指導法を習う。1970年代末になると『水泳実習』に私も参加し、水泳指導の補助をするとともに、キャンプファイア指導を担当したりもした。

当時、体育科学生たちには学習熱心研究熱心者が多く、平良先生に励まされて、大学院進学し、帰沖後、教育学部教員になり、現在活躍中の人が多い。その学生たちは、私の研究室にもよく遊びに来て、討論をしたりもした。そのころの私は、教育学科教員ではあるが、「隠れ体育科教員」と噂されるほどだった。

当時、部局間対抗スポーツ大会という職員レクがとても盛んだった。野球、ソフト、バレー、卓球が主な種目だった。バレーのように、全く下手な種目を含めて、私は何の試合でも出た。大学全体の学生中心の運動会があったが、その時も、たくさんの種目に出た。

教育学部以外の教職員と、そこでたくさんの出会いがあった。先日も、20数年ぶりに出会った元同僚が、私に声をかけて下さった。私のそうしたところで騒がしく出場していたことをよく覚えておられた。私の方は、その方の顔は、印象にのこってはいえたが、お名前を失念していて失礼してしまった。

事務職員とは、その場でうんと知り合いができた。いまでも、当時一緒だった職員たちと組んで、沖縄県教職員卓球大会に「琉球大学チーム」として団体戦に、ここ5年余り出場し続けている。

恥ずかしい話を一つ。野球にしてもソフトにしても、私の定位置は捕手だが、たまには投手をすることもあった。ある時、教育学部玄関前で、ソフトのピッチング練習をしていて、手元が狂い、とんでもなく外れて、玄関の大きなガラスドアを割ってしまった。こんなエピソードだらけの時期だった。このころ、「青春してる」気分だった。20代最後の時期だ。(2013年5月15日)

II 長男の死 現場教師たちとの共同追求

1.1. 長男の病と死のなかで苦闘1

長男の病気と死をめぐることは、いまだに重い話で書きにくい。

先日、NHKテレビで、白血病で亡くなった方をめぐる人間関係を描いた1970年代の映画が放映されたとのことで、その映画に感動されたことをフェイスブックに書かれた方がおられた。

その時、私は、コメントで「その映画は悲しい話ではあるが、美しく描かれていており、その後長い間、白血病の患者をめぐるドラマが繰り返し登場し、悲劇を美しく描くトーンが続いてきた。しかし、それは患者の関係者をめぐる現実とは異なるもので、私は原作者に異議申し立てをしました」といったことを書いた。

その後、夢のなかで、当時の私たちのことを必死で説明している私が出てきた。そんなこともあり、少し書いてみたい。

1976年1月、長男は元気をなくしていた。終了間際の海洋博に家族旅行をしたが、いつになく頻繁に抱っこを要求した。2歳余りだし、いつもはよく歩いていた彼だが。

2月に入って病院で調べるが、しばらくよくわからず、経過観察をしていたが、精密検査が必要だった。3月になると検査の結果にもとづいて、病名が告知された。告知を聞いた恵美子が、私の職場に電話してきた。

全身脱力だ。今とは異なり、当時はほぼ不治の病扱いだった。

そして、紹介状をもって、専門治療のできる病院に行く。気が動転した私は、宛先的那覇病院ではなく、琉球大学付属病院に行く。現在は建て替えられて、赤十字病院になっている場所だ。その、8階か9階かが小児病棟だった。難病の子ども達ばかりが入院していた。

ともかく、事態に対応していくしかなかった。次男は生後9か月。そして、恵美子は、初定職として4月から沖縄キリスト教短期大学の専任講師に就任することが決まっていた。

病気に関しての専門書を読み、薬物治療で「寛解」に達する可能性は高いが再発するだろう。うまく行った場合は、長期のつきあいになるだろう、という情報だった。

いくつかの重大な決断をした。恵美子は就職をする。長男も恵美子も家族皆が前向きに歩もうという、気張った決断だった。

そのための次のような体制をつくる。

病棟に宿泊し看病する役と自宅で次男の世話をする役とを、夫婦で一日交代でする。

自宅にいる役は、次男を保育園に送り届けてから出勤。病院にいる役は、病院にきて昼間の世話をしてくれる卒業生が病棟に来てから、大学に出勤。

夕方になると、役割を交代して、職場から病棟に行き、世話をしてくれる人と交代して、夜の世話で、病棟に泊まる。もう一方は、職場から保育園に行き次男を引き取り帰宅し、食事や次男の世話をする。

この繰り返しだった。

土日になると、次男を連れて病院に行くなど、バリエーションが出てくる。

こんな具合だから、夫婦が出会うのは、週に1時間ぐらいというのがごく普通だった。

病院にきて昼間の世話をしてくれたのは、その年の卒業生だった。たまたまその年は就職未定だったので、協力してくれた。本当にありがたいことだった。彼女にとっても、強烈な体験のようだった。(2015年2月21日)

12. 長男の病と死のなかで苦闘2

前回書いた病院での長男の世話と自宅での次男の世話を夫婦交代で繰り返し、昼間は職場で、という生活は、なかなか難しいので、次男を一時期、宮古島の義姉家族が預かってくれるなどの援助があり、大変ありがたかった。

4月終わりになると、薬の効果もあり、長男は元気を取り戻してきた。「寛解」が近いと私は希望的観測をしてしまった。実際は、7月になって一時退院したが、8月半ばには再入院というものだった。

希望的観測にもとづき、寛解になって自宅にもどってくると、どういう生活をするのか、を考え始めた。二人とも職場に出かける昼間をどうするか、などと考えた。住み込みに近い形で、手伝ってくれる人が必要だろうと考えた。そこで、手狭な南風原新川の借家ではなく、もう少し広い自宅を購入することを思い立った。これが第二の決断で、結果として、小波津団地の20坪の住宅を購入した。

病院で、長期に「暮らし」していると、いろいろなことが見えてくる。そのフロアは、小児病棟だが難病患者ばかりだ。白血病の他に、腎臓関係の病気、水頭症、血液関係の病気など。多分、難病指定が多かったと思う。医療費は、普通の医療保険ではなく、難病対策予算から出されており、入院中は自己負担がなかった。医療保険で一部自己負担だったら、対応不能だったろう。

小児なので、付き添い家族がいることが多かった。私たちのように家族が毎日滞在する例ばかりでなく、家族を見かけることもないような患者もいた。家族が大変な難題に直面しているだろうな、と推測された。

出張の折、東京にある「小児がんの子どもを守る会」を訪問して、その時の助言「夫婦で団結して頑張ってください」がとても心強かった。実は、その後10年近くたったころ、この会の人、私が属する日本生活指導学会で問題提起をなさって、再会した。学会発表、会での話や関連書籍を読むなどで思い返すと、心当たりのあることが多かった。

難病の子どもを持つ場合、「家族崩壊」に類する例が大変多いとのこと。離婚、新興宗教の関与……。祖父母が、「こんな病気にさせたのは、親に原因がある」といって、事態をより困難にさせる例。だから、会の方は、「夫婦団結」を強調されたのだな、と思う。私たちも、危なかった。離婚しようがない困難があったので、離婚しなかっただけだ、といえるかもしれない。新興宗教の勧誘も受けた。新興宗教頼みになった家族の話も聞いた。入院中の子どもの見舞いがゼロという例の背後が読めるような気もした。

病院は、比較的軽いと大部屋、重くなると二人部屋、さらに個室と移る。水頭症の患者と同室になった時、その子の世話をするのは、医療者だけだった。私は、その子にいつも微笑みながら話しかけていた。すると、その子は、まなざして微笑みかえす。体長の半分ぐらいもある頭では、動かすことも難しかったが、その微笑み合いは、すごく印象的だった。

私は、小さい時から「切り紙」が得意技だったので、動物などの切り紙をつくり、病室の子どもたちにあげていた。息子には、当時流行っていた「四季の歌」をよく歌った。そんなことで『四季の歌』『翼をください』の二曲は、思い出してしまうので、今でも歌うのに抵抗感がある。(2015年3月21日)

余談4 西原小波津団地を買う

長男の退院の可能性がでてきたので、自宅療養の体制をつくることとなった。ということで、手狭な借家を出て、住宅を求めることにした。時間をかけて考える暇はない。沖縄県住宅公社が建てた西原小波津団地の二戸連に未契約物件があった。しかも「頭金なし」だし、価格も1000万円ちょっとだ。ということで、家を買おうと朝決めた日の夕方には、購入ということにした。大半がローンだった。

そして、すぐに引っ越した。引っ越し業者に依頼するほどの余裕はない。知人から2トントラックを借りて、私自身が運んだ。その前の新川への引っ越しも自分でやったが、どちらのときか忘れたが、荷台からステレオを落として、こわしてしまったことがあった。南風原から西原への道路は、詳細地図で「発見した」道を使った。未舗装で草が生えている。今では交通量が激しい道。高速道路の下を南風原ダムの横を通っていく道だ。

小波津団地で、退院した息子と二男と一緒に生活は2ヶ月ほどだった。病状悪化し、12月には息子は別世界へと旅立った。

その後14年間、この団地に住んだ。思い出深い生活の連続だった。(2010年6月29日)

13. 長男の病と死のなかで苦闘3

ようやく一時退院になり、家族4人での生活が始まる。二人が勤務する昼間、子どもの世話をどうしたかは、記憶が戻りにくい。長期になると思い込んでいたので、家で世話してくれて、可能なら住み込みでお願いするつもりだった。しかし、なかなか難しいことだった。試行錯誤しているうちに、再入院になってしまった。

苦勞した記憶よりも、楽しんだ記憶が残る。

四人で、東南植物楽園に遊びに行く。楽しく過ごした。その時写した写真が遺影となった。

子ども二人と一緒に風呂に入った。長男が次男に注意する場面を覚えている。

私が、研究会合宿で山原に出かけている間に、病院に診察に行つて再入院になったと、電話連絡を受けた。早速戻るが、「覚悟」をし始めた。

再び自宅で次男、病院で長男、と交代で世話をする生活が始まった。今回は、なぜか落ち着いて対応していた。息子は、身体がだるいので、いつも抱っこを要求した。3歳が近づいていたので、体重もかなりあり、抱っこしっぱなしは、なかなか大変だった。「お父さんさんも大変だから」といって説得して、抱っこ中断することもあった。我慢してくれた。

書かなくてはならない原稿を、ベッドを机代わりにして書いたこともある。息子に私の姿を見せておきたかった。

次男は次男で、親の事情がわかるのか、すごくいい対応をしてくれた。寝かしつけは、いつも背中をトントンと叩い

て、子守唄を歌ってあげていた。50～100回ぐらいすると、寝付いてくれた。もしかすると、寝付いたふりかもしれない。親の大変さを感じていたのかもしれない。当時、1歳になったばかりの次男本人に、記憶は残っていない。

恵美子は、日々の育児記録を書き続けていた。

恵美子にしても、私にしても、自分の気持ちをコントロールすること、コントロールせざるえないことに精一杯だったと思う。

9時消灯の病院で、まだ痛がる息子を抱っこして、廊下を歩いたり、息子が眠った後、じっと、一人で何かを考えたり感じたりした後、息子のベッドの隣の簡易ベッドで眠る日だった。

息子の「良いしるし」を感じ、願望を抱いたりすることもあった。でも、日々、良くない方向に向かっていることは感じていた。恵美子の高校同級生が、この病院の医師でもあったので、時々情報を寄せてくれた。薬剤部には、卒業生の配偶者が務めていた。いろいろな知り合いが、静かに励ましてくれていた。

具合がだんだん悪くなっていく中でも、小康状態がある。家族で病室で語り合っ、て、「しばらくは大丈夫」と思い、恵美子を残して、自宅の所用で帰った時、恵美子から電話があった。

最後に、家族団らんをして、息子はよかったのだろう。それで、さようならをする気持ちになったのだろう。

もう40年近くもなるのに、書いていると、なぜか涙があふれてしまう。(2015年4月21日)

14. 長男の病と死のなかで苦闘4

1976年12月13日、息子は長い旅に出た。

その時、息子の病理解剖に立ち会うと私は叫んだ。何かを解明したかった。しかし、恵美子が抑えてくれた。私が耐えきれないことを知っていた。

告別式は、大学の同僚たちがすべて手配してくれた。大変ありがたいことだった。

首里の禅寺で営まれた葬儀には数百人もの方々が集まってくれた。通夜にもたくさんのかたがこられた。牧師の方が祈りをささげてくださった。いろいろな信仰の方々が、宗派を問わず祈ってくださったのだ。

12月19日は、その息子の誕生日だった。家族でお祝いをした。

年末年始は茫然と暮らしていた。喪中欠礼の葉書を出したので、年賀状もこない寂しい日々だった。その経験もあったので、翌年からは、年賀状から「年末年始通信」へと徐々に移していった。そのスタイルは、いままで続いている。

たくさんの方からたくさんの香典をいただいた。よくあるスタイルの香典返しではなく、息子との生活の記録を小冊子にして、みなさんに送った。恵美子が息子との日々の育児記録を書いていたので、それをベースにした。タイトルは「裕樹は生きている」とした。この冊子には、たくさんの方から御感想をいただいた。

「不条理」を感じつつ茫然とするなかで、淡々と暮らしていく。でも、息子と息子との生活をエネルギーとして蓄え、少しずつ、いろいろなことを再開していった。そんななかで考えたことを、「無題」というタイトルで雑誌(『生活指導』1977年8月号)に書いたこともあった。そして、1年ぐらいしてから、何かに取りつかれるようにして、爆発的に仕事をし始めた。

そのころの私は、何かオーラを出していたのか、学生を中心に、いろいろと悩み事をためている人が近づいてきて、相談を受けることも多かった。スピリチュアルの世界で、多様な人々の生き様を知るのもそのころだった。

この体験は、私たちに大変な試練を与えてくれたが、それが私たちに豊かさを与えてくれたのかもしれない。しばらく子どもをつくり育てる気分にはならなかったが、3年たって、ようやく第三子を得ることができた。(2015年5月24日)

15. 卒論指導 鬼の浅野からの卒業へ

流れを少し変えて1970年代の卒論指導のことを語ろう。そのわけの一つは、つい先ごろ浦添市副市長に選任された名護正輝さんが、実は私の卒論指導第一期生だからだ。

温厚な人柄と実力でファンも多そうだ。「そうだ」と書いたのは、卒業以来ほぼ40年近くたった2年前の西原町史出版祝賀会で、浦添市立図書館長として参加していた彼に久々の再会をしたのが、ただの一回だけの出会いで、詳しくは知らないからだ。人づてのうわさで、信頼が厚いとのことだ。今は忙しそうだから、何年かしたら、お会いする機会があるだろう。

1972年、沖縄大学に赴任してすぐに琉球大学非常勤講師も務めたが、琉球大学の先生に卒論指導を依頼されたが、それが名護さんだったのだ。数回お会いして指導したが、きちんとした卒論だったと記憶している。

翌1973年には琉球大学に転任し、毎年2～3名の卒論指導を担当した。卒業後は、名護さん同様、お会いしていない方が多い。新聞報道などで、校長就任を始め、各地での御活躍を聞くことはあるが、消息を知らない人も多い。

あのころは、今から言えば、大変厳しい〔指導〕をしていて、まさに「鬼の浅野」であり、再会希望の方は多くないだろうと思う。それでも、何人かの方とはお会いする。〔厳しい指導〕をめぐりぬけた卒論は、高レベルのものが多かったと思う。わざと留年して、立派な卒論を仕上げた学生もいた。佐久川紀成さん、伊波一男さん、盛正弥さんをはじめ、1977年ごろまでには、20名近くを指導した。

でも、毎年、泣かせてしまった。私の担当学生だけでなく、他の学生についても、卒論発表会での、私の質問で泣いてしまった学生が多かった。当時の、私の教育活動の重点の一つは卒論指導に在り、必要な水準を要求したからだ。

だから、私の所属する教育学科・教育学専修の学生には、「鬼」扱いで距離をとられることが多かった。「鬼」を知らない他学科の学生の方が遊びに來たり、指導を求めて來たりしていた。琉球政府立時代「初教」と呼ばれた学科に入学した学生たちもよく遊びに來て、卒業後、研究会で同席することも多かった。なかなか優秀な教員になっていった。校長を定年退職後、現在琉球大学で教えている玉城きみ子さんも、卒論へのアドバイスを求めに來ていた。体育科からは大挙して押しかけてきた。そのころの学生のうち何人かは大学院に入り、その後琉球大学などの教員をしている人が何人もいる。

卒論に話を戻すが、卒論として必要な水準になかなか達しない学生をどうやってサポートしていくか、ということの工夫が当時の私の教育活動のテーマだった。その指導のありように、ある程度のメドが立ったのは、1970年代末だった。今、50代半ばになり、沖縄だけでなく全国各地で活躍している卒業生たちだ。卒論を書くのは個人だが、チームで協力激励し、先輩が後輩を指導援助するというありようが生まれてきたのだ。それは私自身の学生時代、学科の先

輩たちとの共同研究、また卒論への先輩たちのアドバイスが大きかった経験が生きていた。

そして、問題意識を持って、研究領域を絞ることから始めて、卒論完成にいたるまでの流れを具体化していったこともあった。

そのころ、首里キャンパスの最後の時代だった。移転完了した旧農学部「実験室付き研究室」の広いスペースが与えられ、学生たちが集って共同研究的雰囲気を持ちながら取り組みはじめた。

こうして、そのころから「浅野研究室＝浅野研」という呼び方が定着し、研究室の世話役めいた学生、時には「主」めいた学生が誕生してきた。10数年前に手紙で再会した都留さんなどもその一人で、当時、東京で指導的教員をしておられた。そのころから、研究室合宿が定着し、希望ヶ丘の貸別荘などで、充実した学習生活を送った。1970年代末の話だ。

1980年代に入ると、3、4年生メンバー合わせて、常時10名内外が在籍し、メンバーたちの自主的運営の性格が濃くなっていく。私が研究のため東京に離れていた1983年の一年間も、メンバーたちの自主運営で進行していた。私は、通信添削という形で関わるだけだった。この年の卒論生は、2本も卒論を書いた鈴木庸裕さん（福島大学教授を経て、現在日本福祉大学教授）を含め、7名の卒論生が立派な卒論を書くだけでなく、3年生の卒論準備も立派にしていた。

このあたりのことは、『大学教師奮戦記』（日本科学者会議教育問題委員会・原正敏・浅野誠編『大学における教育実践』第三巻『実践的の大学教育論』水曜社1983年所収）に詳しく書いたとおりだ。（2013年6月9日）

16. 音楽への挑戦 中村透さんとの出会い・協同

連載10では、所属していた琉球大学教育学部の体育科に出入りして、水泳指導など他分野のことを大いに学んで充実したことを書いた。

体育の次にアプローチしたのは、音楽だった。私より2年か3年か遅れて教育学部に赴任した中村透さんは、同じ生まれ年だが、彼が赴任する前に、音楽教育専門の伊志嶺朝次先生から「元気がいい人がくるから紹介しよう」と予告されていた。伊志嶺先生は、恵美子と同じ宮古出身ということもあって、いろいろと可愛がって下さった。

ということもあって、中村さんとは彼の着任そうそうからいろいろと親しく語り合う、飲み合う？関係ができた。同じ年に赴任した目崎茂和さんとも、その時に顔見知りになった。

中村さんと飲み合ったときに、私はずみで「あなたの授業にでる」と話してしまった。それがその後の長い歴史の序曲になった。

私はオンチ（硬くは「調子はずれ」というそう）で、いろいろと「武勇伝」があった。小学校音楽部の時の二部合唱での失敗、高校時代行事で校歌を歌う時、皆が振り向くので、その時は声量の大きさだと思っていたが、あとで調子はずれが目立ったことに気付く……

この状態を何とかしたいとの希望と、音楽無知を克服したいとの思いが隠れていた。と同時に、体育科との付き合い同様、多分野の世界をのぞき、体験したかったことがある。

彼が担当する「音楽通論」は、小学校課程対象の教科専門科目で、私の授業を受講している学生もたくさんいた。だから、恥ずかしさもあったが、未体験ばかりのことで、楽しかった。ベートーベン第9番のダダダーンの話はとても新鮮だった。

講義だけでなく、実演もあった。授業終盤に近いある日は、「黒き瞳」の合唱だった。私も懸命に歌った。その時、ピアノ伴奏をしていた中村さんの伴奏が突然とまる。いいにくそうに「1オクターブずれたひとがいる」とつぶやいた。間髪をいれずに「浅野先生やないけ」と九州なまりで声を出した受講生がいた。実は私の卒論ゼミ生だった。恥ずかしさの頂点だった。でも踏ん張って、最後の授業まで出席しとおした。

「音楽通論」が終了後、中村さんと私とで「反省会」をした。その時、私は、「あなたが私の授業に出る、というのではなく、いっしょに授業をつくろう」と提案。1978年の「指導技術演習」だ。そのことについては「大学教師奮戦記」（日本科学者会議教育問題委員会・原正敏・浅野誠編『大学における教育実践』第三巻『実践的大学教育論』所収）に詳しく書いたので、繰り返さないことにする。

その後、二人だけでなく、多分野の教員たちとの多様な協同実践が、続いていく。たとえば、授業論専門の藤原幸男さん、英語教育専門の砂川勝信さんと一緒になって授業をつくったが、その素材に、3人が専攻していない体育のマット運動を取り扱った。マット運動が下手な3人がマット運動を指導するのだから、面白いものだ。無論、平良勉さんなどの体育専門家の援助をいただいたが。

これらの協同は授業だけでなく、多様な分野で展開され、1970年代末から80年代初め、琉球大学教育学部は、教育改革の嵐が吹く。それは、90年代以降の各大学どよく見られた「外圧」による展開ではなく、自主的であった点に特徴があろう。（2013年8月13日）

17. 結婚式創造・文化活動創造

沖縄の結婚式は、新郎新婦が中心となり、とりまく人たちの多様な表現活動があり、とても魅力的だ。沖縄にきて間もないころ、恵美子の後輩で県庁幹部を歴任したかたの結婚式の司会を務めた。自動車工場の広い会場中央に豚の丸焼を据えて、進行していった。今の私には、その豚の強烈の印象ばかりが残っていて、どんな司会をしたのか、記憶からとんでいってしまっている。

実は、沖縄に来る以前にも、友人の結婚式の司会をしたことがあるし、私達自身の結婚式も、私達自身が企画演出したようなものだった。

その後、1980年代前半に至るまで、司会・演出などとして結婚式づくりにかなりのめり込み楽しんだ。80年代後半からは、司会演出ではなく、仲人とか祝辞を述べることへと役目が変わり、最近では乾杯の音頭の役目もするようになった。

このような結婚式への「のめりこみ」には、全国の生活指導実践教師たちの文化創造実践の大きなうねりの刺激があった。たとえば、1970年代初めに、家本芳郎・中村勝彦さんを中心に豊かな行事創造を展開していた、横須賀の池上中学校を訪問参観したことは、強烈な刺激になった。また、集団遊び・合唱・群読などの実践も強い刺激だった。

沖縄に移り住んだ私は、それらの実践を、書籍・スライドなども使いながら、沖縄の教師たちに紹介していった。たとえば、富田哲さんをはじめ、エネルギー溢れる教師たちが集まって実践創造していた那覇中学校では、運動会の種目やマスゲームに新たな創造の息吹が生まれた。1973年秋の運動会では、私はビデオデッキをかついで、それらを撮影した。まだ8ミリが主流であった当時、ビデオは珍しいもので、琉球大学教育学部が購入したオープンデッキビデオ

を、3人くらいの学生の運搬力を借りながら撮影した。15分で1巻が終了する。その記録は、いまも、琉球大学教育学部のどこかにあるはずだ。

卒業式を含め、演壇や壁面を貼り絵などの手法での大壁画で飾るというのも、沖縄に劇的に普及した。今でも広く行われているこの取り組みは、沖縄では1974年3月のいくつかの卒業式がスタートだと思う。

また、沖縄生活指導研究会の合宿夏期研究大会では、ステージ・オブ・ザ・オキセイケンという集団表現を試みた。私がシナリオを書き、参加者全員の協同創造の形で進めた。そんなことも刺激となって、多くの教師が自らの学校で創造的な文化活動を展開した。

そうした蓄積は、1980年に刊行した『文化活動と集団づくり』（詳細は連載40、41で紹介する）に反映している。

こうした実践を、自分でもさらにいろいろとしてみたくて仕方のなかった私は、友人の結婚式の演出が絶好の機会だと考え、挑戦した。その最初は、1975年頃だったと記憶している。研究会仲間の教師カップルの結婚式の演出&司会だ。

会場は嘉手納ロータリー近くのホールで、国道58号線から会場までの通路脇に、ヒマワリの折り紙を飾った。会場正面の両脇には、二人が担任するクラスの子どもたちが作成した、巨大なちぎり絵を貼った。スタートは、「天国と地獄」から始まる一連の音楽をバックに、自作の詩を私が朗読するなかで、新郎新婦が入場するなど、思い切った（無茶苦茶な？）演出で展開した。

その後、琉球大学教育学部での、同僚の結婚式4組（職場結婚カップルもいるので6名の同僚）の演出司会をした。そのうち2回は、中村透さんとの協同「作品」だ。（2013年9月26日）

18. 琉球大学教育学部でいろいろなことをする

前回、同僚の結婚式の演出司会を重ねた話を書いた。

当時の琉球大学教育学部は、国立移行間もないこともあり、移行前から教育学部所属の方、法文学部など他学部から移ってこられた方、新規に採用された方、様々だった。国立移行前と後では、準拠する基準が変わったことに伴うものだった。私が属した教育学科については、お二人が法文学部所属に移られた。新規採用は、私一人だったが、しばらくして定年退官された方の補充で新たなメンバーが加わった。

こんな風だったが、70年代後半ともなると、ひとまず落ち着いた。学部全体でいうと、国立移行後に加わったメンバーがかなりの数になったが、若い人が中心だった。私もそうだが、20代の方が10名前後おられた。ということもあって、飲み会やレクをよくした。そこには、元から居られた方も、沢山まじりあった。ということで、60代から20代まで、多様な付き合いがたくさんあった。私は、50代60代の方々に結構遊んでもらったようだ。

旧教育学部の建物は、現在の首里城南殿敷地にあった。狭くて、個室の研究室をもてたら、超ラッキーだった。二人部屋はごく普通だった。私は、2～3年間、旧トイレへの廊下を間仕切りした部屋に居た。間仕切りは、格子だったので、使用不能トイレ付牢屋だと、笑っていた。こんな状況を写真にとり、琉球大学教授職員会で、当時の文部省に出かけて窮状を訴えたこともあった。この会の役員は持ち回りのようなものだった。その時、役員をしていた先輩には、沖縄民俗学の巨匠比嘉政夫さん、EM菌で著名な比嘉照夫さんもおられた。

そんな「貧しい」状態だったが、教職員間相互の距離は近かった。昼休みになると、廊下で卓球をしあったりした。

そして、学部内はもちろん、他学部といっしょのレクなどの交流機会が多かった。

部局間対抗スポーツ大会（バレー、野球、ソフト、卓球）は、恒例化していた。その逸話は沢山残っている。教養部対教育学部の野球試合は、大ドラマだった。鉄壁の松野・池田バッテリーを擁する教養部チームに、我が新屋・浅野バッテリーを擁する教育学部チームが勝利したのだ。英語科連合チーム（ユニコーン）と教育学部チームの野球親善試合もあった。さらに、教育学科対教育心理学科対抗ボーリング大会も楽しんだ。

スポーツだけでなく、囲碁大会などもあった。囲碁が強く教えて下さる先輩教員もおられた。

こんな関係は、教員相互だけでなく、職員と教員間にもあった。当時の事務長・会計係長・教務係長といったかたには、遊びも仕事も大変お世話になった。

飲み会もよくあった。教育学科教員での飲み会は、年に何回もあった。若手同士もよく飲み合った。当時は首里キャンパスなので、飲みに行く環境も、今の西原キャンパスとは大違いだった。

そんなつながりの深さが、学科学部を越えて広がっていたので、私が結婚式の企画司会をやるのは、別に特別のことでもなかった。

このつながりの深さは、大学の業務でもあらわれていた。〇〇委員会でのつきあいも結構楽しんだ。ある委員会では、行政的な仕事が苦手な委員長である美術科の先生のお手伝いをしたら、任期終了後、絵を寄贈された。

最初のころの委員会で一番思い出深いのは、西原キャンパスへの教育学部移転構想委員会だ。面積配分基準がなきに等しい状態だったので、自主的に配分をし、かつ新たな教育学部にふさわしい建物のプランをする必要があった。5～6年にわたる長期の仕事だった。安次富長昭先生、小島瓊禮先生などと一緒に、他大学調査にも出かけた。建築家でもある鈴木雅夫先生の御活躍もあり、当時の大学としてはユニークな建物となった。

現在の建物には、当時の思い出がいっぱいつまっている。

無論、研究をめぐっても、いろいろと共同の取り組みがあった。大学の授業についての研究会 沖縄の学力問題についての研究会などもした。印象的だったのは、「複式学級指導法」を立ち上げるための研究会だ。（2013年10月22日）

19. 沖縄教師たちとの共同研究のスタート

私は、1969年の大学院進学時に、生活指導研究の道を歩むことを選択したが、博士進学の際には、小中学校教員を中心に研究と実践をすすめていた全国生活指導研究協議会（略称全生研）にかかわって、学習研究を進めることにした。そして、その研究大会に参加するだけでなく、各種研究会にもかかわりたいと申し出たら、その常任委員になることになってしまった。その時、神保映さん、大和久勝さんなども一緒だった。

ちょうどそのころ、沖縄出身の恵美子との出会いがあり、将来を決めていた。そのこともあって、1971年の全生研大会では、沖縄から参加してきた宮城ヨネさん、平川節子さんたちとも挨拶をかわしたが、特別の思いを感じた。

翌1972年4月、沖縄生活を始めると、さっそく両先生と連絡をとりあった。当時は、連絡をとることも大変だった。連載4にも書いたように、電話が引けなかったので、宮城さんは電報で私に連絡を取ってきた。宮城さんは北部におられたし、平川さんは中部だった。わざわざ那覇までおいでいただいたり、私がバスで中北部に出かけるという形で、

研究会に参加した。沖縄生活指導研究会（略称沖生研）は、1971年にスタートしていたので、それに参加して、いろいろな研究会をもちはじめ、そこに共同研究者として参加したのだ。

全生研の研究スタイルの特徴の一つは、現場教師の実践記録を共同検討することにあった。しかし、当時の沖縄教育界では、実践記録を書く経験がほとんどなく、書いても行政報告のようになってしまう。口頭報告が、実に生き生き語られるのと対照的でさえあった。

秋になって、富田哲さんをはじめとする那覇の教師たちとの出会いがあった。那覇中学校を中心として、若い積極的な教師たちが特別活動実践を精力的に創造していたのだが、かれらとの出会いだ。記憶がもう鮮明ではないのだが、那覇中学校に私が出かけて、話が始まり、場所を変えて夜中過ぎまで語り合った。いわば「意気投合」だった。その後、頻繁に会い研究討論・実践構想づくりを協同で展開していった。富田さんの自宅が私たちのアパートから徒歩5分という至近距離だったこともあった。

こうして、那覇地区の特別活動研究グループが大挙して沖縄生活指導研究会に参加し、沖生研の研究会は、数十人が参加する大所帯になった。沖生研に参加した那覇の教師に中学校が多かったこともあり、以前に私自身が訪問見学したことがある家本芳郎さんや中村勝彦さんなどが築きあげた横須賀池上中学校の実践を私が紹介したこともきっかけになって、生徒たちが中心になって取り組む行事儀式づくりが、那覇一帯に広がっていった。いまでも多くの学校で行われている貼り絵による大壁画などは、そのころ広まったものだ。

沖生研だけでなく、高生研、歴史教育者協議会、作文の会、体育同志会など、いくつかの民間教育研究団体とも付き合い始めた。当時の沖縄教師たちは、全国的な実践を飢えるように学んだ。その紹介役の一人に私になったようなものだった。

そのころから、多様な現場教師との共同研究に、月に1～2回参加するようになり、それが1990年まで続いたのだ。

こうした中で、「沖縄は遅れている。本土に追いつかなくては」という強い焦りの声を感じるとともに、沖縄のなかにも優れた実践があることを次々と発見していった。

そのなかで、「沖縄の教師が自信を持つ必要がある」という希望をもちつつ、沖生研紀要「民主的な子どもを育てるために」が1973年に発刊されたが、その編集実務を富田さんとともに私が担当した。第一号は1000冊印刷したが、それが一カ月もしないうちに、品切れになった。それほど、沖縄の教師にとって衝撃的なものとなった。

その第一号に、私は「民主教育の探究と集団づくり」という小論を書いた。また、同文をこれまた発刊したばかりの『沖縄思潮』第2号1973年にも掲載した。この編集委員会で、編集長大城立裕さん、編集委員嶋津与志（大城将保）さんにお会いした。

こうして沖縄教育に深くかかわるようになったのだ。（2013年11月20日）

20. 沖縄教師たちとの教育実践研究 沖縄教育史研究へ

前回書いたように、専門分野である生活指導に限らず、多様な教育現場とかがかわるようになったが、それは、多様な教育実践分野の学習を必要とすることになる。また、いくつかの分野の授業を担当することも、新たな学習が要求された。そのためか、この時期は、大学院時代以上に読書したかもしれない。学部大学院時代に読んだ本を、再読してようやくその意味がつかめたものも多かった。

だから、1970年代半ばの時期は、大学院のやり直しだったかもしれない。もっとも厳しい学習は、全生研大会に参加して、現場教師から「こうしたことにはどう対応したらよいか」と迫られることに回答できるだけの学習が求められたことだった。

また、当時もしばしば話題になっていた「沖縄の学力問題」についてのコメント要請に応える事も重要な機会だった。そんななかで、沖縄教育について考え発言し書くことも始まった。沖生研紀要に書いた「地域否定の学校から地域創造の学校へ」（1975年）もその一つだった。

また、私が琉球大学で担当した科目に「日本教育史」があったが、そのことは必然的に沖縄教育史への言及を求めるものともなった。当時の教養部のオムニバス形式の沖縄論科目で、沖縄教育論を一回講義したこともあった。

また、卒業論文で、沖縄教育にかかわるテーマを取り上げる学生を指導することも、毎年のようにあったことは、以前のこの連載で書いた。そのなかで、とくに佐久川紀成さんの卒論は出色のもので、彼と私との共同論文に発展していった。「沖縄における置県直後の小学校設立普及に関する研究——地方役人層の動向を中心にして——」（琉球大学教育学部紀要第一部第20集1976年）がそうで、その後繰り返し引用される文献になった。

そのころ、科学研究費を得たこともあって、沖縄各地への資料収集に出かけた。学校史料は戦争で喪失したものが多く、離島や北部の学校には、戦前からの「学校沿革誌」がいくつか残っていた。それを撮影やコピーで取得した。たとえば、喜如嘉小学校沿革誌などは大変貴重なものだ。

その喜如嘉あたりには、学生時代の恩師でもある大田亮先生とともに、高齢者からの聞き取りに出かけたこともあった。明治30年代40年代に小学生であった人たちが、『上』からの就学督促にどう対応したかという話だ。100%ウチナーグチなので、佐久川さんに「通訳」してもらった。

こんな風に、沖縄教育研究、沖縄教育史研究もスタートした。

こうして、沖縄での私なりの教育活動、研究活動などが順調にスタートしたと思うそのころ、私たちにとって大変衝撃的なことに会うことになった。子どもの入院と死である。

病院での看病、自宅での二男の子育て、そして仕事、この三つを、多くの人々の援助を得ながら進めていった。とても多くの事を考え学んだ。だから、この時のことは、その後の人生、生活、研究、教育、あらゆる面で決定的な位置を占めている。

1977年から1978年へは、虚脱状態から、苦難体験を糧にした模索へと移っていく時期だった。それ以前は、「肩に力が入った」生き方をしていたが、肩の力が脱けてしまっていた。そして、新たな世界の発見創造へ少しずつ移り始めた。1979年ごろになると、爆発的に動き出す。（2013年12月10日）

2.1. 沖縄生活開始ごろの沖縄教師との出会い 現場教師との共同研究1

1972年の沖縄生活開始当初から、学校現場・教師たちとのつきあいは深かった。1970、80年代を通して、日常的に出かけていた。

印象的なことを書き綴っていきこう。もう30年以上前だし、43年前の「復帰」前後のことまで含むので、それらは教育史研究・沖縄史研究の対象になり始めている。いずれ、こうしたことを研究する人たちが登場することを期待した

い。史料的にも、「民主的な子どもを育てるために」「おきなわの教育実践」をはじめ、多くが残っているし、当時活躍した人も、現在60～80代で元気な方が多く、インタビューできるだろう。

だから、ここでは私の個人的なエピソードを中心に描く。

1) はじめての沖縄教師たちとの出会いは、1971年8月の全国生活指導研究協議会（略称全生研）神奈川湯河原大会でのことだ。その年、私は博士課程一年で、研究の軸足の一つを全生研に置くことに決め、その大会で全生研常任委員に選ばれた。

ちょうどそのころ、恵美子との出会いがあり、将来構想として、沖縄を視野に入れようかどうか考え始めた時だった。

その大会には、羽地中の宮城ヨネ先生、コザ中の平川節子先生をはじめとして、1971年に結成したばかりの沖縄生活指導研究会（略称沖生研）に集うかなりの数の沖縄教師が参加していた。その折、自己紹介しあった。けれども、翌年から沖縄生活を始めるという話は、まだ出ていないころだ。

秋から冬に入るころ、沖縄就職の話が出始め、3月末に急に現実化することになり、連絡を取り合い始める。

2) 1972年4月に沖縄生活開始そうそう宮城先生と連絡をとりあい、私が北部に出かけたり、宮城先生はじめ何人かが那覇の我が家を訪問されたりした。

そして、夏の沖生研大会に参加し、多くの教師たちと実践について語り合い始めた。夏休みには自動車免許を取り、自動車を購入したので、秋からは、頻繁に各地の研究会や学校現場に出かける生活が始まった。

3) 富田哲さんをはじめとする那覇の教師たちとの出会い

1972年の秋、きっかけは忘れたが、那覇中学校にでかけ、教師たちと語り合う機会があった。その教師たちは、富田哲さんをリーダーとする那覇特別活動研究会の方々だった。場所は那覇中学校宿直室。強烈に熱心な質問が寄せられ、その後、栄町のさしみ屋で夜半まで語り合った。

後日談で、私と全生研の研究実践を試す狙いを持っておられたことを聞かされた。テストだったのだ。そのテスト「合格」後、これらの方々には沖生研に合流して、研究・実践活動を進め始めた。沖生研は、量においても質に置いても一挙に倍になった感じだ。研究会を開けば50～100人という規模だった。

4) 「本土」には、民間教育研究団体があり、教師たち自身が手弁当で研究・実践活動を展開し、水準が高く注目すべき活動を展開していることが、沖縄でも1960年代半ばころより知られ始めた。そして、「本土」から講師を招いて話を聞き、授業などを実演したり、あるいは「本土」まで出かけて研究会に参加する動きが、1970年頃より活発になる。

とはいえ、パスポート・ビザが必要な時期の往来は大変だった。米軍の発行するビザを取得できない人も多くいた。それが「復帰」後「自由」になり、往来が激増する。

1)～3)は、このような歴史背景のなかで進んでいたのだ。（2015年11月25日）

2.2. 各地に出かけ、実践に直接かかわる 現場教師との共同研究2

5) 各地に出かけ、実践に直接かかわる

前回述べたような流れのなかで、沖縄生活1年もたたないうちに、多くの現場教師、現場実践と出会い、意見交換やアドバイスをするようになった。当時の沖縄の学校と教師たちは「飢えのなかで、貪る」ような感じで、私と出会っていた。

私の記憶のなかに強く残っているのは、富田さんとの出会いをきっかけにした、彼の勤務校であった那覇中、浦添中での実践であった。

沖縄移住直前に実見した横須賀池上中学校の行事などの取り組みを紹介していった。家本芳郎・中村勝彦さんたちが展開していた実践だ。集団演技や競技などの運動会の企画、貼絵や合唱などの卒業式に企画などだ。中村勝彦さんは、講師として来沖され、その実践紹介は、沖縄教師に強いインパクトを与えた。私は、御願いで池上中実践を紹介したスライドを譲り受け、各地で上映した。数十回に上っただろう。

また、家本さんの『集団遊び』『続集団遊び』も紹介した。現場教師にもなりたかった私自身の希望もあって、大学授業だけでなく、沖生研研究会で、さらには小中学生対象に、私自身がそれらをテキストにして集団遊びをしまくった。この2冊に紹介されている集団遊びのほとんどはやったと思う。

そんな中で、しみいるように、これらが全沖縄に広がっていった。当時は「全琉」という言い方が多かったが、

その時の痕跡が、40年以上たったいまでも残っているのは、卒業式などでの「大型貼り絵」や集団遊びの一つの「人間知恵の輪」だろう。

こんな風にして出かけたのは、沖縄本島だけではなかった。宮古八重山にもでかけていった。数年前に八重山に出かけた時、当時実践を語り合った黒島精耕さんや野田純一さんと再会し、旧交を温め合った。

こんななか、沖生研には、沖縄各地に支部ないしは支部に準じたものができ、各地の研究会にでかけることが多くなった。加えて、学校単位の研究会、さらに教職員組合主催の支部ごとに開かれる教育研究集会にも出かけた。数年の間に、ほぼすべての支部に出かけ、記念講演をした支部も沢山だった。沖教組に加えて高教組もあるので、かなりの数になった。

出かけ先や研究会の集まりなどでは、実践に役立つ書籍が大量に販売した。私の車のトランクには、日曜大工で作った箱に100冊ほどの書籍を常時入れておいた。仕入れ価格と販売価格の差額は、沖生研の活動に供した。

6) それらの中で、本土の実践の追っかけばかりではまずいと感じ、沖縄自身の実践を作り上げることを重視すべきだと考えるようになり、いろいろな提案と実践を展開していく。(2015年12月20日)

23. 沖縄の実践の発掘 沖生研紀要の発刊 現場教師との共同研究3

教育現場のいろいろなところに出かけて1年余りで、どこにいても、私を「本土の進んだもの」を紹介してくれるという眼差しに出会った。その「本土」というものには、いろいろとあった。教育界でいうと、当時対立が激しかった文部省側のもの、民間研究側の双方が含まれていた。「復帰」までは、文部省側のものが圧倒的だったが、「復帰」後民間側のもが入り始めたが、その紹介役としての私が期待されたわけだ。

それはそれで一定の意味があるが、教育実践というのは、外部から紹介移植するような形で進むものではない。それ

らを参照しつつも、教育者自らが、直面する事実をスタート点にして創造していくものだ。

そんなことを思いながら、本土の民間研究を紹介する役目にとどまらないで、沖縄の自らの実践を創造するような姿勢を励ますためには、どうしたらよいか考え始めた。その思いは、沖生研の中心的な方々と共有した。

そこで、自分たちの実践記録で構成する雑誌を作ろう、ということで話がまとまった。話題が出たのは、確か1973年8月ごろだったが、それから、実践記録を書いてもらい、11月5日には、沖生研紀要第一号「民主的な子らを育てるために」B5版83ページが1000冊発行された。

7本の実践記録と、実践分析、論文、諸論7本で構成された。

沖縄初だと思われる学級通信を発行した記録、班や班長会の指導、班学習の指導、生徒会の指導など、多様な実践記録がならんだ。当時すでに活動していた沖縄高生研からも実践記録が寄せられた。また、那覇中学校「兄弟学級で築く運動会」も掲載された。執筆者は、いまでは、70歳前後から80歳前後で、沖縄の教育界で大きな活躍をされた方々たちだ。

これらの実践記録は、その後の沖縄の教育実践の発展にとって、大きな一里塚になるものだった。

私は、「民主教育の探求と集団づくり」という小論を書いた。そのなかで、当時蔓延していた体罰への対処について、体罰は、民主主義に相反し、軍国主義をめざすものであり、民主主義を目指す教師が体罰を使うということは、力量不足を示すものだ、という角度から体罰脱皮を訴えた。それは、あまりにも蔓延している体罰を克服するには、体罰教師を批判するだけでは解決できないこと、それに代わる民主主義的な教育方法を提示することが大切だと考えたからだった。

この作成過程は、実は大変だった。というのは、執筆者の大半が実践記録を書いた経験がゼロに近かったからだ。報告を書いた経験はあるが、行政的な報告が中心だった。

そこでまずは、子どもたちの具体的なことを書きだしてもらおうこと、それに対して、教師としてどう指導したか、ということを書いていただいた。執筆過程で、何度も、私との間で往復をした。加筆数回が普通だった。

そんな労苦の中で生まれただけに、喜びが溢れるもので、沖生研会員があちこちで、「売りまく」り、わずか2週間余りで完売となった。

そして、大きな反響が生まれた。このことで、沖縄の教師たちが自信をもち、「進んだ本土、遅れた沖縄」という捉え方から、たとえ少しであったとしても、卒業しはじめるきっかけになった取り組みだったように思う。

思い起こすと、実践記録執筆で同じような添削・加筆作業を繰り返す経験をその後二度やった。一つは、1983年に大学教師の実践記録を出版する際、大学教師の方々に実践記録を書いてもらった時だ。もう一つは、2000～2001年にカナダと日本の教師たちに、グローバル教育の実践記録を書いてもらった時だ。カナダの教師たちに実践記録のイメージがないので大変だった。しかも、英語でのやり取りだったので、個人的にも大変苦労した。

いずれも大変な作業だったが、私の注文に応じてくれた執筆者の方々に大いに感謝しなくてはならない。(2016年1月4日)

24. 実践記録を書き、共同検討するサークル・研究会 現場教師との共同研究4

前回述べたように、実践記録を書いた経験を持つ人はゼロに近かった。レポートを書くとは行政的報告文書になってしまうのだ。ということで、当時、実践記録を書く呼びかけとサポートを頻繁にしていた。そして、研究会は、書いた記録を共同検討することを中心にすえた。

というのは、そのころの研究会のイメージは、講師が講演をして、参加者をそれを聴くことにとどまることが多かったからだ。レポートが出された場合には、2～3人のリーダー的参加者による質問と、それへのレポーターの応答、そして講師による「講評」で閉じるという形が多かったのだ。その質疑や講評の基準は、学習指導要領などが使われた。

そのため、実践検討というよりも、学習指導要領にどれだけ沿っているかいないか、ということに陥ってしまいがちだった。沖教組（沖縄県教職員組合）が開く教育研究集会（全県レベルでも支部レベルでも）でも、そうした傾向が強かったのだ。

そうではなく、自分たちの実践をスタートラインにし、その検討を通して実践の成長を作りだそう、と呼びかけたのだ。そして、それをレポートを書いた当の個人だけでなく、検討に加わった参加者たちの共有財産にすることを願った。

そのために重要な場として、実践記録を検討しあうサークルをつくることを呼びかけた。しかし、このようなサークル活動を体験した人がいないなかでは、私の一人吠え状態がしばらく続いた。それでも、1970年代後半になると、ぽつぽつとサークルめいたものが登場し始める。そうしたところへ出向いて、実践記録の書き方や共同検討のサークルのイメージを共有できるように働きかけていった。

そうして、1980年代に入るところには、いくつかのサークルが定着するようになった。

この時期に力を入れたのは、実践の具体的なイメージを現場教師たちにもってもらう活動を展開したことだ。たとえば、集団遊びを研究会のプログラムの一部に入れ、実体験することで、それを参加者が自分のクラスに持ち帰り、子どもたちとやってみたことだ。

さらに、当時、全生研の教師たちが全国で開きはじめて「ひまわり学校」を、沖縄でも開催する動きがでてきた。最初は、宮城ヨネ先生を中心にした国頭ひまわり学校だ。1973年頃だと思う。続けて平川節子さんをはじめとする中頭地域でも始まった。それは、数十人の子ども達を集め、子どもたちに自治的活動を体験させ、力量を高めると同時に、教師たちが実践イメージをふくらませつつ、指導力量を高めることを狙にしたものだ。

そうした機会に、私も喜んでではせ参じ、一人の教師役として活動した。

1975年には、南大東小学校と中学校の教師たちが、南大東ひまわり学校を開催した。その「校長」役を仰せつかったので、出かけた。（2016年1月18日）

25. 南大東ひまわり学校 現場教師との共同研究5

南大東小中学校の教師たちとの最初の出会いは、1974年ごろの沖生研の研究会に同校の多くの教師たちが参加した時だった。

へき地指定で、教師たちは管理職を除けば、ほとんどが20代の新卒採用で二年たつと沖縄本島に戻っていた。島住民から「新卒教員の訓練校」なのか、と厳しい声も寄せられていた。そのメンバーには、私が大学教師一年生の1972年に琉球大学で教えた卒業生も何人かいた。私は、2年を越えて頑張ったらどうかと励ましの提案をした。

かれらは、実践のイメージをより鮮明にするために、私に南大東を来訪するように要請した。しばらくして、南大東小中学校生徒を対象にした「南大東ひまわり学校」を休暇期間（たしか1975年ごろの春休みだと記憶している）に、2日間ぐらいの日程で開設するので、来てほしい。やり方がわからないので、校長役をしてほしいということでもあった。

大東行の切符が送られてきた。帰りはキャンセル待ちということだった。2年「任期」を終えたが、3年以上務める希望を出した教師も何人かいた。

学校に隣接する教員宿舎に教師たちは住んでいて、合宿のようにして、教育実践を協同して取り組んでいた。。

到着して、まずは「職員会議」をして、個々の教師の希望・経験などを、実践的に知り、「校務分掌」を決めていった。

かれらも若いが、私も20代末の若さで、やる気と向こう見ずさだけはあり、どんどん進めていき、準備活動に入り、翌日は生徒たちが集まり、「南大東ひまわり学校」を実践した。

ところが、無我夢中だったせいか、その実践の様子の記憶が残っていない。当時の資料も、1990年に沖縄を去る時に、どなたかに預けたのだが、今は「行方不明」状態なので、思い起こす手がかりがない。いつか、当事者たちが集まって、回顧の聴き取り企画があればな、と思う。参加した教師たちは、その後大活躍し、今でも各分野で活躍している60代の人たちだ。

2、3年前、卓球の試合で、南大東チームと当たったので、その時のことを話したら、お一人が当時中学生で、とても熱心な先生たちだったという思い出を語ってくれた。

この企画に前後して、中学生を、その後たびたび開かれた「ひまわり学校」「がじまる学校」などに、参加させることもしていた。当時、各地で開かれていたリーダー研修のイメージだ。他の島を含めて離島からきた生徒たちは、当初緊張で沈黙状態だったが、慣れてくる中で徐々に力をつけていったと記憶している。

余談1 帰りのキャンセル待ち切符だが、年度末の行き来の激しい時で、毎朝空港に行くが、切符がとれずにいた。2～3日後ようやく帰ることができた。仕事道具も書籍も持参しなかったもので、やることがない。生徒の保護者が山羊のさしめで歓待してくれた。このことは連載7で書いた通りだ。

また、時間を持て余していたので、どなたかが魚釣りに誘ってくれた。しかし、私は魚釣りは好きでないというか、きらいだ。じっと待っていることができない。だから、魚釣りは試練に感じた。海岸は崖であるから、釣り糸をたらしても、浮きはまったく見えない。釣竿もない。ただ釣り糸を垂らすだけ。絶壁のうえで、糸が引かれるのを待つだけだ。

この体験は、私の釣り嫌いを決定づけた。

余談2 20代前半の教師たちが教員宿舎に住むので、「自然と」カップルがどんどん出来ていた。そんなドラマは、当時の離島勤務には多かった。（2016年1月29日）

26. 子ども学校 協同実践の展開 現場教師との共同研究6

前回紹介した南大東を含めた各地で、子ども学校を各地から集まった教師たちの協同実践として展開することは、こ

の後80年代まで続いた。

本や講演などを通して学ぶだけでは得られない具体的で体験的な学習と研究創造が、これらの場で行われるということで、多くの参加者を得た。その参加者が、職場や地域に帰って、自らそうした企画をつくったりして学習と創造を深めていった。それは、参加した子どもたちだけでなく、教師自身にプラスになるものだった。

それは、私にとってもそうであった。そうした「学校」では、私は南大東での校長役以外は、フリーな役柄をいただいて、子どもたちのなかで、あるいは教師たちに寄り添って、あるいは、事前・最中・事後の「職員会議」を通して、研究的に深くかかわっていった。

それは、私の大学での授業にもかかわるものにしていった。大学の授業と子ども学校での実践、さらにこれらの子ども学校に参加した教師たちの学校現場での実践が、絡み合うように展開し始めたのは、70年代末ごろからだった。

そうした自由で柔軟で創造的な研究的雰囲気、私が出会う教師たちや学校に溢れていた。それは、小中学校だけでなく、保育所、学童保育など多様な場にもあった。私の大学授業も、大学の建物内だけでなくそうした多様な場で展開した。80年代半ばでの私の授業の多くは、そうした多様な形態がごく普通になっていた。80年前後、大学予算のなかでできた現場教師を「実地指導講師」とする制度を全国的に言っても、もっとも早く行ったのは私だろう。また、受講生たちをそうした場に連れて行って、見学させるだけでなく、指導案を作って実践を展開させることも、日常的に行っていた。

それは、事実上、新しい形の教育実習でもあった。

一つのエピソード。70年代末に、今帰仁のデイゴ荘（公立学校共済組合の宿泊施設）で開かれた、沖縄子ども学校でのこと。

その時参加した子どもたちは、教師たち自身の子どもが多かった。その子どもたちは、受験学習中心のコースをたどり、やや過保護的で都市的な育ち方をする例が多かった。1980年代から始まる学力向上運動のなかで広く見られるようになった、学校での学習を支えるものとしての家庭教育のありようの先駆け的なものといえるかもしれない。

そうしたありようが、追求すべきものとして捉えられていたのだ。そのため、子どもたちは、モノ・コト・ヒトに積極的創造的にかかわる姿勢が弱い指示待ち型になっていた。時代の変化が教師たちの家族をとらえていたのだ。

沖縄の自然のなかで、豊かな人間関係に包まれつつ、逞しく生きるといった感じの子どもは例外的存在だった。ということで、夜の職員会議は、急遽子育て交流会になっていった。参加者たちにとって、多面的な発見創造の場面となったのだ。

その時、参加した子どもたちはすでに40歳代になっている。沖縄風に逞しく育った子どもたちの活躍が、今では目立つようになっている。（2016年2月7日）

27. 文化活動の旺盛な展開 現場教師との共同研究7

22の記事で、合唱・集団遊びや学校づくりを展開する横須賀池上中のスライドを上映してまわったことを書いた。こうした文化表現は、沖縄の子どもたちも教師たちも大きな関心を示ただけだけでなく、得意とするものだった。池上中のものを参照するだけでなく、まさに創造的に展開していく。

卒業式などの行事で、生徒が作成した巨大な貼り絵を作成し、舞台や壁面を飾ることは、当時、燎原の火の如く広が

り、今でも至る所で見られる。これが当時スタートしたことを知る人は少ないが。

音楽・舞踊で文化表現することは、沖縄の大人も子どももお一層の得意分野だ。ということで、1975年頃の沖生研研究会での全員参加による創作表現「ステージ・オブ・ザ・オキセイケン」の取り組みは、強烈な体験だった。歌・踊り・語り・コミックな掛け合い・群読など、多彩なジャンルを織り込んだ総合表現を創作し実演した。それらは、分厚いシナリオとなって残したのだが、手元に残っていないのが残念だ。

その体験に刺激を受けて、参加教師たちは自らの学級・学校で豊かな文化表現活動を展開していった。

70年代末に明治図書の江部満編集長から、沖生研シリーズの編集発行企画を打診されたのだが、その際、文化活動を第一号にしたのは、こうした実績を勘案したからだった。ということで、浅野誠編沖縄生活指導研究会著「行事・文化活動と集団づくり」1980年明治図書が発刊された。

今では、手に入れることも難しいだろうから、所収論稿を紹介しておこう。

富田哲「入学式、運動会、卒業式でつづる浦添中の六年」

平川節子「父母・教師・生徒が一体となった学級PTA活動」

比嘉正子「生徒会顧問一年生奮戦記」

宮里ヒロ子「たちあがれ、美恵子——分唱大会の取り組みのなかで」

松岡幸子「運動会式典の群読に立候補して」

中村透「音楽と集団」

座談会「文化活動の検討——文化的質と集団づくりの追求」

私自身も大きな刺激を受けて、いろいろと取り組んでいく。その一つは、大学授業で、受講生たちによる文化表現を軸にして共同創造活動を展開したことにある。群読・OHPやスライドを使った映像表現・大型おりがみなどの造形表現・合唱など多彩な表現を駆使した。受講生からのオーディションで芸術リーダーを選んだこともある。本物のオペラ歌手が受講生にいて、歌ったこともある。

また、職場の先輩教員であった平良勉先生から要請されて、水泳実習に参加し、夜に開かれる恒例のキャンプファイアを指導した。参加者全員で共同創造する豊かな表現企画にしていったのだ。

最初は、1979年だったと思うが、名護浦荘の海岸だった。行進・合唱・詩朗読（石川啄木）・日没を見つめる・キャンプファイア点火儀式・多様な出し物・全員合唱・踊りなどで連ねていった。

この企画は、体育科主催から学部の新入生歓迎企画へと模様替えし、体育科と私に加えて、多彩な教員がかかわり、とくに音楽科教員の関わりの中で、一層感動的な創作活動になっていく。それは、私が琉球大学から離れた1990年代まで続く伝統行事となり、琉球大学40年誌にまで掲載されている。

私は、その経験をもとにした長文の教育実践論を書いたが、あゆみ中学校教育実践叢書第27巻桐山京子・浅野誠編『行事の創造と組み立て』あゆみ出版1983年に収められている。（2016年2月16日）

28. 結婚式演出 文化活動研究 現場教師との共同研究8

個人的だが、前回書いた経験は、結婚式創造にも生かしていった。広く知られているように、沖縄の結婚式は、沖縄

芸能を中心にした出し物にあふれ、参加者が共同創造する文化表現という性格を色濃く持っている。冒頭にかぎやで風を親族が踊ることから始まって、参加者全員参加のカチャーシーで締めくくることが象徴的だ。

連載17で書いたが、そうした結婚披露宴の創造・演出・司会に燃えたのだ。10回近くしたと思う。70年代前半から少しはしていたが、その本格化は、1970年代半ばの沖生研事務局長の結婚披露宴からだった。

そして、70年代終わりから、作曲家で大学同僚の中村透さんと、2～3回ペアを組んで、同僚の結婚式を創造したことがある。彼が音楽監督を務め、私が演出・司会を務めた。浅野誠作詞中村透作曲で、主題歌を作ったことも2回ある。タイトルは「二人を讃え」「響きあう愛」だ。

この披露宴では、すべて生の音楽演奏で作り、参加者だけでなく新郎新婦も演ずるのだった。ある時は、かれだけでなく、彫刻家で著名な西村貞雄さんの新作まで登場していただいたし、ダンス専門の同僚による振付のダンスもしていただいたことがある。

それらのなかで、私なりの表現も追求した。OHPを使つての影絵、新郎新婦の歩みをスライドで表現するなど、今では当たり前というか、もっと進化しているが、当時は、誰も見たことがない類だった。キャンドルサービスもそう。群読用の楽譜を作って、群読をしたこともある。もっとも群読楽譜は、定着しなかったから、失敗の類だろう。毎回、シナリオをB4で10枚余り書き、それを数回バージョンアップして本番にのぞむのだった。

これらの結婚披露宴では、20人ほどの助手にも活躍していただいた。そして、ホテルの担当者のリハーサルまでした。中村さんの本格的な楽譜で、新郎新婦が指定個所で入場、次の指定箇所を着席というのは、誘導のホテルマンが「難しい」というので、私がサインを助手経由で送って、誘導するという事までした。当時の沖縄トップのホテルでのことだ。

だから、これらは、私たちの表現創造の試みであるとともに、助手などで参加している学生たちには、半ば授業のような感覚だった。

こうしたことは、実は当時の私の研究関心と重なっていた。当時、「学校文化」にかかわる論稿を執筆中だったが、理論と実践とを結びつける心意気だった。

大量生産型文化、画一的な文化ではなく、共同創造としての文化というものを追究していたのだ。それを、80年代終わりからは、異質協同というキーワードで表現するようになったが、70年代当時はハーモニーという言葉を多用していた。それは、前回までも書いた家本芳郎さんの文化活動の実践と理論に強い刺激を受けたものだ。

さらに、こうした蓄積をもとに、80年代後半から90年代にかけて、全国生活指導研究協議会の全国大会の分科会で、文化表現ワークショップを何回か行っている。また、90年代初めに、文化活動についての論文を書いている。それらは、浅野誠「学校を変える 学級を変える」青木書店1996年にも収めた。

私自身の研究史でいうと、1970年代末にこれらの探究をする中で、ようやく私なりのオリジナリティのある研究を提起できるようになったという意味で、エポックをなすものともなった。(2016年2月28日)

29. 多様な民間教育研究団体とかかわる 現場教師との共同研究9

沖縄における民間教育研究団体は、1960年代から作られ始めた。沖縄歴史教育協議会などがもっとも早いものだ

ろう。そして、「本土」との交流が盛んになるなかで、「本土」からの刺激を受けつつ、多様な研究団体が、60年代末から70年代半ばにかけて作られていった。学校教育における多様な分野・教科のほぼすべてにつくられたといってもよいほどだった。そして、夏に開かれる研究団体の全国大会に参加して学んでくる人も多かった。

高生研、学校体育研究同志会 全障研、歴史教育研究協議会、数学教育研究協議会、日本作文の会、音楽教育の会、家庭科教育連盟、新英語教育研究会・・・

これらの団体の研究会で、私が一度は顔を出したことがあるものは多い。各団体に出かけた際、どの研究会でも、本土から学ぶというだけでなく、沖縄が自分たちなりの実践を創造していくことの重要性を訴えた。

それらのなかで、印象に残っていることを書こう。まず学校体育研究同志会。大学同僚の平良勉先生が熱心に組織しておられた。平良先生は水泳が専門スポーツで、タイトルホルダーでもあったこともあって、水泳指導に熱心だった。また、沖縄では泳げない子どもが多く、小学校教員自身に泳げるようにさせることが当時の重要な課題だった。ということで、琉球大学教育学部には、夏の水泳実習という伝統行事があった。

学校体育研究同志会は、ドル平泳法という、泳げない子どもを泳がせる素晴らしい創造的指導法をもっており、それによって、琉球大学の泳げない学生も、多くが泳げるようになっていた。私も平良先生が主催するドル平泳法実技講習会に参加し、また、琉球大学の水泳実習に参加し、水泳指導のお手伝いもした。その際、夜のキャンプファイア指導したことは、すでに書いた。

そして、話が発展して、1977（1978かもしれない）年の学校体育研究同志会の全国大会に平良先生とともに参加した。私が、専攻分野以外の教科教育分野に足を踏みこむ大きな契機になった経験だった。読書するだけでなく、実技的にも学んでいった。90年代に中京大学で体育学部学生相手の授業が多かったが、その際大いに役立った。

同じようにして、障害児教育との深いかわりは、発達と指導にかかわる1980年代の私の研究の基盤の一つを作り上げた。

各研究会には、大学教員である研究者の参加もあり、それらの先生方との交流もたくさんの記憶がある。

1975年には、そうした研究会の合同研究会が始めてもたれた。さらに1978年1月に沖縄で開催された日教組教育研究集会に対応することもあって、民間教育研究団体の連絡協議組織が作られた。通称沖民教のスタートだ。その後、毎年一回合同研究会を開くことが恒例となった。

これらにあわせて、これまで沖生研紀要であった「民主的な子を育てるために」を、10号を区切りにして、「おきなわの教育実践」と改称し、いくつもの団体から編集委員を出して合同編集するようになった。

多様な分野の実践記録が掲載された雑誌だが、「屋良朝苗先生に聞く 私の教育実践」というインタビュー記録も掲載した。

こうして、沖縄の民間教育研究も、よちよち歩き段階から次の段階へと移っていく。（2016年3月9日）

30. 70年代から80年代へ 現場教師との共同研究10

1970年代最後に、当時活発化していた沖縄の学力論議にかかわったことについて書こう。1979年は大学入試での共通一次試験（後のセンターテスト）と呼ばれるものがスタートした年だ。私も、教育学部小学校教員養成課程の

二次試験の小論文プラン作成にかかわった。共通一次試験が、受験教科の点数序列をつくりそうな気配であったので、それとは異なる力を調べるのが狙いだった。

入学試験は「秘密」指定が多いので、ここでは書きにくいですが、その後、大学を移ってからも含めて、私がかかわることが多かった業務だ。私がかかわったのは、受験学力とは異なる多様な力を見ようとするテストにかかわるものが大半だった。それらの多くは、テストらしくないテストとして話題を呼んだものが多かった。

共通一次試験など点数で順序を決めるものは、いろいろと弊害を生み出してきたことは、その後も指摘が続いているものだ。そのセンターテストの廃止が発表された今、振り返ると感慨深い思い出が多い。

実際、共通一次試験は、琉球大学が国立一期校の穴場として見なされ、国立合格者数増加をねらう九州各県の受験校から狙い撃ちされた。そのため、県外合格者数が激増し、沖縄県内出身者がおされる事態が表面化した。それをきっかけに学力論議が盛んになり、それをもとに「教員が学力低下の最大の責任者だ」という政治的キャンペーンが出されたりもした。

そんななかで、実際の生徒たちの力をあげるための研究討論・実践創造のために、私自身も動き回るようになった。専門分野の生活指導ではなく、学力や授業にかかわる研究会などにでかけ、討論したり講演したりする機会も多かった。新聞やテレビにもしばしば顔を出した。新聞社の教育担当の若手記者が二社とも毎週のように私の研究室に顔を出していた。また、琉球放送テレビが、2時間の視聴者参加の生番組をくみ、その企画進行司会役をしたこともあった。

同じ時期に、大学内の教育改革の大型プロジェクトの総括幹事をしていたこともあって、1979～1980年ころは、その後何度も訪れる「繁忙の極み」の第一回目だった。授業が週に3コマあったが、会議などが週に7～8回あるという異常事態だった。

要請されて、各地での講演などもしていた。教員向けだけでなく、PTA企画などで、親向けに家庭教育などの話もよくした。また、非行「事件」などがあると、駆り出されることがしばしばだった。人権協会など社会的組織からも要請されたし、那覇市の青少年問題の計画立案の審議会にもかりだされた。

そんななかだったが、現場教師との共同研究ということであると、前に紹介した沖生研シリーズの続編続々編『へき地・小規模校の集団づくり』1982年明治図書、『集団づくり実践入門』1983年明治図書の編集執筆も行った。小さな一地方の研究会が、大手教育出版社から3冊も出版するとは画期的なことだった。

70年代の現場教師との共同研究は、台風のような展開だったが、一過性の渦ではなく、持続的に拡大していく渦となって、80年代に移っていった。多くの現場教師にとってと同様、私自身にとっても大変充実したものだ。多くの現場教師たちは、自らの営みによって、沖縄教育史上に大きな足跡を残したといえよう。(2016年3月20日)

31. 首里キャンパスでの研究室

勤務する琉球大学は、70年代後半から80年代初めにかけて首里キャンパスから現在地の千原キャンパスに移転したが、教育学部は最後の移転となったので、1980年代初めまで私は首里キャンパスで仕事をした。

首里キャンパスは、大変狭かった。私の教員研究室を例にとると、最初は、何人かの共同研究室だった。そのうち、

建物2階西端のトイレへの通路に間仕切りをしてつくった「独房」めいた教員研究室に入った。

しばらくして「独房」から2人部屋に入った。最初は、後の学長東江康治さんと相部屋で、のち現教育学部長の小田切忠人さんと相部屋になった。

研究室らしい部屋だったが、それでもいろいろと資料などが多い私だったので、70年代末には、先に移転完了して空いた農学部ビルに移動した。教員研究室と隣接する実験室とが使えた。水道蛇口のついた大型の実験台が数個設置されていた。使いにくくはあるが、ともかく広かった。教育学部ビルからは離れていたから、離島の雰囲気があり、静かな広い環境で、仕事ははかどった。ゼミ生が日常的に集い、学習研究をしていたし、そこで授業もした。

面白いエピソード。ビルの一階にハブが出現するや、全学のハブ取り名人が集合したことがある。

当時の私の大学生活は、この研究室と講義室・教育学部ビル、そして卓球部練習場があった教養部のプレハブ教室との間を動いていた。離れてあった体育館や音楽棟などにもよく出かけた。

その思い出の場所は、今では、首里城の正殿・正殿前広場・南殿・京の内などとなっているが、全く変化し、当時の跡形がすっかり消えており、いまでは正確な場所さえ分からない。首里城に出かけると、かつてここで私が青年教師としていろいろとやっていたのだなあと、不思議な気持ちさえする。首里城は復元されたが、琉球大学はすっかり消えた。石標がどこかに建てられているそうだが、私は気づいていない。

その思い出深い首里キャンパスから、千原キャンパスへの引っ越しは大変だった。というのは、私個人の研究や教育の資料に加えて、教育学部移転計画委員会の資料、科学研究費による戦後沖縄教育史の膨大な資料など、勤務年数が十年に満たないのに、研究室3つ分ぐらいの「財産」がたまっていたからだ。移転先のいろいろなところに、それらの保管場所を確保した。荷つくり作業も大変だ。引っ越しそのものは業者がやるが、通常の教員の数倍の量だったらしい。

新研究室は、教育学部棟2階の北側だった。私は、中京大学時代も含めた専任大学教員の間、なぜか、北側研究室になることがほとんどだ。南側に行きたいという希望はあったが、実現しなかった。(2016年5月4日)

余談5 西原小波津団地に住む1

1970年代、他府県から琉球大学に赴任した方々の住居には、借上住宅、国家公務員宿舎、民間賃貸、持ち家購入があった。借上住宅は、公務員宿舎建設が進むにつれて、そこに移っていった。だから大まかに言うと、公務員宿舎に住む人と、民間住宅を自分で選ぶ人に分類することができる。

この両者には、特徴が出てくる。民間住宅を、住宅手当で一部を賄って借りる人と比べれば、公務員宿舎は支払う額が安くすんだ。それもあつたし、量が不足していたこともあって、当初はなかなか入れなかった。また、長期に沖縄に居続ける人は、いずれ公務員宿舎を出ることとなる。

両者の大きな違いは、公務員宿舎に他府県出身者が大変多いのに対して、当時の民間は、ほとんどが県内出身者であった。確か300戸ぐらいあった小波津団地も、当時、県外出身者は私だけだった。

私は、当時から、付き合う人に他府県出身者が多いというのはいやだった。県内出身者との付き合いを多く持つことが好きだった。だから、団地での付き合いが多かった。スポーツ大会を含めて、団地行事などにはほとんど出た。また、同じような職種の人だけと付き合うのも好まなかった。近隣との付き合いやスポーツとの付き合い

いだと、否応なしに多様な付き合いになる。保育園や小学校などの保護者との付き合いも楽しい。忙しすぎるのは困るが。

当時の小波津団地は、一戸建て、我が家のような二戸連建てなど多様だった。我が家の近隣は、最後まで売れ残って「頭金なし」だったので、資金余裕が少ない人たちが多かった。タクシーやバス会社勤めの人も多かったが、いわば庶民ストリートだった。子どもたちが近所に群れて遊んでいるところだった。当時は犬も放し飼いが多く、犬なども一緒に遊んでいた感じだった。

子どもたちはあちこちの家に上がりこんで遊んでいた。我が家にも子どもたちが日常的に上がりこんできた。鍵をかけていない家も結構あった。我が家も鍵をかけないことがしばしばだった。帰りが遅くなって、しばし近所の方に、子どもたちがお世話になったこともあった。

塀が高いと泥棒が入りやすいとのことだが、実際、塀の高い家に泥棒が入り、我が家のように塀が低いところには入らなかった。

建坪が20坪ぐらいの我が家が手狭になったので、7、8年後に増築した。セキスイハイムの二階建てをくっつけた。その1階は多目的部屋と称して、いろいろな活用をした。

子どもたちだけでなく学生たちがよく集まった。我が家での飲み会はしばしばだった。遅くなった学生たちが泊まり込むのもごく普通だった。朝起きたら恵美子が教えているキリスト教短大学生が10名以上泊っていることがあり、びっくりしたこともあった。

私も恵美子も県外出張の時、私のゼミ生数人が泊まり込んで、子どもの世話をしてくれたこともあった。帰ってきて、子どもたちにどうだったか、と聞くと「お化け話がおもしろかった」「いかさまランプを教わった。マジャン教えてもらった」と、子どもたちが生き生きと話す。こんなエピソードを残した学生たちも、もう50歳近くなり、社会的に重要な役割を果たしている。

ある時は、小学校5年生の子どもクラスの有志合宿をしたこともあった。担任教師もきた。

こんな多様な活用をした小波津団地生活だった。(2010年7月1日)

余談6 西原小波津団地に住む2

小波津団地には思い出がいっぱい積もっている。

我が家では、子どもたちに働いた分だけ、お小遣いをあげることにしていた。そのために、仕事単価一覧表をつくっていた。皿洗い一枚一円。という具合に、である。我が家の子どもたちは、お年玉をいただける相手が少なかったので、お小遣いは、仕事によるものがほとんどだった。

お風呂も、石油ボイラーだけでなく、なにかを燃やして沸かす装置と兼用にした。そして、冬場のお風呂沸かしは150円などとしていた。当時、私は日本生活指導学会の事務局長をしていたが、学会の会員通信の封筒準備はもっぱら子どもたちの仕事だった。1通1円という、実は最低賃金以下の価格で、子どもたちは「働いていた」。

もらった小遣いを、5歳の息子は喜んで、すぐにお菓子を買った。そのうち、お菓子はすぐになくなることを学んで、ためていくことを覚えた。値段の張るものは、買う価値があれば、子どもの出すお金と同じ額を親が出した。これが、我が家の金銭教育、仕事教育だった。

結果的に言うと、これらは、かなり有効だったと思う。

近隣の子どもたち、大人たち、学生など、皆が集える多目的ルームも含め、家づくりにはいろいろな考えを込めた。

私たちは、結婚式の時、三つの誓いをした。その一つは、「いろいろな人が集い、交流する開かれた家にすむ」ということだった。それはいまでも続いている。

琉球大学時代だけでなく、愛知の家には、私の学生、恵美子の学生、そして卒業生、さらに現場教師保育士など、多様な方々が集った。沖縄では珍しいというほどのことではないが、愛知では珍しかった。大学では教員研究室にレポートを出しに行くことさえ稀で、教員研究棟に入ったことすらない学生がごく普通だった。そんなこともあって、学生が集う我が家は珍しい存在だった。授業のことは覚えていなくても、我が家を訪問したことは覚えている卒業生さえいる。

思い起こすと、私の高校時代、また大学・大学院時代、教師の家を訪問することはしばしばだった。著名な勝田守一さん宅で、ゼミが行われたこともあった。最晩年のころだ。当時の新著「能力と発達と学習」について討論した。当時大変失礼な発言を、たくさんしたことが記憶に残っている。私自身が大学教師になって、勝田さんの偉大さを実感した。不勉強な私だった。

小波津団地が欠陥住宅だということで話題になったことがあった。小波津団地が作られた1972～5年ごろは、建築ラッシュで、塩抜き不十分なままの海砂が使われて、建築10年もしないうちに、天井などの剥落が始まった。県議会議員が訪問調査をしていったこともあった。沖縄県住宅公社による分譲だったので、県と施行業者とのやりとりがあったが、屋根に防水工事、天井に板を張り付けるなどの対処策が講じられた。

1990年3月、小波津団地を離れ、愛知に引っ越した。この家は、不動産業者を通して販売した。バブル時代だったので、そこそこの価格で売れ、愛知での住宅購入資金になった。(2010年7月2日)

32. 沖縄・宮古の親戚とのつきあい

私の生家がある岐阜の親戚は、かなり多い。従兄弟従姉妹が30名以上いるほどだ。だが、実の兄弟は姉一人で、子どもがいないので、身近な親戚は少ない。

そんな私が、沖縄の宮古の婿になったものだから、一挙に親戚が増えた。1972年、沖縄に住み始めたころ、職場と学校教員以外には、知人はゼロ状態だった。だから、親戚が沖縄つながりをつくる第一歩だった。そこで始めた作戦は、自己紹介する時、「ウチナムク」「ミヤークムク」と名乗ることだ。すると、話が通じやすいだけでなく、急に関係が発展することが多い。

恵美子の兄弟は7人。宮古・沖縄・愛知と散らばっているが、宮古・沖縄の兄弟・義兄弟・その子どもたち、あわせて数十名には、かなり密な交流を持ってきたものが多い。いまでもそうだ。

お互いに困難があると、助け合うことがよくある。長男が入院中に、次男をあずかってもらったことがあるし、逆に、兄弟の子どもたちの面倒を見たこともある。恵美子の母親を預かったこともある。

だから、思い出も多い。

そんななかで、印象的なことは、義兄、そして義姉の婿二人とのことだ。私より少し年上だ。この三人に共通しているのは、囲碁有段者、酒愛好家、スポーツ選手であることだ。これらのことで、随分ご指導いただいた。

三人とも、ひょっこり現れて、碁の指南をうけることがしばしばだった。私が彼らを訪問した時もそうだった。沖縄に住み始めてから習った碁だが、3級ぐらいまでいった。残念なことに、もう10数年、囲碁をしていないのは、かれらとできなくなったからだ。

酒はしばしばご一緒した。酒場に行くよりも、自宅で飲むことが多かった。ある時、そのうちのお一人と、徹夜で泡盛一升を飲んだことがある。翌日、私は卓球の試合に出た。結構な成績だった。かれは、空手の演武をした。かれは、空手の教士であり、空手の歴史書に掲載されているほどの人だ。もっとも、私は、空手を習わなかった。道場開設の時、チラシの文づくりの相談を受けたことがあった。

沖縄に来てはじめて海で泳いだのも、そのうちの一人だ。だれも泳いでない海だった。そこでウニをとって食べた。

宮古に出かけると、そのうちの一人がいつもゴルフに連れていった。彼は、当時宮古チャンピオンだった。私がこれまでにしたゴルフは、20回あるかなしかだが、その多くは親戚といっしょだ。熱心にやらなかったので、パーのダブルスコアであれば良い方だった。親戚といっしょにやる条件がなくなって10年になるが、今は全くやっていない。

親戚の冠婚葬祭にもよく付き合った。仲人とか結婚証人とかになったこともよくあった。1970年代に初めて出会った子どもたちは、今では50代だ。ある時、一人の甥から相談があった。「できちゃった」という話だったが、相手の名を聞くと、これまた私の授業で大活躍した受講生だった。二人の仲人をした。その子どもたちは、今では第一線のスポーツ選手だ。

もう一組の仲人も甥だが、その相手は恵美子の授業の受講生。その子どもの一人も、今第一線のスポーツ選手になりつつある。

親戚が増えると、実に多様な付き合い・関係が広がって、面白い。

多いので、親戚だと気付かないこともある。ある時、受講生の一人が親戚だったことが分かった。気付かれると恥ずかしいので、黙っていたとのこと。(2016年4月20日)

3.3. 自動車・バイク・自転車

1972年の沖縄生活当初は、自動車免許をもたないので、バス通勤だった。那覇市松川の松川共同住宅から「工業線」で寄宮まで乗り、そこから徒歩で沖縄大学まで。琉球大学へもバス通勤だ。他のところへもバスで出かけるか徒歩だった。

しかし、各地に出かけるには、自動車が必要になることに気づき、免許をとった。そして、しばらくは中古車を乗り継いでいた。2台購入するゆとりはないので、1973年ころ、私は自転車通勤をした。1974年南風原に引っ越してからは、原付自転車に乗った。確かスズキバーディだと記憶している。バイクは、80年代前半、降雨の時転んで痛い思いをしたので、やめた。

70年代末ごろになると、互い忙しくなって、中古車2台を使ったこともある。80年頃、初めて新車を買った。スバルレオーネだったと思う。

車には興味が薄く、「使えればいい」ぐらいの感覚だった。車選びに苦労するのは面倒だった。その後、ホンダ、ミツビシ、ヒュンダイに乗った記憶だ。

1984年に一年間の研修生活を終えて沖縄に戻る時、購入の必要があったのだが、顔見知りになったホンダの営業社員にすべて任せて購入した。バージョンアップして、バックミラーがドアミラーになっていてびっくりしたこともあった。

その後も、今に至るまで、そんな調子で車購入をしてきた。買おうと思い立って、最初に出会った販売店で、そのまま買うという具合だ。いくつかの販売店をまわって、いろいろと調べて買ったのは、昨年2014年が初体験だ。

ところで、1970年代の車には、ドアが壊れたり、窓ガラスが壊れたりしても、ダンボールで応急措置したまま走っている車を結構見かけた。今では、ピカピカの車だらけだが、そのころは珍しかった。私の車も、汚れを気にしないで走っていた。1990年に愛知に転居して、ピカピカの車だらけに驚いた。

車をよく使ったが、バス利用や徒歩もしばしばやった。西原の小波津団地から千原の琉球大学まで歩くこともよくした。夏場は暑いので少ないが冬場は結構楽しい。

子どものころから地図が好きだったので、道路発見を楽しんだ。琉球大学近くの上原交差点から下に降りて内間交差点まで行く道路は、今では交通が激しいが、80年代は未舗装で、30分に一台ぐらいの道だった。そんな道を地図で探して通ったことも多い。

運転は、制限時速ほどのスピードで走ったので、58号線の恩納あたりでは、後が数珠つなぎになってしまったこともあった。「大名行列だ」と自己満足していたこともあった。

そんな運転だが、周りも許してくれるのが沖縄だ。愛知に行ったら、後ろの車かすぐにクラクションを鳴らした。制限時速は15キロ越えて運転するものだ、と言われた。車間距離が短いにも驚いた。交通量の多い名古屋市内に出かけるのは、できるだけ避けた。そんな愛知の運転に慣れたが、沖縄にもどってきたら、しばし愛知式運転をして、驚かれたものだ。でも1～2年で沖縄式のゆっくり運転に戻った。最近では、さらにゆっくりと老人運転になりつつある。
(2015年10月23日)

34. 動物飼育 ちゃぼ うさぎ 犬

1974年の南風原生活からは、地上生活、つまりアパートなどの2階以上ではなく、地上がある生活になったので、動物飼育ができるようになった。

最初は、犬を飼った。どこかでもらった犬だった。しかし、記憶がほとんどない。

私は、犬は好きだったが、猫は長い間、好きではなかった。目が怖いという印象を持っていたからだが、南風原生活で、生まれたばかりの子どもに猫がちょっかいを出して、危険を感じた以降ますます嫌いになった。その時は、再び、家に入り込まないように、こらしめた。猫嫌いが取まり始めたのは、60歳代半ば以降のことだ。

本格的な動物飼育は、小波津団地生活からだ。

どこかでもらった犬を育てていた。そのころは、ほとんどの飼い犬は、放し飼いだった。我が家もそうだった。あちこちで犬と子どもが群れ遊ぶ時代だった。ひもでつないで、散歩に連れていき、途中でした便は飼い主が持ちかえるこ

とが習慣化した今からみると、全く異なる時代だ。

近所に、琉球大学の先輩教授の比嘉徳政先生が住んでいて、飼っていたウサギを分けていただいた。同じころ、恵美子がどなたかにチャボをいただいた。1980年ごろの話だ。

彼らの生活場所をつくった。そのころ、NHK教育テレビの日曜大工番組が好きだった私は、2メートル近くのアンゲルと呼ばれた鉄製の枠で箱を作り金網をかけた。

それを見ていた4、5歳ごろの息子が、最初に入って楽しんだ。そのあと、まずチャボの生活場になる。ウサギ用は、地面に2メートル四方の箱型で、高さ1メートル弱のものを作った。ウサギとチャボを共同生活させた記憶だ。

チャボは、卵を産んだので、食用にもした。ウサギが、盛んに地面を掘り始めた。巣穴にして、もぐりこんでいた。そのうち、赤ちゃんウサギがぞろぞろ出てきた。

数が増えてくるものだから、餌集めに苦労し始めた。週末になると、南風原のAコープ・スーパーに行って、商品の残りでクズ扱いになった切れ端のニンジンとキャベツをもらうようになった。ダンボール一箱もらってくるが、ペロッと食べてしまう。

家族でいろいろと楽しむ日々にはなったが。

そんなころ大事件が起きた。彼らの生活場所を時々掃除する必要があった。ある時、全てのウサギをポリバケツに入れて、掃除を始めた。その間、ウサギが余りにもうるさいものだから、バケツを蓋でふさいだ。掃除が終わって、ウサギをもどそうとして、蓋をあけたら、全員グタツとなっている。酸欠による悲劇だった。

その事件が与えた心の痛手で、飼うのを止めた。

結局、80年代後半には、犬だけを飼っていた。動物センターでもらってきた雑種だと記憶している。タローだ。そのころは、ひもをつけて飼う習慣が広がっていたので、よく散歩をした。湿気が強いある日の夕方、散歩で草むらに近づいて、ハブが出そうだと思ったとたん、ハブが出てきたことを覚えている。でも、犬自身は関心をもたないので、がっかりした。

1990年春、私たちが愛知に引っ越す時、学生がタローを引き取ってくれた。

愛知生活では、ベニーという秋田生まれの柴犬と生活をともにした。私がトロント生活に移る直前に病死した。犬は、別れを予知すると、誰かがいった。（2016年4月12日）

35. 海水浴 水泳指導

ここでなかゆくい話として海水浴や水泳指導のことを書こう。

私は泳ぎが好きだった。「だった」と書いたのは、ここ5年余りは泳いでないからだ。特に理由はない。面倒になったからとでも書いておこう。

小学校4年の時の担任教師は名物教師だったが、その理由の一つは、国体の水泳選手ということにあった。といっても、泳ぎの指導はなしに、クラスの子どもたちを、プールに入れて、自分で泳げるようになるのを待つだけだった。それでも、田舎の子どもたちは、みんな泳げるようになった。私もそうだ。

当時としては、早い方だった。だから、中学にはいって、水泳訓練があった時は、3000メートルの遠泳に参加していた。3年の時は、遠泳の助手を務めていた。

ということで、琉球大学教育学部に努めてから、体育科の平良先生の誘いで、水泳実習に参加して、キャンプファイアの指導をするだけでなく、水泳指導、とくに遠泳の指導の手伝いもした。通算10回以上参加しただろうか。琉球大学を辞めた年も、わざわざ参加したほどだった。

家族とは、夏になると、毎年何度も海水浴をした。

「今日は暑かったな。海水浴に行こうか」ということで、話がまとまると、みんなが帰宅する5時30分に水着に着替えて、家を出る。たいていは新原ビーチに出かけた。6時ごろ到着して、1時間足らず泳ぐ。新原ビーチの一番西のところだ。

その後、上着をつけて、親慶原のチャーリー・レストランで夕食。そして帰宅してシャワーを浴びるというのが定番だった。

そんな新原ビーチとの付き合いがあって、今玉城に住んでいるというわけだ。新原ビーチから西にさらに寄って、サチバルあたりでも泳いだ記憶がある。

私の水泳指導もおおざっぱだったが、平良先生たちからドル平泳法指導を習ってからは、結構きちんと指導したはずだ。

まだ2、3歳の次男をおぶって泳いだこともあった。その時、息子が落ちて、おぼれかかったこともあった。ムーンビーチでのことだ。

長男との思い出というと、勢理客にあったアイススケートリンクで、息子を抱えながら滑った思い出がある。

子ども達とはよく遊んだ子ぼんのうな私だが、随分危なっかしいことをしたものだ、と今になって思う。

学生相手の指導では、息継ぎに苦労して、なかなかうまくいかない学生たちを、よく個人指導した。ある学生のエピソード。一息で3メートル進めるがあとが続かない。そこで、陸上で、ドル平泳法での練習を繰り返して、コツをつかませ、海岸沿いで実地指導を始めた。

すると、息継ぎができたので、「もう一回、息継ぎ」と声をかける。そこで、「5メートル泳げたぞ。もう少し行こう」と声をかける。その調子で、20メートル、100メートルと進み、ついに500メートル泳いでしまった。

3メートルが、ある日突然500メートル泳いでしまったのだ。すごい頑張り屋さんだった。今は、超ベテランの小学校教師をやっている。(2016年7月21日)

Ⅲ 猛然と打ち込む 大学教育 沖縄教育

36. 沖縄教育史研究へ

私が琉球大学教育学部で所属した学科目は、日本教育史であった。本来の専門分野である生活指導は、当時の大学では、ほとんど存在しなかったもので、近い分野のどこかに所属するのが通常だった。学部時代に教育哲学教育史コースであったし、卒論にしても修論にしても、日本の教育実践史・教育方法史だったので、所属に違和感はなかった。

加えて、学習しはじめた沖縄教育史は、大変興味深いものだった。ということで、日本教育史を授業科目として担当し続けた。はじめのころは日本全体のことを扱ったが、徐々に沖縄教育史の比重を高めていく。

と同時に、研究活動としても、沖縄教育史にかかわって進め始めた。といっても、70年代半ばまでは、事前学習的な要素が高かった。それでも、沖縄教育史・日本教育史を扱う卒論を書く学生が毎年一人ぐらいおり、指導しながら私自身の学習を進める感じだった。とくに、佐久川紀成さんは近世から近代への移行期の沖縄について優れた卒論を書いた。そこで、私との連名で、教育学部紀要に論文を掲載した。私も名前だけでなく、それ相応の部分を書いた。タイトルは「沖縄における置県直後の小学校設立普及に関する研究——地方役人層の動向を中心に——」だ。

1970年代半ばから、各地に出かけての資料調査や聞き取り調査も始めた。西洋教育史担当で、沖縄教育史研究の先輩でもある阿波根直誠先生といっしょに、比嘉英元さんの聞き取りをしたことが記憶に残っている。また、大田堯先生が来沖した折、ご一緒して、喜如嘉の高齢者のかたに、明治期の小学校通学体験などの聞き取りもした。その際、佐久川紀成さんに「通訳」をしていただいた。

70年代後半になると、科学研究費を受けたこともあって、戦前資料が残っている喜如嘉小学校、平良第一小学校、石垣小学校、登野城小学校などに出かけて、資料を撮影したり、コピーしたりした。残っている資料は主として、学校沿革誌だった。

その一つの西表小学校には、学籍簿があり、当時の生徒全員の在籍記録があった。夢中になって、それをカードに手書きで記録した。その折学校の時計が止まっていたこともあって、危うく一日に一本しかないバスに乗り遅れるところだった。西表小の記録は、明治期における就学の実態をよく示すものとして貴重なもので、それを整理して論文化した。

70年代末には、二つの共同研究も行った。一つは、教育学科教員の共同研究で、沖縄師範学校史であり、もう一つは、戦後沖縄の教育実践史について、田港朝昭、砂川勝信、藤原幸男、小田切忠人さんとの共同研究だった。

師範学校史では、明治期の小学校教員の実像把握を中心に作業をした。戦後のものは、県教委の「戦後沖縄教育史」作業で残された膨大な資料から教育実践にかかわるものをコピーしたり、来沖した指導教員、本土派遣された研究教員へのアンケート調査をした。

いずれも、その時代の実像を明るみに出すための基礎作業的性格の強いものだった。

これらの研究の報告書を執筆するとともに、この時期、いくつかの小論を書いていた。不思議なもので、そのころは、学部改革のプロジェクトの真っ最中だったし、大学教育論についていくつもの論稿が発表したころだった。ふりかえっても、よくぞまあやったものだと思う。年間原稿執筆枚数が400字詰めで1000枚を超える年もあった。30代半ばに近づくころだった。息子を亡くした悔しさをぶつけるようにして仕事をした感じだ。

こんな沖縄教育史についての基礎作業をしているところに、大きな仕事が舞い込んだ。京都の出版社思文閣が、各県の教育史シリーズを発刊することになり、西里喜行さんに最初の依頼があったが、かれが私に振ったのだ。それから10

年がかかったが、1991年に「沖縄県の教育史」は刊行された。1980年代の私の仕事の大きな一つになった。(2016年4月3日)

37. 沖縄教育史研究初期

70年代末から80年代はじめにかけて進めた研究の大きな柱の一つは、沖縄研究だった。そのなかの一つは沖縄教育史であり、もう一つは沖縄の教育実践に対応するものだった。

今回は、そのなかの沖縄教育史研究について書こう。それにも、戦後沖縄教育実践史と戦前とくに明治期教育史の二つがあった。

琉球大学で日本教育史の担当教員と位置付けられたことがきっかけであるが、この分野の研究にかなりの意欲を持って進め始めた。それには、科学研究費のからみもあったが、琉球大学着任後10年間で3つの研究にかかわった。

1974年 「沖縄県における小学校成立普及過程にみる日本近代学校の性格」 奨励研究

1978～79年 「沖縄県の戦前における師範学校を中心とする教員養成についての実証的研究」(代表阿波根直減) 教育学科教員による共同研究

1979～80年 「戦後沖縄の初等中等教育学校における教育実践(主に授業と生活指導)に関する実証的研究」(小田切忠人 砂川勝信 田港朝昭 藤原幸男 浅野誠=代表者)

当時の大学予算は、個々の学科・教員が使えるものは校費とよびならわされていたが、私の例でいうと、年間10万円であり、プリント作成などの授業経費や日常のコピー経費で使い切ってしまう、研究費にまで回せる状況になかった。ということで、科学研究費などに依存する比率は高かった。

こうした予算獲得には、他にも大学教育改善など多様な場面にあったが、それらの申請書類を書くことを積み上げる中で上手くなり、その後も、何度かその機会があった。その経験蓄積があるものだから、私が作成した書類には、落とされた記憶がない。90年代後半のカナダとの国際共同研究もそうだ。とてもラッキーな私だったが、予算を取るとかえって、予算に振り回されるので、立場上、やむを得ない時には申請文書を作成するが、できる限り避けるようにしていたのが、90年代以降の私だった。

だから、私個人の単独申請は、最初の一回だけだった。最初の科学研究費では、戦前の学校史資料のほとんどが戦争で消失しているなかで、わずかに残っている山原や先島の離島の学校に赴いて、資料収集をすることが中心だった。コピー機械が、各学校にない時代なので、手書きで写したり、しばし借用して大学でコピーして返送したり、写真撮影してマイクロフィルム化するなどした。また、高齢者に明治期の学校についてインタビューすることもした。

そんな折、卒論指導にあたっていた佐久川紀成さんが優れた卒業論文を提出したので、それに私の論文を合わせる形で公表したのが、私の沖縄教育史の最初の論文だ。

浅野誠・佐久川紀成「沖縄における置県直後の小学校設立普及に関する研究——地方役人層の動向を中心にして——」『琉球大学教育学部紀要第一部』第20集1976年

この論文は、田港朝昭『近世末期の沖縄農村についての一考察』『琉球大学教育学部紀要第一部』第8集1965年
が強い示唆を与えたもので、田港先生には大きな恩を感じている。かれには、多様な場面でお世話していただいた。

佐久川さんは、著名な琉球大学民俗クラブの部長を務めているなど、学生離れた研究力量をもっていた。かれにも、

公私ともにいろいろとお世話になった。(2016年6月29日)

38. (続) 沖縄教育史研究初期

戦前沖縄教育史研究、とくに明治期における各地の小学校の実態の研究は、戦禍による史料欠落のため、史料搜索が大変だった。

そのなかで、喜如嘉小学校の「学校日誌」と、西表小学校の学籍簿の発見は、私にとって大きかった。喜如嘉小学校の学校日誌は、明治の創設期から戦中期戦後期まで継続して残されているという貴重なものだった。西表小学校では、明治期の全就学者の名簿が残されていた。

これらは、学校を訪問して初めて見つけたもので、「発掘」と言ってもいいほどであった。その時は、学校関係当事者も、その貴重さに気づいていなかった。

西表では、朝、学校で資料を見つけ、コピーなどできる環境は全くないので、その場で、一人一人の生徒の入学退学休学在籍学年などを、カードに記入していった。夢中の作業だった。当時の交通機関はバスだけで、一日1、2本で、そのバスで帰る予定だったが、作業をしていた職員室の時計が止まっているのに気づかず、バスが来ているのを発見し、職員に時間を訪ねて気付く。慌てて片付けてバス乗車。ほとんど作業完了だったのが幸いした。

当時の就学率を示す公式の表に出てくる数値は、実態とかけ離れており、実態を探る、つまり実質就学率を明らかにするうえで貴重な資料だった。多くの生徒が、決められた年齢・年限で就学したのではなく、途中休学状況がごく普通であり、男女差が激しかった。そんなことの実態を、氏名が記されたこの資料で明らかにすることができた。

また、出版社企画で、当時の政府が植民地各地に向けて作成した小学読本を復刻されたが、そのなかの沖縄県用尋常小学読本の解題を書いたのも貴重な体験だった。残念ながら、印刷段階で、大量の原稿脱落がなされ、後から補足版を作ったが、ほとんどが間に合わなかった。 ※佐藤秀夫監修浅野誠解題『沖縄県川尋常小学読本』文化評論社1982年
面白い仕事になったのは、当時の南風原小学校校長と知り合い、語り合うなかで、南風原小学校は一時期大里小学校と併合して大南小学校となっており、創立100周年記念行事をしていいかどうか迷っているから、それについて調べてくれないか、という要請があったことだ。

これについては、調べられる事実を集約しつつ、100周年になるかどうかは、併合時期に、南風原小学校が消滅したととらえるか、大南小学校の形で継続しているかととらえるかどうかであり、当事者自身がどの解釈をとるかということだ、という返答を添えた。きちんとした文書にして提出したので、いまでも、南風原の教育委員会か南風原小学校に保存されているだろう。

こうした作業をしているころのことだ。琉球大学教育学部の同僚である西里喜行さんから、次のような依頼があった。京都の出版社思文閣が、47都道府県の教育史を各一冊ずつ発刊する計画を持っている。そのうち沖縄県の執筆を西里さんに要請されたが、忙しくてできないので、私に担当してもらえないか、という話だ。

私も忙しいが、この仕事はやりがいに満ちているので、「二つ返事」に近い形で引き受けた。沖縄教育史を専門分野の一つにしているものの責務のように感じた。

それから少しずつ作業を始めた。だが、近世以前が執筆対象になっていた。そうすると、沖縄の場合、14世紀から19世紀半ばぐらいに絞られてしまう。そこで、明治期まで記述対象にならないか、と出版社に要請し、承諾を得た。

80年代半ばまでは、私にとっては「研究」というより「学習」という段階の作業が続いた。そして、80年代後半になって、とくに沖縄から離れることがはっきりしてくる1989年からは本格的作業となった。(2016年7月8日)

余談7 沖縄教育史研究への契機——私の研究史3

私の琉球大学でのポストは、日本教育史だった。生活指導ではないのか、と尋ねる方がいるかもしれない。

しかし、1990年まで国立大学教育学部に生活指導ポストはなかった。生活指導専門のかたは数少なく、いるとしても、教育方法などのポストにいたのだ。教育職員免許法が変わって、生活指導関係科目が必修になった1990年以降、各大学は生活指導のポストを設け、その専門の人を配置するようになった。

1990年に赴任した中京大学もそうで、私は新設のポストについたのだった。それまで、私は「道德教育の研究」も担当していたので、その授業で、生活指導にかかわって教えていた。

1990年以降、生活指導専門の人の大学就職事情は大きく変わった。それ以前は大変厳しいものであった。だから、大学院入学のころ、生活指導を専門にするといったら、就職先を見つけにくいよ、とアドバイスされたりした。

大学院では、私は学校教育専門課程に在籍した。教育方法の講座があるからだ。入学数年前までは、存命中の宮坂哲文さんが担当であった。その後、稲垣忠彦さんが担当となられた。稲垣さんは教育方法史で博士を取得された。

私の修士での学習の一つは、生活指導史、とくに宮坂さん、中内さん、竹内さんの先行研究を学ぶことからスタートした。そして、明治末から昭和初めにかけての自治活動の成立展開にかかわって、修士論文に取り組んだ。

指導教官の稲垣さんは、大変率直なかたで、私はずいぶん助かった。「生活指導は、私の専門分野でないから、中身の指導はできないが、修士論文の序論の書き方を指導しよう」といつてくださった。これがずいぶん役立った。

ということで、教育史研究のほどきを受けたのである。そして、学部時代の所属学科が教育史教育哲学だったので、日本教育史で大学のポストをえたことにそれほどの違和感はなかった。

沖縄大学、琉球大学で研究し始めた時、教育史のフィールドは、当然のことながら沖縄になった。最初にとった科学研究費も、近代沖縄教育史研究だった。明治期小学校の就学実態を明らかにすることを軸にするものだった。明治期資料が残っているところは少なく、北部、宮古、八重山などの学校を回り、資料を手書きで写したりした。学校にはコピーがない時代だ。

そんな作業に加えて、当時、つまり1970年代の沖縄の教育実践は、戦後沖縄教育史のなかで把握する必要があったので、その調査研究もすすめた。

だんだん沖縄教育史研究にはまり込んでいく。いきついたのが、「沖縄県の教育史」(思文閣1991年)執筆である。(2010年2月6日)

39. 戦後沖縄教育史研究

沖縄の教育現場とつきあっていくなかで、沖縄の教育界には、「沖縄は本土より遅れている。早く追いつこう」という思考が底深く存在し、それが体質化していることに、日常的に気づかされていた。そうした体質を越えていくような教育実践をつくりあげていくことをサポートするのが、私の大きな役目だと考え、それをめぐる問題提起をいろいろな場で提起していく。それは40年近くたった今も続く。

と同時に、そうした思考・体質が形成されてきた歴史についての検討が必要だと考え、沖縄教育史研究に着手していく。一つに前々回書いたような戦前沖縄教育史の仕事がある。それと並行して、戦後沖縄教育史の作業にも着手した。

そんな思いで書いたものには、次のものがある。

- ・(共著) 沖生研の実践・研究の現状と課題 『おきなわの教育実践』第10号 1977年
- ・沖縄の学力問題 その史的構造の検討 『生活指導』1978年6月号
- ・第一回沖縄民間教育研究団体合同合宿研究会基調提案「どこからどのようにはじめたらよいか」 『おきなわの教育実践』12号 1978年
- ・沖縄の教育実践と教育研究運動 民間教育研究運動を中心に 『現代教育科学』1978年10月号
- ・沖縄の教育実践の課題 『新沖縄文学』46号 沖縄タイムス社 1980年
- ・沖縄の教育実践の運動史的構造についてのメモ 教育運動史研究会編「教育運動研究」13号 一光社 1980年
- ・戦後沖縄教育実践史研究構想ノート 科学研究費報告書「戦後沖縄の初等中等教育学校における教育実践(主に授業と生活指導)に関する実証的研究」(代表浅野誠) 1981年
- ・戦後沖縄教育出発の枠組みと課題 同上
- ・沖縄教育の反省と提案 明治図書 1983年
- ・討論 沖縄の教育を考える 2分冊 浅野誠編で文化評論社から発刊予定だったが、グラ刷ができた段階で、同社倒産のため、発刊できず

5年という短期間に憑かれたように書いたものだった。そのなかには、多くの原資料の検討、戦後教育の当事者たちからの聴き取り、さらにはアンケート調査などを含んでいた。

それらを集約しつつ、沖縄教育界への強いメッセージを発するというで書いたのは、『沖縄教育の反省と提案』だ。奥付は1983年出版となっているが、出版社の事情でそうなった。実際は1982年の10月に発刊し、すぐに2刷になった。

本土出版社発刊書は、沖縄書店の店頭販売ではなかなか流通しない当時の事情のなかで、友人たちが普及に尽力してくれたお蔭だ。私個人にとっても、記念すべき単著第一号となった。

沖縄教育にかかわるようになって10年の集大成でもあった。沖縄の教師たちが積極的に受け止めてくれたことが嬉しかった。しかし、その後も、同様の構造は根深く続くので、私の作業は継続していく。

そのあたりは、いずれかの機会に書くことになる。(2016年7月31日)

40. 沖生研シリーズの編集発刊

1970年代から1980年代の日本は、教育関係の出版が大変盛んな時期だった。後退していく90年代以降とは対照的だった。学校教員も本をたくさん買い読んだ。90年代以降、インターネットの普及のなか、出版は苦戦していき、倒産もしばしばみられるようになった。教員が本を読まなくなったというか、繁忙化のなかで読む時間さえ取れなくなったという事態の広がりも出版の苦戦の大きな要因だろう。その中で、教員向けに作られる本も簡便なマニュアル系が増えていく。

私の本制作・出版社との付き合いも、こうした事情の強い影響を受けている。1970年代は、私が執筆する本のほとんどが全生研編集のものだったが、80年代に入ると、その輪が広がっていく。70年代終わりから、出版社からの執筆要請や出版企画の相談要請が持ちかけられ始めたのである。それには一つの前史がある。

1970年代の沖縄の書店事情から話を始めなくてはならない。「こんな本を読んではどうですか」と、学生や現場教師にもちかけても、結局は本人が書店に注文を出して、一か月ぐらい後に、再び書店に出かけて、ようやく手にするのが最速最善の方法だった。大学であれば、推薦書籍を大学生協書籍部に伝えるが、必ずしもうまく進行するわけではなかった。それでも「復帰」前のように、書籍価格に送料をプラスして購入するというのが離島以外ではなくなったのが、少しはましになったというべきだろうか。

私個人は、出張などで大都市に出かける際に、必ず大規模書店に立ち寄り、10～20冊も購入するのが通常だった。大学の研究費での購入は、2～3か月後に納品が普通で、大変不便だったし、書籍購入予算そのものが無に等しかったので、大学研究費での購入は例外的なものになり、ゼロの年が数年続いた時もある。

こんな事情のなか、読んでほしいの本は、私が直接出版社から取り寄せて、私自身が販売するというのが手っ取り早かった。著者割引で、定価の80～85%で納品してもらい、差額は、「回転資金」にすることと、購入者の大部分が属する沖縄生活指導研究会に入れることとで分けた。年間100万円近く販売した年もあったと記憶している。お蔭で、「回転資金」ができたので、納品があったらまもなく出版社に送金することができたとし、沖縄生活指導研究会の活動資金もできてきた。

そして、出版社との良好な関係もつくることができた。そんなことも一つのきっかけになったのだろうか。出版社の一つの明治図書の編集長江部満さんから、「沖縄生活指導研究会で、シリーズで本を出しませんか」という依頼・相談が寄せられたのは、70年代末のことだった。

全く想定外のことだった。沖生研内での議論では、「できるだろうか」という不安が先行したが、挑戦してみよう、ということになった。ということで、出版したのが、次の三冊だ。

浅野誠編沖縄生活指導研究会著『行事・文化活動と集団づくり』明治図書1980年

同上『へき地・小規模校と集団づくり』明治図書1981年

同上『集団づくり実践入門——実践のひとりだちまで——』明治図書1983年

実をいうと、大変な作業だった。本の執筆をするのは初体験だという人がほとんどだったからだ。執筆を「決意」させるにも手間ひまがかかったし、執筆イメージをつくるのを手伝うのも大変だし、原稿を添削する（編者の私が担当）のも大変だった。でも、すでに10号余りだしていた研究会誌「民主的な子どもを育てるために」「おきなわの教育実践」の編集作業を積み重ねていたことが大きな財産になった。（2016年月6月5日）

4 1. (続) 本の編集 沖生研シリーズ あゆみ実践選書

沖生研シリーズの一冊目『行事・文化活動と集団づくり』で扱った文化活動は、沖生研に限らず沖縄教師たちの得意分野だし、子どもたちもそうだ。だから、実践のイメージはつかみやすいし、表現力は教師も子どもも高く、各学校学級で多様な実践が展開していた。前に書いたステージ・オブ・ザ・オキセイケンもそうだ。また、中村透さんには、論文を寄せていただき、座談会に出席していただいて、大変お世話になった。

二冊目の『へき地・小規模校と集団づくり』は、やる気に満ちた沖生研教師たちが次々とへき地・小規模校に赴任し、熱心で創造的な指導で、地元の人達から大歓迎を受けた。へき地勤務2年の「義務」を越えて在任した人、なかなか行きたがらない中堅年齢で、希望して赴任した人もいた。へき地、とくに離島勤務は希望を出す例が稀な時代だ。

三冊目『集団づくり実践入門——実践のひとりだちまで——』は、若い人が多いが、集団づくりを始めようとする教師向けに、レッスン体系のようにして各章節を編集して、実践の手ほどきをするものだった。私にとっては、教師教育におけるワークショップの展開という文脈で、その後発展させていったものだ。

あゆみ中学校実践選書第27巻桐山京子・浅野誠編『行事の創造とくみため』あゆみ出版1983年も、思い出深い。

当時、シリーズものが、各学校をめぐる販売員によって、とてもたくさん販売されていた。沖縄ではとくにそうだったようだ。実践をめぐる書籍に飢えていた沖縄教師には、大きな刺激となった。数十冊で10万～30万円もするようなものが販売されていた。私がかかわったこのシリーズもそうだ。

東京の学校教師桐山さんとはこの時だけの出会いだった。私の企画提案も随分と盛り込まれた。その冒頭に、行事の組み立て方の技を書くものを企画したが、執筆を引き受ける人がいなくて、私自身が書いた。それは、琉球大学の水泳実習でのキャンプファイアの学生たちによる創造への私の指導を具体的に書いたものだ。

これらには、家本芳郎さんや中村勝彦さんらの横須賀池上中学校での実践のイメージの影響が多かった。

以上のものは、私自身の大学での教員養成にかかわる実践と、現場教師たちとの共同の実践研究とを結び付けたものだった。そうした姿勢は、私にとって長期の基本的構図だった。当時よく使われた言葉でいうと、教育と研究との結合であった。

また、理論から実践へという一方向の流れで教師教育を構想するのではなく、また理論の応用として実践をとらえるのではなく、理論⇔実践の相互関係のなかで捉えるという、私の考えそのものであった。

それらについて、たとえば、「訓育研究と指導技術」『教育学研究』47巻2号1980年、「教師教育における理論と実践」『教師教育』5号1986年などで論じていた。それらは、1990年頃になると、「研究的実践者と実践的研究者」という用語を造って論じることに至る。

こうした執筆・編集活動がきっかけとなって、その後、毎年のように、こうした仕事を展開していくことになる。主なものを並べておこう。

- ・全生研常任委員会編『障害児の集団づくり』明治図書1984年
- ・村越邦夫・中内敏夫・浅野誠・根本橋夫・平林弘編『教科外教育と教育評価』日本標準1984年
- ・浅野誠・神保映・浅野恵美子編『小学生の問題行動』日本標準1984年
- ・浅野誠・大畑佳司編「講座小学生問題」全5巻1987年

1980年代の私は、小さい娘が「父の仕事は本づくりです」と言っていた様相を呈し始めていた。(2016年6月17日)

4.2. 爆発的に仕事をした1980年前後

長男亡き後、1年ほど呆然としていた。さまよっている感じだった。むなしさを感じることもあった。

そのうち、「なんとかなる」と開き直るような気持ち、転んでもただでは起きないぞと言った感じで、この間経験したことを受け止めつつ、そこからなにかを発見しつつ、それを新たなバネにしよう、といった感じであった。

職場では、無我夢中になっていろいろなことをした。琉球大学教育学部での教育方法改善プロジェクトの取り組みがその軸になった。また、私個人としても、多様な実践に取り組んだし、それを大学教育実践論としても書きまくり始めた。1978～1980年ごろは、そんな時期だった。

それらは、「大学教師奮戦記」(日本科学者会議教育問題委員会・原正敏・浅野誠編『大学における教育実践』第三巻『実践的大学教育論』)に集約して書いた。

また、沖縄の教育現場とのつながりは、以前にも増して強くなり、生活指導分野に限らず多様な実践分野にかかわっていった。その一つは、沖縄民間教育研究団体の共同の研究会づくりにかかわったことだ。1978年には「第一回沖縄民間教育研究団体合同合宿研究会基調提案『どこからどのようにはじめたらよいか』」を提案した。また、当時マスコミを含めて、大議論になった「沖縄の学力問題」へのかかわりも深まった。琉球放送テレビの長時間生番組のセッティングと司会進行を担当したことを含め、いくつもの論文を発表した。その集約点の一つが、「沖縄の教育実践の課題」(『新沖縄文学』46号沖縄タイムス社1980年)だった。

並行して、いくつかの共同研究も含めて、沖縄教育史研究を本格的に展開したのも、この時期だ。

それらを集約する形で出版したのは、単行本としては初めてとなる『沖縄教育の反省と提案』(明治図書1983年)だ。実は、1982年10月に販売開始したが、一カ月で増刷されるほど、関心を呼んだ。

専門分野である生活指導研究でも、私なりの新しい視点で多くのことを書いた。その研究土俵は、まずは沖縄の学校現場での実践との共同研究の展開だ。その成果は、沖生研シリーズ全3巻の刊行に示されている。沖縄生活指導研究会著浅野誠編で明治図書から刊行した。「行事・文化活動と集団づくり」(1980年)「へき地・小規模校の集団づくり」(1981年)「集団づくり実践入門」(1983年)だ。1つの県の研究会が全国出版をそれなりに成功させたのは、なかなかのものだと思う。

沖縄の現場とのつながりだけでなく、全国生活指導研究協議会の大会・全国委員会・各種研究会に、しばしば出掛けて、研究活動を展開し始めたのもこの時期だ。ここでの研究がもっとも厳しく鍛える場となった。当時、ここに集う研究者が大変少なくて、次々と研究会講師・原稿執筆が舞い込む時代だった。年に10回近く全国各地をまわる生活が始まったのも、この時期だ。こんな様子だったから、執筆原稿も多産の時期になり、一年に1000枚書くこともあった。

それでも、このころより、少しずつ若手研究者が増え始め、共同研究する機会が増え、つながりが深まっていった。そして、関連諸学会とのつきあひも、この時期に本格化する。(2014年1月9日)

43. 70年代の担当授業科目 鬼の浅野時代

ここでしばらく、私の担当授業科目と受講生たちについて書いていこう。

1972年4月に授業を始めたが、最初の年は大変だった。赴任した沖縄大学は統合問題の渦中にあり、教職科目のなかの教育学関連科目のすべてを担当した。教育原理はいうまでもなく、道徳教育の研究、教育哲学、社会科教育法なども担当し、前期後期、おのおの6～7科目担当した記憶だ。加えて、琉球大学教育学部の非常勤講師で、教育原理と道徳教育の研究とを、前期も後期も担当した。

結局、週当たり10コマ近く担当した。すべて科目が異なるので、準備が大変だった。最初は、すべて講義ノートを作成し、講義内容を書きこんでいった。100分の授業で、大学ノート10ページぐらい作成した記憶だ。

よくやったと思う。5月末には体調を崩しダウンした。それでも、講義準備が私自身の学習になった。否応なしに学習した。社会科教育法などは、私の学習か学生の学習かわからないようなものだった。

こうして必死の思いで授業をした。だが、受講生の期末レポートを読んでがっかりした。私の講義がほとんど反映していないのだ。ここで、自分が話し続ける講義形式に、早くも見切りをつけた。1972年後期からは、受講生の討論や発表のあるものを試みていった。1973年からは、講義で合宿をして企画をつくりあげることをはじめた。

といっても、25、26歳の私のエネルギーを前面に出して、受講生を動かしていくことが中心で、受講生たちは大変だったろう。でも、それを楽しみにする学生もいた。成績評価を結構厳しくしたし、レポートを中心に課題もけっこうきついものを課していた。まさに「鬼の浅野」の時代だ。

受講生評価をいい加減にすることは、授業をしている自分にたいしてもいい加減にすることだと、気負っていた。レポートの書き直しをさせることは、通常だった。期末の2月には、私の研究室前に、レポート添削を受けるための受講生の行列ができた。そして、ほぼ一か月、レポート読み・添削で明け暮れるころもあった。

そんな「鬼の浅野」は、卒論でも「発揮」した。卒論提出期に学生が泣くことが数年続いた。それでも、すぐれた卒論が生まれてきたことで、救われたというべきだろうか。だから、私を卒論指導教官に選ぶ学生は、相当な「覚悟」をしていたし、数も2～3名と少なかった。

ともかく、1970年代半ばまでは試行錯誤の時代だった。

ちなみに、1973年琉球大学に転勤して以降の担当科目を並べると、教育原理Ⅱ（教育方法）、道徳教育の研究、日本教育史、同演習、卒論指導だった。一度だけ、教養部の特別科目として設定された『沖縄研究序説』のなかの1回だけを担当したのが例外だった。

この「鬼の浅野」時代の受講生は、現在では、すべて60歳代だ。近年、なぜか再会することが多い。（2016年8月12日）

44. 70年代末から80年代への私の授業

私の大学授業は、1970年代半ばまでは模索というか試行錯誤の時期だった。早くから導入した班・小グループを使っただけの授業展開などは一定の成果を収めたが、授業内容にかかわることでの苦労が続いた。それについては、発問をどうするかに焦点化して工夫をしていった。

そのために、いろいろな知恵を集めていく。書籍ということでは、大学授業についての本は皆無に等しいが、小中学校教員が書いた授業に関する書籍は多いと同時に有効だった。たとえば、大西忠治「国語の授業と集団の指導」1970年明治図書には、随分お世話になった。また、まわりの教員たちのアドバイスを求めたが、尻込みされることがほとんどだった。そのなかであって、田港朝昭さんとの意見・アイデア交換は随分役立った。

そして、ようやく1976年頃に一定の目途がたった。教育原理の授業で、宮沢賢治「よだかの星」を教材にして、「よだかのその後はどうなったか」をめぐって思考・討論をさせたとき、初めて手ごたえを感じた。大学授業を始めて、5年が経とうとしていた。

そのころ、学科のカリキュラム改革があり、私が担当しやすい科目設定をいくつか行った。それまでは、私の専攻分野に近いことが展開できる場としては、「道徳教育の研究」だけだったが、それ以降広がった。生活指導、生活指導演習、指導技術演習といった科目が設定された。80年代に入ってからだと記憶しているが、いまでいう初年次科目として、「教育研究法」が、分野別に対応してIからIVまで設定され、私はそのうちの教育実践への入門を扱う一科目を隔年で担当した。

それについては、もう少し後で書こう。

1970年代末から80年代初めの私の実践については、「大学教師奮戦記」（日本科学者会議教育問題委員会・原正敏・浅野誠編『大学における教育実践』第三巻『実践的大学教育論』）に書いたもので、そちらに譲ろう。この時期は、私個人だけでなく、学部多くの教員が授業改革にかかわるようになっていく。そのなかで、授業改革として試行的授業をいくつも展開した。

たとえば、中村透さんとの『初等技術演習』、藤原幸男（授業論）・砂川勝信（英語科教育）さんとの『中等教育原理II』が印象深い。その時は、マット運動を素材にした授業作りをしたので、平良勉（体育）さんの援助も得た。こうしたなかで、同僚たちとの協同協力関係がどんどんできていった。それらも、上述の著書に書いた。

この著書に登場するたくさんの1970年代末から80年代初めにかけての学生たちは現在50代後半だが、素敵に活躍している人に溢れている。

そんななかで、私は10カ月の国内研究を認められ、大学を離れ、東京での研究生生活に移る。そのころになると、浅野研究室の卒論提出に至る指導過程の体制が確立し、3～4年生の学生たちが自主的に学び創造する共同体制が出来上がり、国内研究で私不在でも、学生たちの自主的学習で進める体制になった。私は、必要時点での通信指導をするという形をとった。

そうした学生たちの自主的協同体制は、80年代の私の琉球大学勤務時代を通して継続されていく。（2016年8月21日）

45. 大学教育論 日本科学者会議教育問題委員会

琉球大学教育学部の千原移転ごろまでは、学内業務と、沖縄の教育現場とのつきあい、それらをもとにした研究活動に追われていたが、80年代に入ると、他府県に出かけての仕事も激増してきた。一つは、全国生活指導研究協議会（略称全生研）の研究会参加が、年間数回になってきたこと。教育大学協会を始め大学業務での会議・研究会での出張も年複数回になってきた。学会出張も多くはないが、増え始めた。

そんな時に、日本科学者会議教育問題委員になり、この会議も年数回あり、東京日帰り出張をすることもあった。こうして、飛行機搭乗が年10往復ほどになり、繁忙が輪をかけるようになった。

これらの会議は、専門分野である生活指導研究と大学教育にかかわることが主だった。生活指導研究の仕事は、このころまでは全生研とかかわりが深いものばかりだが、それについては改めて書くことにしよう。

ここでは、日本科学者会議教育問題委員会のことについて書く。私は、いつのことだか記憶していないが、日本科学者会議の会員になったが、積極的な活動はしていなかった。1980年ごろ、同僚という以上に、多くのことでお世話していただいた田港朝昭先生から「科学者会議で、大学教育にかかわる研究組織をたちあげるけど、あなたに委員になってほしい」と持ち掛けられた。丁度そのころ、大学教育、とくに授業問題に熱中していた私は、二つ返事で承諾した。

当時の私の大学授業実践の詳細については、浅野誠「大学教師奮戦記」（日本科学者会議教育問題委員会・原正敏・浅野誠編『大学における教育実践』第三巻『実践的大学教育論』水曜社1983年）に長々と書いたもので、そちらを参照してほしい。

また、そのころ教育学部ですすめていたプロジェクトの共同研究成果を、同プロジェクト報告書（1980～1982年）および教育学部紀要（1980～1981年）に数点掲載したので、これまた参照して下さるとありがたい。

それらと並行して、理論的探求として、「大学教育実践論の構想——その原理と教育主体の確立を中心にして——」（日本教育方法学会『教育方法学研究』第6巻1981年）に書いた。少し後のことになるが、「教師教育における理論と実践」（『教師教育』5号1986年）、「大学教育実践の教育学的検討をめぐって」（日本教育学会『教育学研究』53巻3号1986年）なども書いた。

学会への出席は稀だったことをはじめとして学会の仕事への関わりが少なかった私だったが、この時期だけは例外だった。のちに述べる日本生活指導学会結成に深くかかわるし、日本教育方法学会の理事も務め始めた。

いささか脱線したが、70年代末から大学教育にのめり込み始めた私が、琉球大学教育学部でしてきたことは、全国レベルではどうなのか、ということを確認する意味も含めて、教育問題委員会の委員を承諾したのだった。東京で、年数回の会議に泊らないしは日帰りで参加した。ありがたいことに交通費の実費が支給された。

委員長は、技術教育で著名な原正敏先生で、委員は比較的若い研究者たちが全国各地から集まっていた。多様な専門分野の方々だったが、そのなかに日本教育史専攻の方がおられて、日本教育史研究会の魅力的な運営の話聞いた。それをきっかけに同研究会に参加したこともある。その「若手道場」的雰囲気、生活指導研究界にも作りたいと思った。

また脱線したが、教育問題委員会での、いろいろな討論を踏まえた共同研究活動の最初は、全国の大学教員対象の教育実践アンケートによる実態把握だった。（2016年5月14日）

46. (続) 大学教育論 日本科学者会議教育問題委員会

アンケートは、科学者会議の大学教員会員を対象に配布された。驚いたことに配布数より回収数をはるかに多かった。それは、配布現場で、アンケートへの反応がよくて増刷して配布したためと報告された。

大学教員対象のアンケートの回収率は、良くて30%であり、10%にも満たないことさえある。だから、事前には、回収率の低さへの不安があったのだが、結果は嬉しい悲鳴だった。大学の教育現場で、授業などの教育活動への関心が高いことを反映していたようだ。文章記入欄には沢山の記入があったこともそれを示している。こうした調査研究にもとづく検討議論を待っている潜在的なものが莫大であることを示したようだ。

そこで、アンケートを集計分析する委員会のなかで、この調査結果を広く公開し、論文と教育実践記録を加えた単行本を作ろうということで意見一致をみた。引き受ける出版社も前例がほとんどないものなので、躊躇気味だったが、交渉二社目で引き受け先が決まった。

前例といえば、寺崎昌男ほか編著『講座日本の学力 別巻1大学教育』（1979年日本標準）があるぐらいだった。それは、先駆的な書籍で、教育実践を含んではいるが、「おどおどした」アプローチであり、販売ルートが一般の市販ルートとは異なる特殊性もあって、どれだけ普及したか、私は知らない。それにしても、私にとっては、大学教育論を考えるうえで一つの足掛かりになった本である。

そのほかには、当時、欧米発刊の何冊かの翻訳本が出始めたころである。日本国内では、類書が限定されており、出版社が躊躇したのもわかる。

今回の本は、真正面から大学教育実践を対象にすることを宣言し、タイトルも『大学における教育実践』としたのだ。

3冊シリーズのこの本では、アンケート調査の報告分析に加えて、論文と実践記録を掲載した。実践記録は、アンケートの文章記入で、注目される教育実践をしていると推察される人、委員が推薦する人から、執筆者を選んだ。

といっても、「いろいろとやっではいるが、試行錯誤でお恥ずかしいものだ」と遠慮がちの方が多かったし、研究論文執筆は「お手のもの」だが、「実践記録といわれると、どう書いていいかわからない」という反応が多かった。そこで、私を中心に候補者とやりとりを繰り返して説得し、執筆イメージをお伝えする作業をしていった。そのなかで、論文というよりも、実践事実を中心にした執筆をお願いした。実は、初稿でゴーサインを出したのはほとんどなく、私が加筆の要請を、文章に即して事細かく書いてお願いするケースが普通だった。ただし、論文調過ぎてどう加筆要請すればよいか、手がかりがみつからない一本は、そのまま掲載にいたった。

他のものは、きつい加筆要請をまともに受けてくださって、実践記録としてリアルなものが誕生していった。私自身も、『第三巻実践的大学教育論』のなかに長い長い実践記録を掲載した。

こうして、1983年末には発刊にこぎつけた。当初は不安だった売れ行きも順調にいき、出版社に迷惑をかけなくて済んだようだ。それにしても、本シリーズの出版は、日本の大学教育実践にとっても、私個人にとっても、時代を画するものとなったといえよう。

当時は、FDと言った言葉も全くない時代で、その言葉の使用が広がり始める90年代後半になると、類書が続出し、実践記録もいろいろと発刊されるようになった。

そうした中であって、和光大学は、研究会をつくってとても熱心に取り組まれていた。そのスタート時点に近い1980年代半ばに、10名近くの先生方が、琉球大学まで出張されて、私の授業を参観なさっていかれた。その後、このグループは、実践書を2回以上にわたって発行された。

また、大学図書館問題研究会という、全国の大学図書館職員によってつくられた組織に呼ばれて講演したことが記憶にある。といっても、当時は、そうしたことは例外的であり、私の方からの発信が続く状況にあった。その事態に大きな変化が起きるのは、1990年代半ばであるが、改めて書くことになろう。(2016年5月27日)

47. 健康になってくる 気管支炎とアロエ鼻うがいなど

10代後半から20代前半まで、病名をいくつも抱える私の身体だった。一番長い付き合いは、気管支炎。春と秋の季節替わりに年2回は発症し、40度ほどの高熱を出して数日寝込むのが普通だった。

それが、沖縄生活を始めると、症状が緩和されるようになってきた。そんなころ、私の定番の「アロエの鼻うがい」を「発明」し、日常的にやっていた。アロエをすって、お茶の出がらしにいれ、塩を少々加えたものを、鼻から吸い込んで口から出すというのだ。ヨガの鼻うがいがヒントだった。

ある時、鼻うがいで塊が出てきた。どうやら長年かけて蓄積した固形化した蓄膿だった。それから鼻がよくとおるようになり、嗅覚がしっかりしてきた。これで、長年蓄膿症であったことも判明した。

鼻うがいはその後も続ける。1990年代の寒い愛知生活、さらに寒いトロント生活も乗り切り、気管支炎は、年一回ぐらいになり、高熱も38度台でとどまるのが多くなった。

それでも完治していたわけではなかったが、2004年からの第二次沖縄生活で、気管支炎は「過去の病気」となった。といっても、呼吸器が弱いのは体質的なもので、鹿児島島の桜島の灰を浴びて、おかしくなったことなどがあり、警戒は緩めないでいる。

沖縄生活が身体を良くしたのは、まさに転地療養効果だった。加えて、青年時代の愛知生活東京生活に比べて、ストレスが大幅に減ったことも良かったのだろうと思う。

こんな風だったから、東京時代に悩んでいた鬱症状も、沖縄生活開始そうそう消えていき、病院での薬も不要になっていた。それでも、中一に始まったチック症状、1分間に数十回というまばたきは、回数は減ったものの、80年代にもまだ残っていた。しかし、そのうち消えたが、いつ消えたかは自覚がない。

中学時代、リュウマチと診断され、体育授業も見学状態になったこともあった膝関節痛は軽減され、沖縄にきてからは、スポーツ三昧になった。学生時代にシンカーを投げすぎて発生した肩痛もやわらぎ、シンカーのかわりに覚えたカーブを使って、ピッチャーをしたこともあった。逆に、卓球で腰の回転を使い過ぎて腰痛が始まったのは、1980年代そうそうのことだった。

60もあるかなしかのガリガリ体型も、標準体重に近づいてきたが、80年代に入ると、標準体重をやや越える程度になってきた。中年太り気味になったわけだ。それでもせいぜい64～65キロほどだった。

集団健診や人間ドックなどでの要検査の異常値はゼロに近くなっていく。出るとすると、低血圧とか貧血の類だったが、体質的なものだろう。

それにしても、そのころからどちらかというところ、「健康オタク」的になっていく。でも、アロエなどが中心で、ハーブなどを始めるのは、ずっと後のことだ

こうして、健康な身体になっていった。10代～20代と病弱だったから、初めての健康生活といえるのだろうか。それだけに、30代半ばから40代にかけては、バリバリ働いた。

仕事だけでなく、スポーツも盛んにやり、また当時趣味としていた囲碁も結構やっていた。囲碁は、義兄3人が有段者なので、よくしごかれた。それでも、実力は2級ぐらいで止まり、今に至っている。1990年代からの愛知生活でも、2004年からの沖縄生活でも囲碁環境にないので、すっかり遠のいている。(2015年9月24日)

48. 英仏旅行1. イギリス一周ドライブ

私たちは、それまで外国に出かけた経験が皆無だった。米軍統治下にあった沖縄への出入りがあったので、パスポートは所持したが、「外国旅行」は初めてだ。きっかけは、私たちの友人が、ロンドンとパリに在住していて、来ないかとの誘いがあったからだ。

最初に恵美子が乗り気になって、私が当時5歳と3歳の子供達の育児を引き受けて留守番をする羽目になりそうだった。私も行きたいと叫び、祖父母に預けて旅行することになった。1981年3月のことだ。

まずロンドンへ。友人たち家族が世話してくれた。ロンドンの代表的なところを見学するとともに、ロンドンの生活ぶりを拝見した。小学校にも出かけた。誕生日が入学日とか、都市の人口密集地域でも、複式学級が珍しくないことなど、それまで日本の学校しか知らなかった私には驚くことが多かった。誕生日入学だから、同一年齢同一学級で一斉進級というわけにはいかないこともあるが、少人数で丁寧な世話指導ということで、結果的に複式になっているようだった。そして、福祉的機能がかなり含まれていることを感じた。

友人家族宅にとまって、生活を実感する旅だったのがよかった。

友人が愛するパブにもいくつか出かけた。地域社交場という感じだ。次に書く一周旅では、毎晩食事を兼ねて田舎のパブに入り、地域の人との出会いを楽しんだ。

友人一人と私たちを合わせてのイギリス一周2週間のドライブ旅行が、もっとも印象に残っていることだ。国際免許証を持参してきた私が運転手で、友人が通訳という分担である。無計画で、行く先々でB&B(ベッド・アンド・ブレイクファースト)を見つけ宿泊する日々だった。まずはブリテン島の東側を北進して、インバネスまで行き、そして、西側を南下しロンドンに戻る旅だ。2週間で2000マイルを走ったので、レンタカー屋も驚いていた。

3月の寒いオフシーズンだったので、どこもすいていた。

ロンドン市内は別にして、運転がとても穏やかなところで、初の外国運転でも気持ち良く過ごせた。レンタカー店で時速制限はどれくらいか、と尋ねたら、不思議そうな顔をされた。気にする人が少ないのかな、と思った。実際走ってみると、制限時速標識はあるのだが、それを越える車はとても少ない。日本のように、制限時速を少々超えて走らないと、かえって叱られるのとは大違いだった。

それに、合流地点や、横道から大通りに入る時、たいていは譲ってくれるのも驚きだった。また、日本同様、人は右、車は左であることも幸いだった。

だから、交通トラブルには全く出会わなかった。中北部に行くと、たいていの一般道路さえ、無料の高速道路という感じだった。田舎道に入って、道路の真ん中に牛の一行が休憩しているのに出会った。待つしかない。30分ぐらいして、ようやく通行可能になったのも、楽しい思い出だ。

スコットランドなどでは、朝がかなり冷えてエンジンがかからなくて、困ったことがあった。泊まったのは、田舎の地元集会所とパブを兼ねたB&Bで、前の晩知り合った若者たちが、車を後ろから押して、エンジンをかけるのを手伝ってくれたのも、楽しい思い出だ。

旅の後半はパリだったが、交通状況をちょっと見ただけで、運転する気持ちは失せた。激しいのだ。ロータリなどは、イギリスとは対照的に、流れに乗ることも出ることも難しそうだった。路側帯駐車も驚いた。前後の車との間隔がゼロに近く、どうやって駐車したのか、不思議だった。その一つの作戦は、車の前後に、先にテニスボールをつけた棒を取り付けるのだ。それで、相手の車を押しながら駐車するという具合だ。車同士がこすりあうぐらいは日常茶飯事という感覚らしい。(2015年6月21日)

49. 英仏旅行2. イギリス歩き

私は、英会話は全く未体験だった。でも、中学高校大学と英語学習したから、初歩的なことはどうにかなる、と思い込んでいた。ある観光地で、見知らぬ人から“Can you speak English?”と尋ねられたので“a little”と応えたら、普通で話しかけられて、困惑してしまった。「a little は yes と同じだよ」と教えられ、それ以降は“I cannot”と応えることにした。

ともかく、私が学習してきた受験英語が、「全く役立たず」であることを、その時痛感した。英語・英会話を学習しはじめたのは、カナダ滞在が決まった1998年夏以降のことだ。

このイギリス歩きは、ケンブリッジ、ヨーク、ニューキャッスル、エジンバラ、インバネス、ネス湖、スコットランドの全く未知な田舎、グラスゴー、湖水地方、ウェールズ、コーンウォールなどと、ほぼイギリス一周をした。行かなかったのは、北アイルランドと、島嶼地域だけとっていいほどだった。

宿泊は、B&Bだが、友人が探す名人で、大助かりだった。車の運転ができない彼も、これを機におおいにエンジョイしたというわけだ。素晴らしいお城、昔の別荘地、田舎の集会所兼パブ兼B&Bの連続だった。合計10泊以上の旅だ。全くのオフシーズンなので、安価だし、他に客はいないのが普通だった。だから、宿主にはうんとサービスしていただいた。

印象に残るのは、スコットランドの雪原走行中に、たくさんの鹿を見かけたこと。ネス湖は、ネッシーどころか、すれ違う車さえ、30分に1台のこともあった。途中で移動販売車があり、そのマークがネッシーだった。

スコットランドの田舎を通った時、「東洋人が来た」というので、たくさんの村人が、私たちをもの珍しそうに歓迎してくれたことだ。このあたりに来る東洋人は中国人で、日本人は前代未聞のようだった。そこで買ったマグカップはいまでも愛用している。そしてその近くの漁港風景はとても印象的だった。

イギリスは、食事にこだわるところではなさそうだった。夕食は、B&B近くのパブでいただくことが多かった。朝食は、大きな紅茶瓶と牛乳瓶が出てきて、自分でミルクティーにする。5杯分ぐらいの感じだった。それにジャガイモとベーコン、そしてクッキーかパンというのが普通だった。大量なので、昼食は、朝食の残りのクッキーで間に合わす

ことがあったぐらいだ。

ウェールズに行くと、英語とウェールズ語が併記された道路標識が印象的だった。スコットランドでは、スコットランド銀行券も流通していたのが記憶に残っている。

ロンドンには数日滞在したが、私の印象に残っているのは、大英博物館だ。二度も出かけた。ここを思う存分見るには一か月かかるな、と思った。イギリス全盛時代の世界から集めた財宝は、桁外れだ。

ロンドン市内見学を一通りしたし、イングリッシュガーデンも見た。

ロンドンからは特急に乗って、パリへ向かった。特急列車と連絡船がセットされていて、連絡船で国境を越えてフランスに入った。すでにECができていたので、パスポートチェックもなかった。

英語なら、目で見ればなんとかわかるから、なんとかあったイギリスだったが、フランス語は全くのゼロの私は、どうにもならず、何度も苦労した。当時のフランスでは英語表示も少なかった。(2015年7月21日)

50. 英仏旅行3 パリ歩き 海外旅行海外生活

フランスでは、友人家族が住むパリを中心に歩いた。

静かでジェントルマン風のイギリスとは対照的に、パリは、活気にあふれる印象だ。

まず困った話をいくつか書こう。路上に犬の糞が多いのには辟易した。ロンドンでもそうだった記憶だが、パリは激しかった。たかりの子ども達にも困った。ヴェルサイユの森の売春婦の勧誘行動も驚いた。有料トイレの使い方もわからず困った。

3、4日の滞在だったので、ベルサイユ・ルーブル美術館など代表的観光地をまわるだけの旅になった。それでも、さすが芸術の都パリ。有名な絵画・建築、豪華な宮殿などに圧倒された。

それにしても、イギリスにしてもフランスにしても、何百年前という建物が残るだけでなく、それらが使われている。ストックの大きさが強い印象だ。日本だと、100年以上前の建物に住んでいるのが例外になるのとは対照的だ。

35年近く前のことなので、記憶が薄れてきた。ただ見るだけの観光だったから、そうなのだろう。それでも、友人たちがいろいろと案内してくれたし、人々の生活ぶりの一端に触れたことが印象に残っている。

3週間ほどの旅だったが、記憶が薄れたとはいえ、印象深い旅だった。そのころは、海外に行く機会は、その後あまりないだろうと予測していた。実際、次の海外旅行は、1995年のカナダ西部旅行で、これも観光中心だった。その直後の1996年から事情が変わって、観光ではなく所用でカナダをはじめとする地域に頻繁に出かけるようになるとは、想定外だった。そして、まがりなりにも外国語生活するとは、想定外の想定外だった。

結果的に、合計10数か国、20回ほどの海外旅行をした。そのすべてが個人旅行だ。そして、ほとんどが現地の知り合いとのつながりがある旅だった。

今になって思うのだが、海外旅行、特に海外生活は、20代、30代という時期にすれば、その後に役立つ。単なる観光旅行では、余り意味がない。できれば、所用がらみで、しかも滞在先の知人とのつながりをもとに出かけることをお勧めしたい。若いうちなら、言葉習得も早いなど、対応能力は高い。

世界を体験し知ること、世界だけでなく自分自身の発見にもなろう。こんな旅のスタートが10年でも早ければ、私の人生シナリオは大きく変わっていただろう。世界的視野で考え始めたころには、すでに50代になっており、遅きに失した感はある。

こんなことを書いていると、1970年代後半私に海外研究を勧めた東洋さんのことを思い出した。著名な教育心理学研究者で、私の大学時代の先生の一人でもある。彼の授業は受講しなかったのだが、1967～69年頃、教員代表と学生代表という立場でいろいろと折衝する役柄で出会い、それを越えて、なぜか親しくさせていただいて、飲み合った関係であった。その彼と、70年代後半に、沖縄教育センターのシンポでパネリストとして同席した際に、海外研究のお勧めを受けた。私は、アメリカ向きではなくて、イギリス向きだと言われた。

また、そのころ、海外で研究をする方を迎える琉球大学の集まりで、「アメリカに来るならと世話をするよ」という声掛けをいただいたこともある。

だが、当時の私はその気は全くなく、他人事で聴いていた。「今から思えば」などといっている、何の役にも立たないことだ。(2015年8月25日)

5.1. 小波津団地での暮らし

小波津団地の我が家は敷地50坪のうち10坪の敷地に2階建てで建坪20坪ほどだった。浄化槽や駐車場などを除くと、30坪ぐらゐは庭畑にできた。建物近くは芝にした。芝は手入れが大変だ。一応芝があるぐらゐの感じだった。その苦労は今も繰り返している。きちんとした芝にするには、プロの技術が必要なようだ。

隣地との境界あたりをちょっとしたアタイグワーにした。しかし、野菜づくりはまったくの素人なので、あまりうまくいかなかった。そのうち他の大きな植物が伸びて、野菜作りはふっとんでしまった。

大きなものというと、バナナとアレカヤシだ。バナナは収穫に至った。古畳をいれるといい、という話を聞いて、入れたこともある。

アロエに凝っていたので、育てていたが、うまく行った記憶だ。

敷地への入り口は、ブーゲンビリアのアーチにした。これは結構できのいいものになった。しかし、台風で、鉄製のアーチごと吹っ飛んでしまった。

ある年、浄化槽そばにひまわりを植えた。なんと3メートルを超すほど大きくなり、二階の窓からも楽しめた。大きくなった原因は、根が浄化槽の中まで伸びて、栄養補給していたからだ。

その近くにココヤシを植えて、順調に伸び、幹らしきものが見え始めたころ、突然枯れた。虫にやられたようだ。立派な樹木になりそうだと期待したが、残念だった。

隣地との境界と、道路沿いに低いブロック塀をつくった。私の大工仕事だ。大変だが、結構楽しくやった。今でも残っているはずだ。高い塀は嫌いなので、3～4段にとどめた。外から、我が家の様子が分かる感じの高さだ。塀が高いほど、泥棒が入るといふ話は、警察では定説のようだ。

そのブロック塀に沿って、オオバナアリアケカズラを育てた。これは今でも、我が家の定番だ。ウコンラッパバナという巨大な花を咲かせるものを植えたこともある。

駐車場も私自身が作った。あのころは、お金がなかったこともあるが、こういう仕事が好きだったし、体力もあった。
(2014年11月20日)

52. 日曜大工 遊び道具作り

1980年頃ハマっていたのは、日曜大工。NHK教育テレビの連続番組をよく見た。当時、メイクマンをはじめとする日曜大工の店が、沖縄各地にできはじめた。いろいろと道具・材料などを買ひに出かけた。

いくつか挑戦した。まずテーブル。

大きなテーブルを作るのが夢だった。普通に売っているものより、もっと大きなものが欲しかった。1畳ぐらいのテーブルでも買えば結構な価格のものを、材料費2000～3000円で作れるのは魅力的だった。

実に簡単な思考で始めた。厚いベニヤ板2枚と化粧合板1枚を接着剤でくっつける。それに4本の脚をつける、というものだ。テレビでやっていた接着剤のすごさに感動したことがきっかけだ。厚さ3センチに立派で美しい板はできた。そして、脚も接合できた。

しかし、しかし、である。一週間もしないうちに、板の中央が沈み始めた。要するに、板の重みが作用した。脚の位置が端に近すぎたことが最大の問題だった。

それでも使えたので、数年は使った記憶だ。

次の思い出は、木の飛行機づくり。4、5歳の息子を喜ばせようとして、タテヨコ70～80センチもある飛行機型のものをつくり、ローラーをつけて、それに乗って移動できるものを作った。そして、ハウナンバーのB84というのを書いた。なぜか米軍戦闘機のB29、B52に似てしまい、苦い思いをした。私が一生懸命制作したわりには、子どもたちには喜んでもらえなかった。

工作ではないが、子どもが通う保育園で、保護者がおもちゃ作りをすることになった。私は奮闘して大型ヒトデを作った。4本足の2メートルをこすものだ。実は古ズボン2着にぼろ布を詰め込んで縫い合わせたものだ。話題性はとびきり豊かだったが、おもちゃとしての実用性の点では評判は悪かった。肝心の子どもたちが遊んでくれなかったのだ。

こんな試行錯誤というか、失敗だらけの私だったが、息子が感化されたのか、こうしたものをつくるのがうまかった。あるとき、大型のパチンコ台をつくった。当時みかけたスマートボール台といった方がいいだろう。結構楽しめるものだった。

きわめつけは、息子と私との合作だが、室内ゴルフ場だ。ボールはピンポン玉。室内のあちこちに障害物を置き、ホールもあちこちだ。なかには、高さ30センチぐらいの所にセットしたものもあった。ゴルフをするよりも、セットする楽しみが優先したかもしれない。それでも、近所の子どもたちと共に遊んだ。

我が家は、子どもたちが楽しく遊ぶ場でもあったのだ。

息子は今でも、孫たちのために、実力を発揮しているようだが、私の大工道具は20年近く眠ったままだ。でも木工製品は大好きで、クラフトフェアなどに行くと、木工の店に立ち寄ることが多い。今私が使っている机は、長さが2メートルを超すでかいもので、3人がかりでしか持てない。念願の手作り作品を、近くの木工芸術家に依頼して作成して

もらった、楠の一枚板だ。(2014年12月22日)

5.3. 子育て 動物育て

私たちは、結婚式の誓いの言葉の3ヶ条の一つに「オープンな家庭をつくる」を掲げた。ということもあって、いろいろな人が我が家を出入りした。大人だけでない。近所の子どもたちも出入りした。近所の家も、結構オープンで、子どもたちはよく遊びに訪問していた。家のまわりの道路は子どもの遊び場だった。

息子が少し大きくなると、団地の外まで遊びにでていた。小波津団地に隣接する津喜武多グスクのふもとには、ガマという防空壕があり、そこも遊び場だった。このあたりは激戦地だったので、よく遺骨収集が行われていた。そんな場所だったので、親としては冷や冷やしていたが、息子は、そんなところから金属片を集めてきて、ダンボール一杯にしていた。30センチくらいの砲弾の破片もあり、恐る恐るのぞくが、中が空で、ほっとした。私はこっそり、金属くず回収屋さんに渡した。

子どもたちを保育園に預けていたが、あるとき、息子が早朝5時ごろに近所に出かけたまま帰ってこないことがあった。近所を探し回っていたら帰ってきた。

共稼ぎだったので、保育園や学校が休みの時は、近所の人に面倒を見てもらっていたこともある。時には、学生に面倒を見てもらうこともあった。あるときは、二人とも出張のため在宅できないで困ったことがあった。その時、ゼミの学生たちが総出で、我が家に泊まりこんで、子どもたちの面倒を見てもらった。帰ってきて子ども達に聴くと「お化け話が面白かった」「マージャン教えてもらった。トランプのインチキも教えてもらった」と楽しそうに語る。無論、学生たちにはそれなりのお礼は差し上げた。(2015年1月24日)

5.4. 小中高校の子ども・生徒相手の実践体験

大学3、4年生のころ、卒業後の進路として、現場教師になろうか、大学院を経て研究者になろうか、迷った。結果として研究者の道を選んだが、現場教師の仕事への「未練」は残っていた。そこで、大学教員になって以降も、子どもたち生徒たちと接して指導する機会があれば、それを積極的に生かした。それだけでなく、そうした場を作りもした。現場教師から呼ばれれば、出掛けて指導の一端をになうこともあった。

70年代前半で記憶に残っているのは、映画センターが渡嘉敷島で子ども合宿をする企画に参加して、いろいろと関わったことだが、記憶が薄れている。

「ひまわり学校」という名前が多かったが、沖縄生活指導研究会に集う教師たちは、夏休みなどに、数十人の子どもたちの合宿を企画し、これまた多くの教員が参加して指導にかかわる企画を、しばしば開いた。子どもたちの成長だけでなく、教員の指導力量を高める目的もあった。

一番はじめは、私が沖縄に住む直前に国頭で開かれたものだった。宮城ヨネ先生がその牽引者だった。その取り組み

がとても印象深いものだったので、他の地域でも開かれたし、沖縄全体を対象にしたものも開かれた。今帰仁の「でいご荘」や石川少年自然の家で開いたものが記憶に残っている。これらには、何度も参加した。教員にとっては、事前、そして夜の職員会議が重要な研修研究の場だった。私自身も、リーダー指導とか、フリー指導担当とか、いろいろな役割をとって参加し、実際に子どもの指導をし、加えて、集団指導に慣れない教員たちを指導する機会にした。

「でいご荘」の時は、夜、緊急保護者会をもった。子どもたちのほとんどが、参加した教員自身の子どもだったが、過保護気味であり、積極性不足が感じられたからだった。

時には、離島教師が、自分が担当するリーダー生徒たちの研修の意味を込めて参加させることがあった。南大東中学校の生徒たちもそうだったが、本島の生徒たちと共同活動することで、最初は怖気づいてしまうこともあった。

それをきっかけに、南大東で、中学生全員を対象に、夏休みに入った日に、『ひまわり学校』を開くことになり、私が校長役になることになった。当時、南大東小中の教師たちは、ほとんどが20代という若さでやる気に満ちていた。離島で2年交代勤務が普通だった当時、彼らの多くは3年以上勤務し、奮闘した。数年前、そのころ生徒だった人に偶然あったが、そのころの教師たちのことをよく覚えておられた。

こんな風に、南大東だけでなく、沖縄各地に、子ども・生徒の自主的自治的活動の指導の仕方が具体的に体験できる場として、また、生徒自身が成長する場として、大きな役割を果たした「ひまわり学校」は、1980年代まで続いた。

私自身も、この機会は、子ども・生徒、さらには学生、さらに現場教員に対する指導力量を高める絶好の場だった。全生研や沖生研の研究会では、参加教師の実践記録を共同検討する中で、実践力量を高めるということが中心的な形になっていた。そういう場で、私なりに、実践の課題・方向・方法について発言していたが、口でいうだけでなく、実際の実践の場で、いざとなればその教師に代わって実践が展開できるぐらいの確信をもたなくてはいけない、という気持ちだった。そんなこともあって、小中高校の現場での実践機会をたくさん作って取り組んできたのだった。(2014年2月23日)

5.5. 教育実習以外に子どもに直接かかわる現場実践の授業

前回書いた「ひまわり学校」には、70年代終わりごろからは、大学授業とリンクさせて学生を参加させることを何度もした。形を変えた教育実習だ。そのうちに、当時の文部省予算に、教員養成実地指導講師というものが設定された。それを活用する動きは弱かったなか、私は大いに活用した。一緒に研究をしていた小中学教師に依頼して、講師になってもらい、教育現場と緊密に結んだ授業を展開した。私の担当科目の一部で、講師として活躍していただいた。

当時の石川少年自然の家でのひまわり学校には、何人もの学生たちが大学授業の一部として参加し、現場教師とともに子どもの世話指導にかかわった。

また、80年代半ばころになると、大学授業の中の指導技術演習とか生活指導演習とかの科目で、学童保育、児童館、保育所などの現場に受講生が入って、みずから実践を展開する授業を多様に展開した。それらは、子どもたちの世話をする厚生省からの予算はあるが、どう展開したらよいか模索していた那覇市の関係部局と連携した取り組みとしても展開した。

休日の与儀保育所を使用しての取り組みを担当したグループは、取り組み当初、その場に子どもたちが来ないので途

方に暮れていた。この取り組みは、最初から対象の子どもがいるわけではなく、子どもたちが自然と集まってくるような取り組みを受講生が用意して、子どもたちと活動するというものだった。

そこで、沢山の子どもたちが遊んでいる与儀公園へ私と学生たちが出向いて、子どもたちを誘う所からスタートした。学生たちは、遊んでいる子どもたちに声をかけられないでいたので、私が誘いかけの見本を示すことになった。その結果、10人近くの子どもたちが与儀保育所に来て、学生たちが企画した活動に参加し盛り上がった。

こんなことを、若狭児童館、識名児童館、浦添仲間学童クラブなどで展開した。土日を中心に数回出掛ける取り組みで、一定の区切りがいたら、実践記録を書き、書いたものを大学授業で検討するという流れだ。実践記録を集成した報告書は、取り組み場所ごとに、100ページを超えるものを作成した。

当時の教育実習は、教育学部での学習のまとめあげの位置の4年生で実施されていた。3年生までは実践の具体的なイメージをもてずに学習するので、学生たちは不満をもっていた。その点で、こうした取り組みは歓迎された。

この取り組みは、小学校のように、子どもが教室に最初から座っていて、学習への構えをそれなりに示しているところでの教育実習とは異なり、子どもは自由参加で、企画が面白ければ参加するというものであり、受講生たちの実力が試されるものだった。考えようによっては、通常の実習よりはるかに難しいものだった。しかし、それだけにやりがいがあり、感動を伴うものであり、これをきっかけに教師になる決意を固めた学生も多い。いまでは、かれらも50歳前後のベテラン教員になっている。

そんなころ、学童クラブに子どもとしていた人で、今では沖縄全体の学童クラブの推進役を務めている人もいるから、時代の進展というのは面白いものだ。

そのころ、沖縄での児童館や学童クラブが本格化し、指導者たちの研修会にもかかわった。また、那覇市の青少年健全育成計画の策定委員会の委員にもなった。少しずつこうした役割もとるようになっていく。(2014年3月18日)

56. 子ども・生徒対象実践での冷や汗体験

前回書いたように、機会さえあれば、子ども・生徒相手にいろいろな実践を試みた。それなりにやれた時もあるが、失敗して冷や汗をかくこともあった。

冷や汗体験の一つは、私たちが住んでいた小波津団地の子どもたち数十人を対象に集団遊びをした時だった。子どもたちが、指示に従って動かず混乱してしまった。後から考えれば、私だけでなく子どもたちも初体験だった。5歳ぐらいから3年生ぐらいまで多くの子どもたちが事前プロセスなしに、指示やルールに従って動くというのは、そもそも無理な話なのだ。その無理さ加減がわからず、やってしまったのだ。結果的に半数ぐらいの子どもが参加する集団遊びになった。

1980年代になると、我が子たちが西原小学校に通いはじめた。あるとき、PTA企画として、学級PTAに初挑戦するということがあった。担任教師も未経験でやり方がわからないというので、PTA役員でもあった私が、代わりにやることになった。その時は、用意周到に準備をして臨んだ。いつものクラスメイトといっしょだし、保護者もたくさん参観しているので、子どもたちも緊張して取り組んだ。細かくは覚えていないが、親子討論のようなことをしたはずだ。

冷や汗の極めつけは、80年代半ばの沖縄水産高校3年生全員対象の学年集会での活動だった。高教組の研究集会で、

生徒の動かし方が話題になった。私がいくつかアドバイスした。「では、実際にやって見せてほしい」という要望が出された。引くわけにはいかない。ということで、沖縄水産高校ですることになり、いくつもの高校からたくさんの教師たちが参観していた。

不幸にも悪条件が重なった。9月の暑い午後、体育祭の練習を終えて、百数十人の3年生が体育館に集まってくる。来た生徒は、疲れた体と顔で、入ってくるなりに体育館の壁にもたれて坐りだす生徒がほとんどだ。

「これは深刻な事態だ」と悟った。当初プランが、最初からふっとんだ。参観している教師は、参観に徹していた。とっさに思いついた。壁にもたれていない生徒が数人いた。その生徒たちにかすかな期待をもちつつ、全体に声をかけた。

「倉庫からマットをクラス数だけ出してくれ」

動きは鈍かった。それでも、「なんか変わったことが始まりそうだ。見たこともない教師が、いつもとは全く違うやり方で、声をかけているな」と思ったのか、数人がマットを引きずってきて、中央に広げた。

「マットの上に、何人乗れるかな。クラス対抗だ。」と声をかける。

最初は数人だったが、そのうち、一割ぐらいの生徒がマットに乗ると、流れが変わり始めた。もぞもぞとはしているが、動きが広がる。一つのマットの上に、10人以上のようになると、クラス対抗の雰囲気が出始める。

かくして、クラス対抗「団結の樹（別名クリスマスツリー）」が成功。

それから、いくつもの集団遊びをやると、ノリが出てくる。それでも、体育祭練習の夏の暑い午後だから、暑すぎるし、疲れも出てくる。そこで、ノットついでに、クラス単位で体を動かさなくてもよい「群読」に挑戦させる。だが、ここで、生徒の反応が止まる。私は、再び、冷や汗状態。参観している教師たちにヘルプ信号を出す、誰もヘルプしてくれない。

そこで、生徒に、「また次の機会にしよう。今日は、大いに盛り上がってくれてありがとう」とねぎらいの言葉をかけて、終わりにする。

終了後、参観教師たちと感想意見交換した。そこで、わかったこと。

教師たちは、私がヘルプ信号を出しているとは、全く認識していなかった。「沖縄水産の生徒がこんな活発に動くとは」と驚いていたのだ。

高校教師たちの苦労がわかるとともに、いろいろな指導の前提となる「生徒の動かし方」といったことで、多くの教師がつまづいているのだな、ということも分かった。（2014年4月14日）

57. 卓球・旅・学生 1980年代初め

大変な年だった1976年の後のしばらくのさまよい、猛然と動き出した1978～79年を経て、ようやく落ち着きを取り戻してきた。体調もよくなり、毎年季節替わりに悩んだ気管支炎も、症状が治まってきた。卓球をはじめとして、体を動かすことが多くなった。

卓球をやりすぎて腰痛になったのは、35歳、1981年ごろだった。腰痛は、その後30年近く付き合うことになる。卓球では、いろいろな試合に出始めた。全沖縄教職員卓球大会には、70年代半ばから出場し始めた。当時大変な盛況で、200名ぐらいの参加者がいた。団体で出場した琉球大学チームは、上位になることが多かった。チームで宮

崎の串間で開かれた全九州教職員大会にも出たことがある。

1975年には、南風原村の大会に出、さらに島尻郡の大会に出、さらに島尻郡代表で県民体育大会に出場したことがある。当時は、団体のなかに教員枠があって、そんなに上手くない私も出場できた。今も親交がある田畑さんとは、その時に初対面だった。西原に転居してしばらく後に、西原・中頭の大会にはしばしば参加し、時には中頭代表で県民大会にでたこともあった。

1970年代後半のいつだったかは忘れたが、琉球大学卓球部の顧問も引き受けた。引き受け条件は、私に卓球を教えてくれることにした。今では、首里城の御庭になっているところにあった、琉球大学本館前のプレハブ教室の一つが卓球部練習場で、私もよく通った。

そのころから、全国各地に出かけて、全生研関連の研究会参加・講演などをすることが増えてきた。また、教育学部の会議や教育大学協会研究会など、大学所用などで他府県に出かけることも増えてきた。ということで、年に数回以上の本土出張するようになった。東京の会議に日帰り出張をし始めたのも、そのころだ。

こうして、1970年代末から1980年代をとおしての「繁忙」の季節に入った。そのなかで大きな比重を占めたのは執筆活動だが、それについては次回にしよう。

1970年代末から1982年ごろの大学教育活動も、猛然とやっていたが、それについては、著作にすでに詳しく書いたので、ここでは省こう。当時の学生たちは、いまでは50代前半から半ばになって、多様な活動、人生創造を展開している。

少し余談だけしておこう。当時の私は、なぜか学生たちのカップルづくりを応援するのが好きだった。10～20ぐらいのカップルづくりに関与しただろうか。無論、失敗もあるが、成功も多い。この連載に、結婚式づくりを書いたが、卒業生の結婚式づくりにもかかわった。そして、80年代半ばになると、仲人役が回ってくるようになった。そんなこともあって、九州を中心に全国各地の卒業生の実家を訪問することが結構あった。全国各地の結婚式のしきたりの違いに驚いたりもした。

卒業生通信を発行し始めたのも、そのころだろう。学生時代を終えて各地に散らばるゼミ生を中心にした卒業生の情報交流手段として始めた。年賀状・暑中見舞い代わりでもあった。便りをくれる卒業生一人一人に細かい情報を書くのは大変なので、集まってくる卒業生情報を集約し、印刷して送ったのだ。

こんなことが、その後も形を変えつつ、20年以上続いた。インターネットメールが普及するようになって、変化しているが。(2014年5月23日)

58. モーレッツな執筆活動

1980年頃から、猛烈な執筆活動をした。

その一つは、琉球大学教育学部で行った「教育方法改善プロジェクト」に関わった執筆だ。教育学部教員の半数以上がメンバーとして参加し、大学教育にかかわる多様な分野についての共同研究、具体的な試行実践、提言など、その後の教育学部の教育活動に多くの示唆を与えたものだ。私は総括幹事として深くかかわった。

このプロジェクトと並行するように、大学教育論について、「大学教育実践論の構想」(『教育方法学研究』198

1年)など、多様な場で問題提起をした。私自身の教育実践についても書いた。そして、日本科学者会議教育問題委員会・原正敏・浅野誠編『大学における教育実践』全3巻(1983年水曜社)の編集に深くかかわった。

また、沖縄の現場教師と協同して、浅野誠編沖縄生活指導研究会著『冲生研シリーズ』全3巻明治図書(「行事・文化活動と集団づくり」1980年「へき地・小規模校の集団づくり」1981年「集団づくり実践入門」1983年)を編集執筆した。

沖縄教育論についても、沖縄教育史についてのいくつかの小論とともに、「沖縄教育の反省と提案」(1983年明治図書)を書いた。

本業の生活指導分野では、「学校文化の創造」「訓育研究と指導技術」「幼児教育(後期)から小学校低学年までの集団づくりの位置と課題」「青年期への旅立ちとしての中学生の行事」など、文化創造や発達などにかかわる生活指導の論文をこの時期に30本ほど書いた。

こんな風に、この数年で、単著、編著書合わせて10冊近くと、研究論文数十本書いている。爆発的に執筆した感じだった。

沖縄教育論にしても大学教育論にしても生活指導論にしても自分なりのものが形をなしはじめたといえよう。まさに「第二の人生」の爆発といった感じだった。他の仕事を手抜きしたわけではなかった。むしろ他の仕事も忙しかった。自分なりの研究・実践創造が見えてきたという感じの時期だった。研究上の出会いも増えて、多様な方々との討論が、多くの発見創造につながった。

この時期になると、自分自身の実践も含めた実践事実をベースにして論理を構成して執筆することが、少しずつできるようになってきたと思う。それが、原稿枚数を増やし、執筆速度を速めた。それまでは、理屈を難解な言葉・文で「こねまわす」雰囲気包まれたものが多かった。

原稿依頼も増え始め、対応できずにお断りする例も出始めてきた。依頼原稿に対しては、期限までに送付する、遅れても、依頼先と調整を図りつつ10日以内にとどめるということは、当時だけでなくずっと今日まで続けてきたことだ。最近では、期限よりずっと前に送付するのが普通にさえなってきた。「貯めておく」ことが精神衛生に悪いという感覚でもあった。

当時、「貯めてあった」仕事は、「沖縄県の教育史」だった。1980年ごろだったと思うが、西里喜行さんの紹介で依頼があったもので、「原稿完成日を締切日にする」という感覚のものだった。ほぼ10年かけた仕事で、琉球大学から中京大学に転任する直前の1990年に原稿送付した。出版社もゆったりしていて、それから出版まで2年近くかかっている。

こんな具合だったから、娘が「パパの仕事は本づくり」と話すぐらいになってきた。1970年代末から、まさに繁忙の日々であった。他府県に出かけることも、70年代半ばまでの年2～3回から、年に10回近くまでに増えていった。繁忙の最中、子育てを助けてくれたのは、近所の方々、そして学生の皆さんだった。それについては改めて書くことにする。

そんな繁忙に一区切りをつけられたのは、1983年4月から1年間の東京での在任研究だった。(2014年6月23日)

余談8 体育、音楽など、多様な分野との交流

私は、いろいろなことに顔を出す。悪く言えば、「飽き性」なので、一つのことをずっと継続してやることができない。何年か夢中になっても、しばらくすると、関心は別のことに移るのだ。だから、私が燃えているときには、関心を集めなかったことが、燃え終わってから、私が提起した事に関心が集まることもある。

よくいえば、多様なことに関心が向いて、広い視野で物事を考えられるということだろう。

琉球大学教育学部にいるとき、いろいろな専門分野の先生方の所に、顔をだした。そのきっかけは、大学院時代に指導教官であった稲垣さんの話だ。前任校の宮城教育大学の経験をもとにして、「地方の教育学部には、多様な専門分野の人がいて、その交流が面白いよ」という話だ。この話は魅力的で、1973年琉球大学に転任して、すぐにいろいろな所に顔を出した。

最初は、体育だ。青年時代、病気などでスポーツ不完全燃焼だった私は、いろいろなスポーツをやってみたかった、ということもある。授業に他の学生といっしょに出たこともある。体育の話は別のところすでに書いた。

次にしたのは、音楽だ。今も悩む「オンチ」の私が、作曲家との飲み話が発展して、彼の授業を受講することになった。他にも、いろいろと顔をだしたが、専門分野を超えた共同研究とか、共同の教育企画があれば、積極的に参加したし、私自身が企画をしたりもした。

こんな風だから、私の専門分野についての記述は、5、6年につづぐらいのペースで、新しいのが加わり、その代わりになにか一つが消えていく。(2010年2月16日)

59. 琉球大学教育学部の研究会や委員会

1978～1983年は、琉球大学教育学部のいろいろなことで繁忙な時期を過ごした。すでに公開されている報告書なども多いので、ここでは私個人がかかわる「裏話」的なことを書こう。

その前史になる話だが、教育学部教員有志による沖縄学力研究会、大学授業研究会が、おのおの2～3回開かれ、そこにも参加し問題提起などをした。

また、教科教育法担当教員が中心になった複式学級指導法研究会には、メンバーとして参加し、県内のへき地離島の学校訪問にも参加した。1970年代の沖縄の教育実践現場に深くかかわっていた先生方との研究会で、大変印象深いものだった。長浜克重、新垣博子、比嘉徳政、伊志嶺朝次、田港朝昭、金城松栄、新城和治先生などとご一緒したが、とびぬけて若かった私は、先生方からずいぶん可愛がられた。山原の数校訪問、久高島訪問が印象に残っている。訪問先学校から歓待されただけでなく、当時の沖縄教育を主導的に担っておられた先輩先生方から、沖縄教育事情を教えられることが多かった。これらの学校訪問は初体験だったが、後に「へき地小規模校の集団づくり」を編集するときにおおいに役立った。

複式に不利さをいうだけでなく、多学年の子どもを集めて指導することの有利さを生かすことを強調して、発言執筆

をした。

久高島訪問は、初体験だった。馬天港からとても小さなポンポン船に乗る。天気はいいのだが、途中波の荒い箇所に来ると、おおいに揺れる。私たちのメンバーのお一人も大変苦しまれた。久高につくと、現在よりもはるかに穏やかな印象だ。おかしかったのは、ナンバープレートのない自動車が走っていたことだ。

でも、学校にはなぜか、方言ではなく標準語を使いましょう、というポスターが貼られていた。もっとも、1974～6年南風原に住んでいたころ、回覧板に「家庭でも標準語を使おう」というチラシが配られていたから、当時としては不思議なことではない。

久高から船便の数が限られていたので、所用があった私は、試運転で出る最新の救急船に便乗させてもらい、安座間港についた。

私の所属する教育学科では、年齢を問わず業務を分担しており、私は教育学部紀要委員、名称は忘れたが親睦会担当（スポーツ行事なども含めて）などを担当した。そして、持ち回りに近い業務だったが、琉球大学教授職員会の委員をした。その時は、庶務係に配属されて、比嘉照夫、比嘉政夫先生と一緒にだった。照夫さんは、今はときめくEMのリーダー、政夫さんは、沖縄の民俗学のリーダーになられた方だ。政夫さんと一緒に、文部省に出かけて、教員研究室の窮状を訴え、改善を求めたことが印象に残っている。

もう一つ深くかかわったのは、琉球大学教育学部の移転計画作成だ。（2014年7月22日）

60. 琉球大学教育学部移転作業

教育学部移転計画委員会には、5年ほどの任期を務める。1970年代半ば、現在の千原への移転作業が進行し始めた。まだ工事が始まる前、現地視察に参加したこともある。ススキなどの雑草・雑木が生い茂る広大な敷地に、数軒の民家と茶園か何かがあると聞いた記憶だ。地上からは何も見えないので、近くにあった消防学校（現在地への移転前で、今の埋蔵文化物センターあたりだと記憶している）の物見用の建物に上って、あたりを見た。

文部省が建物基準を細かく作っていた他学部とは異なって、教育学部だけは学生数などに基づく全体面積だけが決められていて、それを講義室や各学科の研究室実験室などにどう配分するかは白紙であった。この委員会で配分案を作成し、教授会にはかる必要があった。法文学部などは、文部省基準通りに短時間で設計に進んだのに比して、教育学部は案作成に数年かける大仕事だった。とくに学科間の対抗意識への対処が難題だった。国立移行以前からすでにある学科と、国立以降後誕生した学科とでは事情が大きく異なっていた。

そうした事情もあり、教育学部移転は、大学全体の中でも遅い方の1982年になったのだ。無論、難題の調整だけでなく、積極的に教育学部の良さを作りだすための作業に委員会は取り組んだ。その中で印象的だったいくつかのことを書いておこう。

1) 他大学調査 いくつかの大学に調査に出かけた。その一つに宮城教育大学があった。官僚設計のものでスタートした事情もあってか、建物を教育研究とくに教育上の必要に合わせて改善する課題に取り組んでおられたが、間仕切りを変えて、学生のためにスペースを大胆につくっておられたのが印象的だった。

このアイデアは、各学科に学生のためにスペースをつくと共に、完成後も新たな活用ができるスペースを用意する

こととして結実した。最近、教育学部の建物を見たが、そうしたスペースのほとんどが、多少手狭ではあるにしても、学生の共同研究室・たまり場として活用されているのが印象的だ。

もう一つの大学では、建物面積配分に、柱間の距離を示すスパンがつくる基礎単位面積を設定し、それを配分するという合理的な発想があり、これは私たちも実際に活用していった。教官研究室が最低基準より多少広めなのは、それが一つの要因だ。

その大学では、教員の研究を学生がかき乱さないようにということで、研究棟と講義棟の距離を大きく離してあった。研究棟にも学生の出入りを少なくする配慮をしていた。この発想は、私たちは「反面教師」として取り入れ、学生の教育と教員の研究活動をできるだけ融合するようにした。

2) 各学科からの強い面積配分要求は、講義室面積縮小へと向かったのだが、逆に、ゼミなどの授業は、各学科のなかで行うようお願いすることになった。そのことで、教員と学生の共同性、教育と研究の統一を促進することともなった。

講義室は、使用効率が悪くかつ安易な大規模授業を促進しかねない100人規模の教室は1つだけにとどめ、他は40～60人規模のものにした。そして、教育学部らしい教室をいくつか作った。展示もできる教室、レッスンができる教室、畳教室などだ。展示教室は、安次富長昭先生の肝いりの教室でもあった。

ついでながら述べると、建物工事進行中、教室の机椅子をどうするか相談が当時の会計係長の新垣さんから私に舞い込んだ。普通の机椅子を入れると、予算の半分しか入らない。カタログを彼と一緒に見ながら、安価ではあるが、教育学部らしいものを探した。固定机は高価であるので、できるだけ避けた。そのなかで、台形の机が、多様な授業形態に対応できるユニークさがあるだけでなく、価格も安いので、一つの教室に導入した。そんな儉約もしたが、それでも予算不足。そこで出てきた迷案？名案？は、先に移転していた首里キャンパスの法文学部教室に残っている机椅子の活用だ。それで、2、3の教室をカバーした。

畳教室は、維持費の問題はあったが、日本の大学に畳教室がないのは不自然だということで、導入になった。

こうした教室がどう活用されるかは、教員たちの「腕前」にかかっていく。授業改革に学部全体で取り組んでいた当時の動向に、期待を託した。(2014年8月22日)

6.1. (続) 琉球大学教育学部移転作業

3) 各学科から出てきた面積要求を合計すると、とんでもないレベルになった。面積を拡大する権限はなく、既定の枠内にするのが委員会の役目だったので、政府予算策定の際に査定をするような役割をとらなくてはならなかった。偶然だが、私の属する学科が要求を出していなかったし、私が一番若かったこともあり、しがらみが少なかったので、私が「査定役」の中の重要な位置を占めることになってしまった。委員会はすべての学科と面談し、要求についての論議をすすめていった。

そうしたやり取りは長期にわたったが、ついに委員会は最終案をつくり、その説明文(1～2万字ほど)を私が書くことになり、深夜までかかった私の作文を委員の方々に検討清書していただいた。ワープロが登場しない時代だ。そして、翌日の教授会で、無事合意され、大きなヤマを越えた。

4) 具体的な設計段階に入ると、建築専門の鈴木先生の大活躍となった。教室建築について多くのことを学んだ。たとえば、学生たちの動き、つまり動線を考えることなどである。階ごとに異なるブラインド、色違いの各部屋のドアなど、鈴木先生のアイデアは多彩だった。

こんな経験をしたので、小中高校における学校建築についても関心をもち、いろいろな本を読んだり、ちょっとした書き物をしたりもした。

1982年、ついに新キャンパスができて、移転した。私が保管するものには、移転委員会で収集作成した資料、科学研究費で収集した戦後沖縄教育資料、また、教育学部の教育方法改善プロジェクトで共同作成した資料など、いろいろなもので溢れていたもので、研究室外のいろいろな場にそうしたものを保管することに相成った。

それでも、学生たちが学習できる共同研究室的なものがいくつかでき、学生たちの学習研究がはずんだ。

食堂がかなり離れたところにできたので、学生たちと群れをなして食べに行った記憶が懐かしい。

余談 現在の教育学部ビル前にある、クワデーサーの木は、首里キャンパスの法文学部前にあったものを移植した。当時の新垣事務長の発案だった。

首里キャンパスの琉球大学の痕跡は無きに等しい。復元された立派な首里城とは対照的でさえある。歴史的に重要な意味をもつと思うのだが。(2014年9月29日)

6.2. 虚脱から猛然への5年余り

1976年12月に長男を亡くした茫然状態から、なにかに取りつかれたように猛然といろいろなことをして5年余りがたち、1982年になると、ようやく落ち着いてきた。翌1983年4月から一年間、在任研究ということで東京での研究生生活を送ることも決まった。

なにかと慌ただしく、そして模索的だったとはいえ、この期間に、その後の展開の出発点に位置する仕事ができたと見えよう。

1. 「大学における講義についての教育方法論的考察(試論)」『琉球大学教育学部紀要第一部』第22集1978年
2. 「教師を創る私の実践」『生活指導』1981～1982年4回連載
3. 「学校文化の創造」『講座日本の学力』第10巻『教科外教育論』日本標準1979年
4. 沖縄生活指導研究会シリーズ
 1. 「行事・文化活動と集団づくり」明治図書1980年
 2. 「へき地・小規模校と集団づくり」明治図書1981年
 3. 「集団づくり実践入門」明治図書1983年
5. 「幼児教育(後期)から小学校低学年までの集団づくりの位置と課題」『生活指導』1981年
6. 「沖縄の教育実践の課題」『新沖縄文学』46号1980年
7. 『沖縄教育の反省と提案』明治図書1983年(実際には1982年秋に刊行)

1は、私の大学教育論のスタート宣言のような位置にある。2は、私の教育実践記録といったものだ。

3は生活指導関係論文のなかで、初めてオリジナルなものを出せたというもので、その後の文化活動論展開のベースになったものだ。4は、沖縄生活指導研究会のメンバーとともにつくったもので、私が編集した。その後にする何十冊かになる書籍編集の出発点になるものだ。5は、生活指導を発達とかかわらせて追求した1980年代の仕事の出発点になるものだ。

6は、あちこちに書き散らし始めた沖縄教育論を、かなり本格的に論じたものとなった。それらをベースにして、初めての単著となったのが7だ。

このほかに、沖縄教育史の仕事も少しずつ並行させていた。

いずれも、走り回りながら書いたという感じだ。行動のあとに理論作業を付け加えたとも言えよう。これらの理論作業をもとに、その後の20～30年の理論作業が展開したといえよう。

この時期の「走り回り」は、結構忙しかった。大学では、週3コマ授業以上に、たくさんの会議があった。先に紹介した 琉球大学教育学部の教育方法改善プロジェクト（3年間）の総括幹事を務め、移転委員会委員に加えて、教務委員など、年齢の割には重要な仕事を担当し、全国の教育大学協会の会議などにも繰り返し出席していた。沖縄県内の小中学校など実践現場に出かけることも多く、県内の2～3割の学校を訪問した感じだ。

さらに、1980年ごろからは、全生研関係も含め、年に10回近く他府県に出かける仕事をし始めた。東京日帰り出張が始まったのも、この時期だ。

忙しくはあったが、結構遊びもした。時間があれば、家族を連れて、あちこちに出かけた。新原ビーチにしばしばでかけたのもこの時期だ。同僚たちとスポーツなどのレクもよくし、全沖縄教職員卓球大会の常連にもなっていた。

そして、1978年には3番目の子どもが生まれ、共稼ぎとして、子育てにも忙しい時期を迎えた。幸いなことに、当時は私の勤務先の琉球大学と恵美子の勤務先の沖縄キリスト教短大とが首里の隣同士だったので、子どもの保育園送迎と出勤を一緒にすることも多かった。もっとも、そのころの私は、原動機付自転車に乗ることが多かった。（2014年10月17日）

IV 東京での研究生生活

63. 11年ぶりの東京生活 研修生活

1983年5月からの10カ月、在任研修として東京での研究生生活を送った。沖縄での11年間の眼が回るほどの変化に富んだ生活を振り返りつつ、じっくりとした研究生生活を送るには絶好の機会だった。すでに37歳で中年期を迎えるところになっていた。

通常、文系の非実験系は半年研修だが、特別に10カ月が認められた。有り難いことだった。友人の紹介で、埼玉県富士見市の住宅を借りた。1971年に恵美子との生活を始めたのは、埼玉県朝霞市だったが、同じ東武東上線で、2駅か3駅先の志木駅からバスで10分余りのところだった。その前の大学院時代も、同じ東上線の大山駅に住んでいたし、恵美子も学生時代に寮生活を送ったのは、大山だった。そんなことで馴染みを感じるどころだった。

郊外住宅地といった感じで、近くの新河岸川、そして浦和所沢街道を使って、埼玉大学をはじめ浦和などにも行きやすいところだった。お借りした住宅は立派な庭付き木造住宅で凝ったものだった。武蔵野の風情を残すところだった。ということで、近隣を楽しく散策したりもした。そして、東上線を使って、あるいは車で秩父などの丘陵地帯に遊びにも出かけた。

ということで、身体と頭のリフレッシュが進んだ。

とはいっても、研究で出かけるのは、ほとんどが東京都内で、東上線で通えるところだった。

恵美子も、同時に研修機会を与えられ、家族全員での生活だった。子どもたちも楽しく生活した。生活開始最初の日、5歳の娘は、自分で遊び友達をすぐにつくるのは難しそうだったので、私が一緒に歩いて近所の子どもたちに声をかけて、友達になってくれるように頼んだ。すると、上の小学校2年生の息子も、「僕も」と言い出して、同じことをした。かれらを色んな所に連れていった。

かれらの小学校転校、保育園入園も無事すすみ、地域での生活を始められた。娘を自転車に乗せて、保育園まで川沿いの道を連れていった楽しい記憶が残っている。

でも、沖縄の気候に慣れ切った私たちは、冬になると、寒くてたまらない状態が続いた記憶が残っている。

地域の卓球クラブに入って卓球していた私だが、市の大会の35歳以上の部で準優勝し、選ばれて埼玉大会に出たが、寒さでどうしようもなかった。

研修先は、東京大学だったが、自己研究が中心で、全生研を中心とする研究会に出て、共同研究することが大半であった。都内の研究会だけでなく、全国各地の研究会にでた。週に2～3回は出かけていたと思う。それが無い日は、書齋型の研究を送った。

そんなころ、恵美子がワープロを買ってきた。定価70万円が40数万円で販売していたので、買ったということだった。富士通のオアシスだった。ワープロが出回り始めたころだった。大胆なことをするのは、恵美子の役回りだった。

悪筆で、出版社泣かせの私には、とってもいい。購入した一週間は、ブラインドタッチができるまでの学習訓練を繰り返した。そして、ついにワープロ生活に入った。恵美子と奪う合いになることも多かった。

そんなオアシスをその後、20年ほど使い続けたが、10年ほどはワープロ専用機中心だったが、やがてパソコンで

の使用となった。パソコン話は、いつか書くことになろうが、この時が、そのスタートだった。
こうして充実した研究専念生活が始まる。(2016年9月3日)

余談9. 研究会と学会

研究者になっていくためには、大学院の授業などをこなしていくだけでは進まない。文系の場合、論文を書くことは必須条件だ。そのためには、研究対象となるフィールドをもち、研究討論する場をもつ必要がある。

それらのために、生活指導研究の先導者である竹内さんに、全国生活指導研究協議会(略称全生研)のサークルなどの研究会の紹介をお願いした。すると、すぐに全生研常任委員になるようにいわれた。ほかからも声かけがあった。

竹内さんの回顧風の文を読むと、かれも宮坂さんから、同様にして声かけがあり、全生研常任委員になったようだ。

それは、1971年の夏だった。出かけてみると、すごく中身の濃い実践的討論が高速ですすんでいた。わからない言葉も続出。そして、8月はじめに開かれる大会分科会の担当委員もしなさいという話になった。そこで、見本刷りでできたばかりの「学級集団づくり入門第二版」を何度も読んだ。何万部も売れた本の最初の一冊だ。まだのりも乾いていない状態で繰返し読んだので、ぼろぼろになり、2冊目を購入したほどだった。

3泊4日の大会が終わるころには、食事が進まないほど疲れ、体重が3キロぐらい痩せていた。とにかく、鍛えられた。現場教師の実践上必要とされる問題提起にこたえていかなくてならないのだから。

こうして、現場実践に応える研究を進めるという、その後の中心スタイルはきまった。

研究者にとって不可欠である学会との付き合いは、同じころ加入した日本教育学会からはじまった。70年代末には日本教育方法学会、日本教育史学会にも加入していた。学会参加しても、じつはそれほどの充実感を得られなかったのが率直なところだった。せっかく参加するのだから、それではもったいないというので、1970年代に2回か3回、自由研究発表をしてみた。しかし、10～15分発表、5分質疑というもので、質疑で得られるものは少なかった。

ということで、学会参加回数は年に一回あるかなしかだった。80年代に入って、誘われて参加した日本教育史研究会はおもしろかった。かなり突っ込んだ論議がおこなわれていたからだ。

そして、1983年の日本生活指導創設へのかかわりという新たなステージにすすむ。(2010年2月7日)

64. 研究生活

1983年の東京・埼玉での研究生活は、まずは全国生活指導研究協議会(略称全生研)とのかかわりで進めること

が多かった。

沖縄生活開始前年の1971年8月に私は全生研常任委員になっていたが、1年もたたないうちに沖縄移住したために、常任委員としての仕事はほんの少ししかできなかった。沖縄在住生活以降は、指名全国委員とポスト名を改め、年数回の研究会などへの参加に限られるようになった。大学予算から出る研究費では年一回の学会出張をまかなえるほどであり、研究会参加費は、全生研からの補助と自弁であった。航空券は現在のように多様な割引運賃を使うことが当たり前ではなく、定価搭乗が通常であり、費用上の困難が大きかった時代である。

その状況が変わって、研究会などが頻繁に開かれる東京周辺に居を構えたので、可能な限り会に参加した。その意味では、期間限定の「常任委員」的な仕事をした。機関誌『生活指導』の編集委員会にも顔を出し、さらに翌1984年の全生研大会での基調提案の執筆担当にもなり、それが1983年末からの研究生活の軸の作業ともなった。

さらに加えて全国各地の研究会に赴くこともしばしばだった。

1970年代末から80年代前半の全生研は、子どもの発達にからむ指導を明らかにすることを中心課題の一つにしていたので、私の研究もそれに深くかかわった。

全生研では夏の全国大会が中心的な研究の場であったが、当時の私は、小学校低学年、幼児教育、障害児教育の分科会を担当したこともあって、年少の子どもへの指導を明らかにすることが当時の研究課題の中心になっていた。

その分科会では、城丸章夫先生と一緒に担当することが多かったので、彼から学ぶことが多かった。無論、それまで深く世話していただいた竹内常一先生からも多くのことを学んだ。と同時に、自分なりのものを作りはじめたのも、そのころのことだ。

また、全国障害者問題研究会を主導していた田中昌人さんの発達理論からもおおいに学んだ。当時、ピアジェ・ワロン・ヴィゴツキーといった海外での発達理論を参照しつつ、日本の現実の中で、実践創造に寄与する理論を作り上げていく作業が広く展開していた。それらのなかで、田中理論は図抜けた問題提起をしていた。それを生活指導実践のなかで展開するとどうなるかという課題意識をも持って研究していた。

その際、発達の視点からの提起というのではなく、発達を参照しながらも、教育・生活指導という視点から考えると、どうなるかということに集中させていた。そこで、発達課題という用語ではなく、教育課題という用語で考えることを重視し、それが『生活指導の教育内容』という言葉につながっていった。また、全生研1984年大会基調提案にも、そうした研究活動を反映させていく。

こうしてこともあって、1980年代前半に書いた論文・著書の多くは、子どもの発達にかかわる指導をめぐるものだった。それらの研究活動を集約するものとして、『子どもの発達と生活指導の教育内容論』（1985年明治図書）を出版したのだが、それと並行して、全生研常任委員会編『障害児の集団づくり』（1984年明治図書）をつくる共同作業にもかかわった。また、村越邦夫・中内敏夫・浅野誠・根元橋夫・平林弘編『教科外教育と教育評価』（1984年日本標準）、浅野誠・神保映・浅野恵美子編『小学生の問題行動』（日本標準1984年）の編集執筆活動にかかわったことも大きなことだった。

刊行は遅れるが、浅野誠・大畑佳司編『講座小学生問題全5巻』（明治図書1987年）の編集執筆作業をしたのもこの時期だ。（2016年9月12日）

余談10. 「若手道場」的研究討論への渴望

大学院時代には、院生同士での研究討論会をしばしばもった。

それに先だって、学部時代にも、学生相互の学びあい、研究討論は大変な刺激だった。学科学生の共同研究のような形で、岐阜県恵那の現地調査活動があった。それを大田堯さんがサポートしていた。そんなこともあって、私の卒業論文は、恵那の地域変貌と生活綴方教育になった。

こうした共同研究の雰囲気は、学生企画の授業としても実現し、竹内常一さんを講師とした生活指導のゼミが単位化された。

私の学部生院生時代では、こうした同輩による研究刺激、私流に言う『研究道場』が大きな位置を占めた。

大学教員になって以降、こうした場がなかなかえられなかった。前に書いたように、学会ではそういう感じにはなれなかった。唯一日本教育史研究会がそうした性格をもっていた。

1983年、私は、国内研究で東京に1年間滞在する。その折、春田正治さんから、生活指導研究者育成の組織をもちたいが、という「お手紙」をいただいた。私の頭には、『研究道場』的なものができればな、と思っていた。

この組織をつくる話はどんどん発展していき、ついに年末には日本生活指導学会設立に至る。この話は次の機会にしよう。(2010年2月11日)

65. 日本生活指導学会創設準備1

1983年12月に発足する日本生活指導学会の創設に至る過程での私のかかわりを書く前に、それ以前の私の諸学会とのかかわり体験を書こう。

沖縄から各地の学会に出席となると、交通費の都合もあって、10年間で合計しても3～4回しか参加していなかった。どうせ参加するなら研究発表もしようと、自由研究発表を1～2回はした。しかし、10～15分発表5分質疑討論という時間設定が普通で、出される質問の大半は、発表内容の中心とかわらず、私には、有益さを感じないものだった。そのため、学会参加の意欲がそがれていった。

余談になるが、そんな経験もあって、80年代半ば以降いろいろな関係で出席しなくてはならない学会では、自由研究発表の分科会に出て、可能な限り突っ込んだ質問をしてきた。それが発表者には厳しかったようで、ある時は、博士論文の指導教員が代わりに返答なされたこともあった。

元に戻って、80年代初めに一風変わった研究会に出会った。日本教育史研究会だ。自由研究発表を例にしていうと、長時間の発表と討論の枠を作り、コメンテーターを置いて、かなり突っ込んだ研究討論をするというものだ。

そんなことに刺激示唆を受けて、生活指導の研究会も、「若手の研究道場」的なものにしたいと思うようになったのは、一年間の研修に出る前後だった。

それを具体化するものとして、全生研大会に合わせて開かれる研究者集会をイメージしていた。生活指導研究をする若手を中心とする研究者が10名内外集まって討論するもので、これを充実発展させようという提案を何度か行い、少しずつ確かなものになりつつあった。全生研大会以外の時も継続的に取り組むように提案したりした。それは、90年代に入って、メンバーの共同で、共同研究グループ編『ゼミナール生活指導を変える』青木書店1994年の制作出版

に至る。

こんな個人的前史をもって、若手の研究グループを発展させたいと思っていた時、当時の全生研代表でもあった春田正治さんから手紙をいただき、お会いしてお話するなかで、研究者組織をつくることへの提案と要請を受けた。

春田さんの提案を受けて、城丸さんや竹内さんらの意見も聞きながら進めていった。まずは数人で会合をもったのは、5～6月のころだったろう。前向きに検討をすすめようということになり、準備事務局を構成した。春田、城丸、竹内、折出、川口、近藤、藤本、赤羽といった方々だった。

当初は、学会結成とは決めていなかった。確か、城丸さんから「学会」にしよう、という提案があったと記憶しているが、当初段階では学会にするとは決めずに、参加希望者が一定数を越えたら学会にするという考えで向かうことになった。

夏からは本格的な取り組みとなり、呼びかけ文案をつくり、呼びかけ人を集める。呼び掛け文に基づいて、入会の誘いを発送し、申し込みを受け付ける。第一回研究会<大会>の持ち方、紀要の設定などと準備が進められていく。準備委員会の事務局（連絡先）を埼玉の我が家に置き、私が事務局長を務めることとなった。買ったばかりのワープロが大活躍した。（2016年9月27日）

6.6. 日本生活指導学会創設準備2

学会結成の呼びかけ人の依頼には、城丸さんや竹内さんなどが大活躍だった。城丸さんは、学際的なものにしよう、と、教育分野以外の方々に声をかけられた。看護分野をはじめとするいくつかの分野は城丸さんのご尽力がかかわっているものだ。

教育学分野にあっても、多様な研究組織に関わっておられる人々に声がかけられた。そのころの私にとっては、名前だけは存じ上げるが、顔を知らない方々の続出だった。文部省関係の委員を務められておられる方も何人もおられた。生活指導という用語ではなく生徒指導という用語で研究される方もおられた。他学会とのからみもあって、消極的になりがちな人も、城丸さんなどはどんどん説得していく。

こうして、学際的学会というイメージが強まっていった。私は「研究道場」的性格が色濃くなるように主張していった。結果的に、この二つが生活指導学会の特徴として長く引き継がれていった。

こうして作成された「日本生活指導学会設立趣意」を紹介しておこう

日本生活指導学会設立趣意

校内暴力や家庭内暴力に象徴される子どもと教育をめぐる問題状況は、生活指導に対する国民的期待と関心とをかつてないほどに集めています。これに対して、生活指導研究は少なからぬ蓄積を持っているとはいえ、現代の教育的諸問題に答えるには、まだまだ不十分であります。そして、私たちは、この不十分さに深くかかわることとして、研究者の少ないことと、研究交流体制の不備とを指摘せざるをえません。生活指導学会を設立しようとする趣意は、この不十分さの克服に私たちなりの努力をしようではないかということにあります。

もともと、生活指導研究は、多方面の多様な学問成果を吸収集約して進めなければならないという特質を強く持っています。従って、予定されている生活指導学会は、教育学関係者相互の交流だけではなく、各方面の研究者との交流が

意図的に追求できるように工夫されねばなりません。また、従来の学会が形式的な発表会に終わりがちで、学問の発展と交流にとって十分な状況にあるとはいいきれず、しばしば若い研究者の不満の声を聞くことがあります。予定されている生活指導学会は、じっくりと討論や話し合いを進める集会を行うとともに、会員による自発的な研究会の開催を、奨励するものとなるべきだと考えます。

生活指導研究に関心を持つ研究者の皆さんに、広く学会への参加を呼びかけるものです。

1983年10月1日

発起人（五十音順）

赤羽 忠之	秋葉 英則	浅野 誠	飯田 芳郎	池田 貞雄	石川 正和
岩垣 撰	稲越 孝雄	稲村 博	碓井 岑夫	宇田川 宏	遠藤芳信
小田切 正	大槻 健	折出 健二	片岡 彰	川合 章	川上 信夫
川口 幸宏	木原孝博	工藤 綏夫	佐藤 正夫	斎藤 浩志	坂元 忠芳
穴戸 健夫	柴田 義松	白井 慎	城丸 章夫(代表)	杉山 明男	高浜 介二
高垣忠一郎	竹内常一	十枝 修	中内 敏夫	中野 光	根本橋夫
野呂 正	春田 正治(代表)	深谷 鋼作	藤田 昌士	正木 健雄	見藤 隆子
宮川 知彰	村山 士郎	森川貞夫	横山 明	吉本 均	

このように多様な分野の発起人が集まる中で、学会にしようかどうかという議論は吹き飛び、異論なく学会設立に向けて進んでいった。（2016年10月7日）

67. 日本生活指導学会創設準備3

前回掲載した「趣意」書と一緒に入会申込書が配布され、私は申し込み受付対応にも追われた。「日本生活指導学会之印」を近くのはんこ屋さんで作り、銀行口座を設け、そこに入会金を振り込んでいただいた。

結成総会の際に配布した資料に掲載した入会申込者名簿は、次のような構成だった。

教育方法系統64 教育社会学7 社会教育6 幼児教育5 その他教育学19

心理学21 哲学倫理学2 司法福祉6 看護医学12 保健体育8

所属機関

大学109 研究機関等12 幼小中高校15 大学院13 退職者2

ここでの申込者合計は、150名余りだが、大会当日には180名を越し、そのうち300名を超すまでに至る。私などの想定外の状況だった。

こうして、12月25日の結成総会に至るまで、準備会はくりかえし会議をもって多様な準備活動を進めた。その一つは、学会体制に必要な会則などの案と役員案の作成だった。学際的学会になるということで、代表理事を3名おくこととし、スタート時点では、発起人代表の城丸章夫、春田正治さんに加えて、看護学の見藤隆子さんに御願いすることになった。次期選出からは、三人は、三分野の人々から選ぶようになり、それが現在まで続いている。

また、研究紀要発刊は、学会の中心的業務の一つだったが、出版社の明治図書が研究紀要の出版を引き受けてくださり、大助かりだった。それは、発足当時の財政事情のゆとりも作り出した。しかし、90年代に入ると、学会の研究紀要刊行は採算的に厳しいこともあって、明治図書が手を引かれ、その後もいくつかの出版社を経て、近年、学会自身が出版する形に落ち着いた。

紀要編集には編集委員会が当たるが、初代編集長は藤田昌土さんが引き受けてくださった。

参考のために、結成総会で選出された理事は以下の通りである。

赤羽忠之（東京家庭裁判所 教育学・司法福祉論） 浅野誠（琉球大学 生活指導）

石川正和（広島女子大学 訓育論・幼児教育） 折出健二（愛知教育大学 教育方法学）

川口幸宏（埼玉大学 教育方法学） 白井慎（法政大学 教育方法学）

城丸章夫（前橋育英短大 生活指導） 竹内常一（国学院大学 生活指導・中等教育）

根本橋夫（千葉大学 学級集団心理学） 春田正治（和光大学 教育原理）

藤田昌土（国立教育研究所 教育内容・方去） 見藤隆子（千葉大学 看護教育学）

横山明（愛知県立大学 発達心理学）

会計監査は、鶴沢陽子（千葉大学 看護継続教育） 坂西友秀（埼玉大学 社会心理・教育心理）の両氏が就任した。

そして第一回大会のプログラム作成をはじめとする繁忙の日々が続いた。

第一回大会の企画を紹介しておこう。

シンポジウム 現代における生活指導研究の課題

分科会1 地域社会と生活指導

2 生活指導史研究——生活綴方の再評価をめぐって

3 授業と生活指導

結成総会を含む第一回大会は、埼玉県浦和市の別所沼会館と武蔵野会館で開催された。大学の教室で開くと既存の学会イメージにとらわれやすくなりがちだ。そして、参加者相互の交流を豊かにしつつ、ゆとりを感じ取れるような会場にしようと話し合われた。その結果、研究会場と合わせて、懇親会と宿泊希望者の宿泊可能ということで、共済組合の施設を借りることになった。こうしたありようは、10年以上続いたが、そのうち、大学の教室での開催に移っていた。（2016年10月18日）

68. 日本生活指導学会をはじめとする学会とのつきあい

発足後の学会事務局長としての業務が、その後数年間の私の仕事のなかで大きな位置を占めていく。

東京や大都市に学会事務局があるのが通例だった当時であって、琉球大学に事務局が置かれた全国学会は、当時としては例外的存在だった。藤原幸男さん（琉球大学）、杉山緑さん（沖縄国際大学）は事務局として活躍してくださった。また、何人もの学生アルバイトにもお手伝いいただいた。

その後10年余りたち、私が琉球大学を離れた後、琉球大学に赴任した照本さんが学会事務局長をつとめた時期、再び琉球大学に事務局が置かれたが、偶然とはいえ、何かの因縁だろうか。

学会発足の翌1984年には第二回大会が開かれ、投票による役員体制が確立した。これ以降、毎年夏に大会が開かれてきた。第三回大会では、私が発題講演として「今日における生活指導研究をめぐって」を行い、それを受けて、参加者を三つの分散会に分けて小人数の濃密な論議で深めた。私のような若手が発題をして参加者で検討し合うというあり方は、「研究道場」としての学会という趣旨を生かすもので、その後しばらく継続した。

生活指導学会は、広く学术界でも認知されていく。たとえば、学術会議会員が学会による選挙で選出されるようになったが、その選挙に生活指導学会も参加した。その会には私が出席した。

準備会をあわせてほぼ5年間務めた事務局長を、1988年夏に折出健二さんにバトンタッチした。

理事はその後もほぼ20年務めたが、多選を避ける規定ができて、第一号の該当者として、2004年に退任した。2007年再び選出され、代表理事にもなったが、6年務めた後、2013年によりやくすべてを終えた。

学会が好きになれなかった私にとって、生活指導学会が学会というものに本格的につきあう初めてのこととなった。そのころから、他の学会にもそれなりに付き合うようになった。そして、なぜか依頼論文とか、シンポジウムなどの問題提起者・パネリストを務めることが多くなった。それは、2000年代初めまで続いた。その後は、たまに要請される程度となった。

他に会員になった学会をあげると、日本教育学会、日本教育方法学会、教育史学会がある。日本教育方法学会はなぜか理事にもさせられ、2007年頃まで付き合い合った。加入学会数が増えると、付き合いも大変なので、教育史学会は短期間で退会した。90年代半ばには大学教育学会にも入り、理事にもさせられたが、一度も理事会に出席しないまま、10年近くたち、申し訳ないまま退会に至った。日本教育学会は、ほぼ30年会員だったが、2000年代前半に退会した。

こうして、2000年代後半以降、会員である学会は、生活指導学会だけとなった。

このように生活指導学会結成にかかわったことが、一年間の首都圏生活の特記事項となった。(2016年10月29日)

69. 首都圏生活でのトピック

1983年5月～84年2月の研究活動を中心とする私達の首都圏生活での、他のいくつかのトピックを書こう。

1) とっぷり浸かった11年間の沖縄生活を振り返る機会となる。

沖縄とは異なる季節変化を感じる。愛知・東京近辺に25歳までいたが、11年間の沖縄生活を経ると、浦島太郎のような気持ちになる。とくに自然の変化は強い印象を与えた。そこで、しばしば秩父などの丘陵・山岳地域へ家族ドライブをする。

正月元日もドライブしたが、秩父への峠の茶屋で、美味しい素朴な地元料理をいただく。はまった私は、翌年から今日にいたるまで30年余り、そこから学んだ私流の正月料理をつくってきた。沖縄でいうと、煮付け料理の類だ。コンブ・鶏肉・里芋・大根・人参・蒟蒻・・・を長時間煮込むものだ。

埼玉の積雪量はそれほどではないので、知人訪問を兼ねて、会津に雪を見に行く。ところが、2月になると、埼玉でも大雪となった。

夏には、自動車で私の実家がある岐阜との往復をし、東名高速と中央高速を使って、途中にある自然のなかにいくつか立ち寄った。

2) 居住地近くにある全生研サークルの教員たちとつきあう。かれらが主催するひまわり学校で、校長役を務める。息子も連れていった。富士五湖の一つ精進湖のほとりだ。

全体をまとめるというよりは、フリー指導者として、教員や子どもたちと関わった。沖縄での子ども学校と同じやり方だ。

一つエピソード。ある時、一人の子どもがどこに行ったか分からなくなることがあった。若い教師は緊張しすぎたので、私が指示を出して、分担して探した。まもなく見つかったが、その子どもは、私が宿舎に戻ったことを知らずに、私を追いかけて歩いたという。子どもと親しくなると、こんなことも起きる。

我が息子は、ハイキング途中で、ミヤマクワガタを見つけて、大喜びだった。

3) 節目の夫婦大ケンカ

まさに異質な夫婦だったので、ケンカが絶えなかった。ケンカすると数日続き、私は鬱気分になったりした。埼玉生活のなかのある時、派手な口喧嘩をする。びっくりした子どもたちが、心配して入り込んできた。しかし、この喧嘩で、お互いに言いたいことを言い合った感じになり、その後の喧嘩は陽性なものになっていった。それまでは、片方が怒り、片方が黙り込む陰性なもので、内にこもりがちだったが、それとは異なるものだった。

その時が夫婦ケンカのピークだったろう。それ以降、ゆっくりと減り始め、30年ほどたつと、減多にしなくなった。

4) 住んだ家は、風流な方が建てたものらしい。だが、和風の上品な建物は寒い。屋外も暗く、鬱気分を増す。家族みんなが沖縄に帰りたくなる。

5) この期間、沖縄の小波津団地の我が家は、とてもしっかりした学生兄妹に住んで管理してもらった。

6) 前にも触れたが、執筆活動も旺盛であり、充実に充実を重ねた感じの一年間だった。そして、研修が終了し、3月には沖縄生活に戻った。(2016年11月8日)

V 80年代後半の生活 集団づくりの新しい展開

70. 講演などでの沖縄の地域とのかかわり

70年代から80年代にかけての、沖縄の地域とのかかわりについて書こう。当時までの私の専門分野は、学校における生活指導であった。といっても、教育学分野を専攻することを決めるころから、地域における教育、社会教育には関心をもっていた。卒論は、岐阜県恵那地域の教育を対象とし、高度経済成長期における山村の変貌とそれに伴う教育環境の変化と教育実践上の挑戦を対象にしてきたこともある。

ということで、自分自身が居住地域にかかわることに比較的積極的だったと思うが、それは後述することにする。ここでは、沖縄内の多様な地域・組織から依頼を受けて行ったことを中心に綴ろう。

その一つは、各地のPTAなどでの講演会の依頼に応じたことだ。依頼は、70年代からポツポツとあったが、80年代に入ると激増し、月一回のペースになり、断らなくてはならないこともしばしばになった。回数が多かったこともあり、記憶によく残っているのは、PTAの家庭教育学級だった。子育てに関わる話をよくした。当時、学校での成功を願うことを中心にする方向に、子育てがシフトする時代だった。

家庭をオープンにし、家族間の協同、地域での取り組みの重要性、また子どもの仕事や家族間のコミュニケーションの重要性を語った。たとえば、近所の子どもたちが出入りするような家、隣地との境界に高い塀をつくらず、近所が見える、近所から見えるような家にする、といったことを楽しく語った。

そうした講演に並行して、学校以外の子どもに関わる諸機関での仕事も増え始めたのは、80年代に入ってからだ。

その一つは、那覇青少年健全育成計画作成委員会のメンバーになり、多様な関係者との議論も意義深いものになったが、残念なことに、首都圏での研修のために、途中で委員を下りた。

また、80年代初めにできた学童保育連絡協議会の第一回目の講演をした。それ以降、学童保育とは長い付き合いとなる。同じころ、各地の自治体が作り始めた児童館にかかわって、講演か何かをしたと思うが、記憶がはっきりしない。

さらに、児童相談所から、ケースへの対応について相談を受けた記憶もある。そして、児童相談所が主催する会で講演もした。80年代半ばころのように記憶している。

また、恵美子たちが活躍していた沖縄保育問題研究会の研究集会で、実践記録の書き方ワークショップをした。それは、1987年出版の「保育幼児教育体系」第一巻に「保育実践と子どものとらえ方」という論稿を書いたこととつながっている。そのころは、幼児教育や障害児教育にもしばしば顔を出していた。障害児学校や研究会にもよく顔を出していた。東京の青鳥養護学校寄宿舎などに丸一日滞在して、子どもたちと職員とが作りだす世界にかかわったこともある。

こんな動きのなかで、那覇市の福祉担当部局の方々とのつながりが生まれ、国から下りてきたが「鍵っ子」対策名目の予算の使い方相談があった。それをきっかけにして、80年代半ば、都市の子どもたちの遊びを中心にした活動を保障するとともに、そこに、学生をかかわらせて、学生に子どもとの付き合い方を学ばせるという一石二鳥のことを始めた。

こうして、沖縄でも、地域における多様な子どもにかかわる実践が生まれ広がり始めた。琉球大学教育学部で、そう

した地域教育実践関係者を集めて、交流研究集会を開いたのは、1986年だった。その場で、「今日の沖縄における子ども集団の状況と指導の課題」と題した問題提起をした。そんなころ、琉球大学教育学部に社会教育担当者として、松田武雄さんが赴任してきて、大きな力になった。(2016年11月19日)

71. マスコミとのつきあい

1980年代前半は、子育てをめぐる時代変化にさしかかり、子どもをめぐる、学力、非行などの教育問題への社会的関心が高くなっていった。新聞も頻繁に取り上げたが、琉球新報と沖縄タイムス社の記者が、しばしば私の所に訪れるようになる。とくに、非行問題など社会面の記事へのコメントを求められるのだった。

協力的に対応していたためか、記者が、用件がなくても「何か記事になるものないですか」と尋ねてくるほどだった。比較的若い記者が多かった。

そうするうちに、私の対応もうまくなっていく。最初のうちは、話したことが適確な記事にならないことが多くて、いらついたこともあった。そこで、依頼の電話があると、必要な情報をいただくと同時に、記事の趣旨や字数を聴き、1～2時間のうちに下書き原稿を作り渡した。そうすると、私の言いたいことに近い記事が掲載されるようになった。

マスコミとの付き合いで思い出すのは、70年代末の大浜方栄教育委員長の「学力問題の最大の責任者は教師だ」という発言も契機に、学力問題の議論が沸騰した時に、琉球放送テレビが、2時間程の生放送の討論番組を組んだことだ。企画段階から相談に乗り、コーディネイター役のようなことを務めるとともに、当日は司会進行役をした。

高い関心を読んだようで、視聴者の声を募集したところ、放送局にはひっきりなしの電話があり、そのメモが、司会をしている私の机の上に大量に積み上げられた。それらを読み紹介する作業と、司会進行の仕事が重なって、大わらわだった。討論は、政治キャンペーンに使われるような単純なものではなく、深く長い構造的な課題と、教師・保護者などの大人、そして子どもたちの日常的な取り組みにかかわる真剣なものとなった。2時間もあっという間に過ぎ、時間不足を感じるものだった。

すごく働いたが、放送局の財政は厳しいらしく、謝金ゼロで、「沖縄の民俗」という分厚い本一冊が謝礼だった。

学校にかかわることでは、体罰問題が大きな話題になり、沖縄人権協会がいくつかの企画を組み、それにかかわった。それらも、新聞記事(多分連載だったか)になり、社会的関心を呼んだ。琉球大学教育学部での私の前任にあたる安里彦紀さん、弁護士の金城睦さんらと出会うのもその機会だった。

書き忘れていたが、1970年代前半、『沖縄思潮』という地元誌が創刊され、私も、その2号(1973年)に『民主教育の探求と集団づくり』という論稿を書いた。その折編集長だった大城立裕さんと面識ができた。また、いまでは、近所にお住まいであることもあって、しばしばお会いする嶋津与志(大城将保)さんにはじめてお会いしたのも、その折だった。

こんな具合に、多くの沖縄の名士と、そういう方とは知らずにお会いする機会がたびたびあった。(2016年12月2日)

72. 子育て

首都圏生活を終えて沖縄に戻ったころの我が家近辺のことを書こう。84年には息子は小3、娘は幼稚園生だった。西原小学校と西原幼稚園だ。双方とも、徒歩通学だった。大人の足でも30分かかるところを、子どもたちは歩きとおした。近所の子どもたちもそうだった。今は、西原町の新しい役所や図書館などが並ぶところだが、当時の通学路の半分くらいはサトウキビ畑だった。

途中に今は中央公民館となっている図書館があり、娘はそこに入り浸った。そのため、2時過ぎに終わったはずの学校だが、帰宅は6時近くになることも多かった。息子は、あちこち飛び回っていた。だから、家に落ちつくのはやはり6時ごろだった。「鍵っ子」という訳ではなかったのだ。ある時、家に誰もいず、玄関に鍵がかかっていたので、息子は倉庫の屋根からから2階にあがって、室内に入ったこともあった。

近所には大人がいたし、私もそのころ研究業務を自宅でするようになったので、比較的自宅にいた。そんな具合で、学童クラブが不可欠な状況にはなかった。まさに、地域子ども集団が存在していたのだ。新興団地の道路には、子どもたちが飛び回っていた。飼い犬も、鎖につながれず、歩き回っていた。子どもが低学年の時、親の私たちが二人とも都合がつかない時は、近所の人が預かってくれたこともあった。

ある時、自宅倉庫にダンボールに入った砲弾類を見つけた。息子たちが、近所のガマから砲弾の残骸を拾ってきたのだ。確かめたら危険な状態ではなかった。巡回してきた古鉄くず回収の人に、私がこっそりと引き取ってもらった。そのあたりは、沖縄戦の激戦地だったのだ。まさに、わんぱく子ども集団が健全に生きていたころだ。

そんなころ、自宅を増築した。子どもが大きくなるし、本が置いて研究業務ができる部屋が必要になった。それまでの20坪ほどの家では手狭になった。

親しかった小田切忠人さんが、セキスイハイムで建てた経験があるので、増築業者も、小田切さんの紹介で依頼した。小田切さんは、強い関心があるのか親切心か、工場まで出かけて製作過程を見てくれたし、現場でセットするときにも、私が都合で出来なかった立ち合いをしてくれた。まさに小田切さんの応援がなければできなかった増築だった。

たくさん子ども達が集まって遊べる部屋と私の書庫兼研究室を作るのが目的だったので、箱型の部屋だけを二つセットする工事だった。例外は一つで、本棚の材質だけはヒバ材でしてほしいと注文した。しかし、実際にはラワンで作られ始めたので、異議申し立てをした。でも、工事開始していたので、価格割引だけで我慢した。

増築後は、予想通り近隣の子どもたちが集まる遊び場となった。娘のクラス有志合宿をしたこともある。その時、担任教師も参加した。

一つのエピソード。トイレに入って、かけた内鍵を開けられず、泣きじゃくっていた4、5歳の子どもがでた。私が外から、落ち着かせて、鍵の開け方を教え、無事出てきた。今は、立派な仕事をなさっており、再会した時の楽しい思い出話になった。

一つだけ苦い思い出がある。私が作った夕食のカレーライスが、室外に捨ててあるのを発見。息子だった。思わず、平手打ちをして、家から締め出した。これが、子どもをたたいた唯一の苦い出来事だった。多分、相当に不味いカレーだったのだろう。子どもが小さい時に、ゴーヤを強制的に食べさせたことがあり、それ以来、息子は今でもゴーヤ嫌いだ。若くて未熟な父親だったのだ。(2016年12月11日)

73. 学生が集う我が家 親戚付き合い

我が家に集うのは、子どもたちだけでなく、私の琉球大学の学生、恵美子のキリスト教短大保育科の学生もそうだった。さらには、学校教師や保育者たちもよく集まった。我が家で研究会などをしたからだ。

だから、我が家はいつも賑わっていた。

ある朝、起きると、恵美子の学生が10名ほど泊まっていて、びっくりしたたこともある。二人とも忙しすぎるときに、学生に週に一回ぐらい家事を手伝ってもらったこともあったと記憶している。

正月に、近づく締め切り前に、卒論の最後の追い込みをする学生たちとともに、近くの運玉森登山をすることもあった。我が子も連れて行った記憶だ。1時間足らずで登れて、素晴らしい景観を眺められるところだ。

子どもたちをよく私の職場に連れて行った。親の仕事を見せておこうという魂胆もあった。

こんな学生との出会いが楽しかったのか、子どもたちは、「大学教師は楽しい」という認識をもったようだ。ということで、二人とも、今大学教師をしている。

そのころの学生は、いまではほぼ50代だ。近年よく「先生のお宅に伺ったことがある」という話を聞く。しかし、私の方が覚えていないことがある。多分、我が家を訪問した学生は100名を超えそうだ。もしかすると、200名を超えるかもしれない。

学生だけでなく、親戚の子ども達も来たり、泊っていった。逆に、私たちが大変な時に子どもたちを預かってもらったこともあった。当然、親戚の大人も来る。私に囲碁ができるのは、義兄たちが有段者ばかりで、来るたびに私をしごいていったからだ。義兄たちはスポーツマンでもあり、空手師範やゴルフチャンピオンもいた。その影響は、彼らの子どもや孫までに及び、新聞スポーツ欄をにぎわすようなものが何人もでてきた。

ある時は、恵美子の母親を預かったこともある。記憶力が弱くなり、トイレの場所がわからなくなるので、トイレの前に「トイレ」という大きな貼り紙をしたこともある。家事を頼んでおくと、きちんとしてくださって助かるが、自分がやったことを忘れてしまう。「ありがとう」というと、自分がしたことを覚えていないので、驚かれてしまう。

その後、親戚の子どもの仲人を二組もした。沖縄式の親戚つきあいは濃密だ。恵美子の親戚は宮古出身で門中はないが、実質的なつきあい、相互援助関係は豊かなのだ。(2016年12月21日)

74. 地域との付き合い PTA 卓球など

80年代半ばごろの地域との付き合いについて書こう。

1) PTA

このころになると、私の授業の受講生が、各地の学校教師になっていた。どの学校にも一人以上いるといえるほどだった。「鬼の浅野」時代の受講生だったので、こんなエピソードがある。娘が、ある教師に「名前はわかるけど、苗字はなんていうの」と聞かれて、「浅野」と応えたら、その教師がすぐに「父親が私だ」と気づいて絶句状態だったらし

い。

ということもあって、授業参観なども遠慮していたし、仕事が忙しいこともあって、PTA役員なども遠慮気味だった。ところが、ある年の4月に恵美子が会合に出て、私の意思も聞かずに、学年PTA委員長を引き受けてきた。仕方なくやったが、再任され2年間ほどした記憶だ。そこでの思い出に二つある。

学級PTAをもつことが決まった。西原小だけでなく、他の小学校でも開催経験がないとのこと。ということで、親子討論会のようなものを企画して、私が実際にやって見せた。担任も親も子どもも緊張していたが、結構面白い発言が出てきた。

もう一つは、親子ムービーづくりだった。当日、親子全員の人数より多い人の参加があり驚いた。三世代参加が多かったのだ。もうそのころには、ムービーづくり経験のない親も多くなっていったためか、これを機に習おうという事になったようだ。200～300人での会は盛り上がった。

2) 小波津団地

団地では、とくに我が家周辺は、庶民的雰囲気が高く、家々が閉じずに、開け放たれている感じで、昼間も含めて、常時だれかが見える賑わいを感じる場だった。だから、近所関係は深かった。当時は、飼い犬も放し飼いも多く、団地内道路では子どもたちと犬が遊びまわっていた。

共同作業や諸行事も盛んだった。祭りも行われた。ある時は、団地で子ども達を集めて、集団遊びをしたが、それを担当したこともある。

西原の地区対抗スポーツ大会にも、団地代表で卓球だけでなくバレーなどにも出場した。

卓球では、西原代表として中頭郡大会に出、さらに中頭郡代表として、県民体育大会にでたこともある。結局、南風原時代の島尻郡代表、西原時代の中頭郡代表、埼玉時代の富士見市代表、そして近年では、南城市代表ということで、県民大会体験をあちこちですることができた。

興味深いのは、地域ごとに、代表への応援スタイルが異なることだ。

3) 地域の体育館で卓球練習もした。西原に田畑さん一家が住んでいて、呼びかけたので、多様な世代の男女、多様なレベルの人が集った。沖縄チャンピオンの中学生選手もいた。田畑さん一家とは、あれから30年余りの付き合いだ。息子も連れて行ったが、卓球を愛好するほどではなく、結局、息子はサッカーを選んだ。

そのころの西原は、バレーが全国トップクラスだったが、バレーを始めると世話することで親が大変で、我が家では無理だったので、バレーは選ばないように祈っていたら、サッカーになって、ホッとした。それでも、息子はサッカーに打ち込んで、かなりのレベルまでに至っていく。

4) 学習塾とかおけいこ事塾がある時代ではなかった。子どもたちが唯一通ったのは、スイミングクラブだが、短期間でやめてしまった。そういうものより、近所で遊びまわるのが、ずっとおもしろかったのだろう。

5) このころから、よく歩いた。近隣を歩いた。犬を飼っている時は、犬散歩も兼ねた。ハブと出会うこともあった。大学まで1時間余りを歩いたこともある。(2017年1月3日)

75. 家計のこと けちな私

1976年、恵美子が沖縄キリスト教短大に就職して、財政的に一息つけるかと思ったが、長男の入院、長期化に対応すべく家の購入（借金で）などで、家計は依然として大変だった。交通手段は、中古車一台と、50ccバイク一台で回していた。

我が家は、消費生活がつつましいので、やりくりができていたと思う。テレビを購入したのは、沖縄生活開始1年後であり、白黒テレビだったのを同情してか、親戚が中古カラーテレビを譲ってくれたこともあった。那覇時代は、リュックを背負って、与儀の農連市場に野菜の買い出しをよくしていた。

多少のゆとりが出てきて、初めて新車を買ったのは、沖縄生活10年近くになったころだ。バイクに乗っていたが、転んで痛い思いをして、車にしたのも、そのころだ。

クーラーが必需品になる時代、移動式窓枠取り付け型を長く使っていて、室外機・室内機のあるタイプを使い始めたのは、80年代になってからと記憶している。

それにしても、よくぞやっていたなど、当時を振り返って思う。

費用がかかるのは、住宅購入・賃借費用と、子どもの教育費用だというのが、1970年代からよく言われてきたことだ。沖縄の住宅公社販売の小波津団地の家は、1070万円で売り出され、頭金100万円で購入した。二戸連という、一軒の家を半分に区切った建物で、20坪だった。今では信じてもらえそうにない価格だ。共済組合からの大きな借金で購入した。80年代半ばには、ようやくゆとりができて、200～300万円かけて増築したのだった。

教育費は、学習塾もおけいごと塾にも、スイミングスクールに短期間通った以外は、いかなかった子どもたちの「お陰」で、最小限の出費で済んだ。当時は、通える塾めいたものも少ない時代だった。親としては、通わせるつもりもなかったが。ただ、保育園費用が高かった。共稼ぎのため、西原町の最高額だったようだ。

週一回、与那原の松田商店に家族みんなで、食料品買い出しに出かけたのが記憶に残っている。その松田商店は、安くて評判がいい、地元感あふれるスーパーだった。その松田商店も、いまではサンエーになっている。

ブランド品とは縁遠い生活だった。

こんな習慣は、今まで続いている。こんな私を見て、「けちな誠」といわれた。自分では堅実なだけと思っているが。（2017年1月13日）

76. 80年代半ばの学生とのつきあい ゼミ指導 悩み相談

1) ゼミ生（卒論生）の指導

当時は、浅野研と呼ばれていた。そのころの数年間のゼミノートが何冊も私の家に残っている。まさに若者風のノートだ。彼らは今では、50歳前後の活躍の頂点期にいる。

70年代末にできあがった体制がそのまま残っていて、学生たち自身で運営するありようが引き継がれていた。そのころになると、気負って研究室を選ぶというものだけでなく、「他の研究室ではついていけないので」と思うタイプの

学生もいた。人生相談が必要な学生たちでもある。

それにしても、よくやってくれた。世話焼きというか、リーダー的というか、そういうタイプのものもいたし、卒業生で、恒例の合宿に参加するものもいた。私よりは、そうした人が仕切っていく研究室になっていた。

合宿でのエピソード三つ。

合宿最後の夜明け、私は眠っているが、ほとんどの学生が、朝の散歩？行軍？に出かける。仕掛け人は、今や著名になっている鈴木庸裕さんだ。

合宿での食べ物がすごかった。元料理人の学生がいたからだ。ケーキは一流、寿司も出てくる。今では、人気の塾を運営している亀谷一美さんだ。

教員採用試験の模擬面接もした。私が面接官役。ここでの経験が生きて、実際に採用試験で合格するものが続出。ここでのことは、いつしか浅野アクターズスクールと呼ばれるようになった。当時、タレント養成で話題になった沖縄アクターズスクールになぞらえたものだ。実際、度胸だけでなく、演技がうまかった。それは、「ぢ」を素直に出すことがうまくなったということだろう。

合宿以外でも話題は多い。ある年、東京へ「本の買い出し旅行」をした。書泉グランデとか三省堂といった大型書店に出かけて、本を見つけるのだ。ある女子学生が、書店の床に座り込んで本選びをしたのが思い出に残る。ほとんどが初めての東京だ。「東京には歩く歩道がある。本当か嘘か」というように、私が東京クイズを出して、楽しんだのもそのころだ。

卒論も多彩で興味深いものが続出していた。

2) 悩み相談 悲劇の連続

70年代末から、個人的悩みを抱える学生が相談に来ることが少しずつ出始め、80年代半ばに近づくと、かなりいた。そのうち、深刻な結果になる例も出てくる。自死に至る例で、一人ならず出会ってしまった。経験不足の私の力量をはるかに超えるものだった。そこで、そうしたことの対処の専門家に相談したりもした。

と同時に、対応する私自身の精神の限界をこえるものであったので、80年代後半になると、遠慮することが多かった。それ以降、カウンセラー的仕事を避けるようになってきた。自分自身の崩壊を避けるためでもあった。

こんな過程で、おおいに助けてくれたのは、今や超ベテラン教師になっている槇田正法さんだ。研究室に相談に来る学生へのいわば第一次対処を彼がしてくれたのだ。

こんな風に学生に助けられることが増えていくころだった。

そんなころ、学生に対して、父親役をとることも出てきた。ある時、学生に注意する場面があったが、思わず「お父さんがどう思っているかわかるか」といってしまい、笑い話になってしまった。(2017年1月23日)

77. 学生集団を育てる

こうして、私は、仕事のなかで、学生への多分に生活指導的な活動を展開するようになった。大学教員は授業だけすればよいのではなく生活指導業務をせざるをえないということは、近年よくいわれるようになったが、80年代当時でもその必要が広がっていた。

そこで前回書いたようなことに加えて、学生集団を育てることに力も注いだのはこの頃だ。

その一つは、所属する教育学科学生に対してである。無論、それは、教育熱心・世話熱心の琉球大学教育学部の歴史蓄積でもあるし、教育学科の同僚も熱心だったので、協働の中で進めてきたものだ。

入学時のオリエンテーション、歓迎コンパ、歓迎ハイキング・・・とさまざまな取り組みが展開していった。特に、そのころ、文部省で予算化もされていた1, 3年次合同合宿なども重要な役割を果たしていた。

こうした取り組みの初めのころはなかなか大変だが、習慣化し、上級生から下級生へと引き継がれていけば、学生たち自身の自主的な取り組みとなり、教員にとってはそれほど大変な取り組みではなくなる。

そして、そうした取り組みは、教師志望のかれらにとっては「実習」的意味合いさえある。さらに、親元を離れて初めての一人暮らしをする学生が過半数を超えていた当時では、重要な意味を持っていた。

脱線するが、付き合う学生コンパ（今では飲み会とっているが、当時はコンパとっていた）は、ハンパな数ではなかった。我が家で開くこともしばしばだ。教育学科学生だけでなく、いろいろな学生グループがあったのだ。そこで、事前にコンパの企画・プログラムを見せてもらって、面白そうだったら参加する、という風にした。こんなことで、そのころのコンパには、素晴らしい企画のものが結構あった。

そうした取り組みを学部全体で展開したのが、フレッシュマンフェスティバル（この名前は、私の造語。略称フレフェス）だ。70年代までは、体育科主催の水泳実習であり、そのなかのレクとして、キャンプファイアがあり、それを私が担当した。

1980年前後から、学生の「厚生補導」（官庁用語）が重視され始め、予算化され始めた。その一つが、1, 3年次合宿だったが、もう一つ、規模の大きい予算が組まれ始めた。それを活用しての、学部全体の企画として、水泳実習を模様替えして、進めようという話になった。ということで、学部の委員会がたち上げられ、私もそのメンバーになった（80年代後半には委員長にもなった）。

これらの取り組みについては、日本教育大学協会の研究会で報告した。また、「青年期への旅立ちとしての中学生の行事」（あゆみ中学校教育実践選書第27巻 桐山京子・浅野誠編『行事の創造と組み立て』あゆみ出版1983年）にも、取り組み内容を詳細に書いた。これは、中学校教師に書いてもらう原稿を、適切な方を見つけられず、結局私が書いたものだ。

この取り組みは、私が琉球大学に在職した1989年度まで続いた。当時全国の大学でよく言われた「五月危機」、つまり、入学後の学生にゴールデンウィーク後に「危機」に陥る例が多いことへの対処という意味合いもあった。大学入学したが、受験学習とは大きく異なって、大学での学習は自分でなんでも計画を立ててやっていかなくてはならないし、友達作りも、新たにしなくてはならないということのなかで、「危機」が生まれるというのだ。

そこで、入学式前後に行われる各種のオリエンテーション企画の一環としての、フレフェス説明を担当教員（私がしたことが多い）がし、直ちに取り組みに入った。ある年は、集まった入学生に、すぐに学科ごとに集合させて、いくつか集団遊びをしながら、学科アピールをさせた。初めて出会ったクラスメイトとすぐに行う取り組みで、びっくりしていたが、それをきっかけに友達作りがスタートする。こうして、7月まで、フレフェス取り組みの渦ができていく。無論、それを学科の上級生が応援サポートをしていく。

その応援サポートの中心に数人の上級生アシスタントがいた。いまでは、優れた学校教師になっている人が多い。（2017年2月3日）

78. 繁忙生活と繁忙への対応

80年代半ばから後半も、以前と変わらず繁忙の時期だった。沖生研や沖民教など沖縄教育にかかわること、大学の諸業務など以前からのものに加えて、日本生活指導学会の事務局長業務なども加わった。実務的な仕事も多く、それらの処理も大変だった。

私は、70年代半ばから、そうした業務のなかの実務部分の多くを学生アルバイトに委託してきた。短期ではなく、2～3年間にわたって一人の学生に継続してほしいしてきた。そうすれば、学生も安定したアルバイト収入が得られる。当時としては破格の自給1000円かそれに近い額を支払った。その経費は、公的などころから出せることもあったが、大部分は私個人が支出した。アルバイトのできる仕事はお願いして、私自身の時間を使えることの方を重視したのだ。

ということで、1990年までの10数年間で、数人のアルバイト生に活躍してもらった。先日、第一号の方に40年ぶりにお会いした。

80年代半ばには、原稿執筆もいつも数本抱えている状況にあると同時に、「子どもの発達と生活指導の教育内容論」(1985年)、「集団づくりの発展的検討」(1988年)、「沖縄県の教育史」(1991年)と単行本の執筆が連続した。

大学では、今書いてきたような業務が多いし、研究室には学生を始め多くの人が入り出し、電話も多かった。ということで、大学で研究できる空間と時間を確保することが難しくなっていた。そこで、ドライに割り切って、大学では教育活動と行政的業務、自宅では研究と区分した。そのころ増築した家に書斎をつくり、そこに籠って研究することが多くなった。

こうした業務増大のなかで、仕事にかかわる時間管理ノートを作り、整理をし始めたのもそのころだ。

ワープロ機能が中心だったが、コンピュータを本格的に使い始めたのもそのころだ。コンピュータを前にしてやるという仕事スタイルになっていた。

ここで、学生との付き合いで、いくつか余談を書こう。

1) 70年代中頃に引き受けた卓球部顧問は、80年代後半に田港朝昭先生に引き継いだ。顧問時代につき合った部員で、今も卓球試合で顔を合わす人は多い。具志堅侃、比屋根、山里、伊志嶺・・・といった方々で、今は60歳前後であり、現役選手としての活躍と同時に指導者として活躍している面々だ。

伊志嶺朝司は親戚であり、小さいころからよく知っていた。そして、1980年代前半のキャプテンであった。今は、その子どもたちが沖縄卓球界の現役トップクラスの選手だ。

2) 何にヒントをえたのか忘れたが、「卒業生通信」というのを出して、年末年始と夏の二回発行し、卒業生に送っていた。今、年賀状代わりに出している「年末年始通信」の前身だ。

3) 私の授業やゼミで出会い、結婚にまで至る例が出始めたのは、1980年代だ。そのため、仲人役を引き受けることがしばしばになった。仲人を立てることが激減する1990年代半ばまで続いた。恵美子の教え子の仲人もあったりして、数組、もしかすると10組ほどしているかもしれない。

お祝いの言葉を、私と恵美子の共同で述べることも多かった。

1970年代の結婚式では、演出と司会を引き受ける事が多かったが、80年代と90年代半ばまでは仲人役、90年代後半以降は、祝辞・乾杯の音頭が多くなった。世代替わりもあって、2000年代に入ると、出席機会そのものが

減った。(2017年2月14日)

79. 上級生のコメントを生かす教育研究入門Ⅱ

そのころの所属学科での担当科目数は、ゼミ・卒論指導の他は学期3コマだった。それは、70年代から80年代を通して変わりはなかった。その三つのうちの一つは、「道德教育の研究」で、受講生全員で一つの行事企画を作り上げる、70年代からの続くスタイルを続けていた。合宿でやるその企画は、私も受講生も大変だが、強く印象に残っているようだ。

他には日本教育史などを担当していたが、「我が家の家系図」作りを通して、日本教育史を考える授業をしていた。沖縄戦を含む沖縄の近代を考える上で貴重な機会となった。受講生の一人は、現在名桜大学教授になっている嘉納さんだ。

今回と次回で、学生たちの相互関係・共同活動の中で進める二つの科目について紹介しよう。二つとも所属する教育学科(小学校教員養成課程教育学専修)対象の授業だ。他の学科からのもぐり履修もあったように記憶している。いずれもカリキュラム改訂の結果、作られた新設科目だ。

まず、一年生向け「教育研究入門Ⅱ」 今時でいう、初年次教育科目だ。このところの連載で取り上げていることは、ここ10年ぐらい全国の諸大学で盛んに取り上げられているが、琉球大学教育学部では、30年以上前から取り組んでいることだ。70年代後半の教育学部の教育改革の大規模プロジェクトで学部教員の多くが参集して共同研究した成果が、現実の教育活動に反映したというわけだ。

教育研究入門は4つの分野があって、教員の専門分野にもとづいて分担したが、私は教育実践にかかわる分野をもう一人の教員と隔年交代で担当した。

教育現場の実践記録を素材にして、その検討をすすめるなかで、現場実践をもとにした学習研究の入門的手ほどきをするものだ。学習研究ノートを一人ずつ作成し、読んだ実践記録についてのコメントを書き、参考文献から学んだこと、クラスメイトとの討論で学んだことなどを書き、一定段階まで来ると、それを、2年3年の上級生にコメントを書いてもらうということを繰り返すという段取りだ。最終的には、数十ページのノートができあがり、学習成果が自分でも確認できるものだ。

この過程で、上級生は大変なことになったと大騒ぎである。自分の所にコメントを求めにやってくると、「かわいい一年生」なので丁寧に書こうとするから、上級生自身がうんと学習することになる。一年生がコメントを求めにやってくるかこないかで一喜一憂する上級生だった。

私は何をするかというと、学習ノート作成の中途と最後に、目を通す。分厚いので、全部精査することは難しい。そこで、上級生のコメントを中心に読む。そのことで、一年生とコメントを書いた上級生の双方に励ましのコメントを書き込む。上級生はこの科目の履修済者は限られている。新設科目だからだ。お蔭で受講していない上級生も指導できるという一石二鳥だった。

コメントを何人もの一年生のノートに書いた上級生にはお礼に書籍を差し上げた。一人の一年生に2人の2、3年生がコメントするので、平均して一人一回のコメントとなる。これで、私の科目を受講しない学生を含めて、ほぼすべての1～3年生を指導することができた。

繁忙の私だったので、一人一人にたくさんの時間をとることが難しかったが、これだと、結構一人一人に行き届いた

指導ができるだけでなく、学生相互の関係を築き深めていく上でも有効だった。(2017年2月26日)

80. 学童クラブ・児童館などで子どもを指導する指導技術演習・生活指導演習

もう一つ、実際に子どもたちを対象に展開した授業である指導技術演習・生活指導演習について紹介しよう。そのころ、那覇市の福祉関係部局とつながりがあり、「厚生省予算で園庭開放事業をすることになったが、なにかいい知恵はないか」と相談があった。そこで、私は「では、実際に、授業の形で学生が動いて、サンプルを作ってみましょう」と提起したことが、この授業のきっかけだ。

指導技術演習・生活指導演習だから、机上だけではイメージがわきにくいから、実践してみて、それをもとに進行しようということになった。

早速、那覇市関連では、保育所・児童館などにつながりをつけ、また、当時広がり始めた学童保育クラブともつながりをつけ、数か所で実践することにした。この実践の詳細はすでに連載55で書いた。

数回実施した後で、学生たちは一人ひとりが実践記録を書いた。そして、検討し合う。それらを集約して冊子を作成する。ともかく一年目は大変だった。そこで、二年目は、前年参加した学生は生活指導演習A、新規に登録する学生を指導技術演習とした。そして、2年目の学生が一年目の学生をサポートする役目を取り、私はその2年目の学生の指導に力点を置いた。次の年は、実践する学生は指導技術演習、それをサポートする学生を生活指導演習A、さらにそれらを統括していく3年目の学生を生活指導演習Bという科目にした。4年目の学生も登場してきたが、ボランティア扱いだ。

こんな風なサイクルができたので、私は、後ろに引いていき、学生相互の自主運営となっていく。無論、難しい事態が生じた時は、私も現場に出かける。

こうしたサイクルができたものだから、私が退職後も、別の教員の担当科目として、しばし継続した。

那覇市から学生に謝礼が支払われ、ずいぶんな額になったようだが、学生たちはプールして、ビデオ機器などを購入した。

80年代の学生たちにとって印象に残る科目になったろう。

なお、この取り組みの前の時期には、沖生研主催の子ども学校（がじまる学校）で、現役教師たちといっしょになって、子どもの指導にあたる取り組みをしていた。現場教員の研究的実践と、学生の教育実習のかかわりとを統一的にすすめたもので、現場教員にも学生にも、そして私にもとても有益な場となった。(2017年3月7日)

81. 大学の諸委員会での取り組みなど

80年代半ばから後半は、大学の多様な委員会の仕事がたくさん舞い込んできた。大学に行くと、会議の連続といった感じになった。その多くは、1980年ごろ、大規模に展開した大学教育改革の共同研究プロジェクトで提起されたことを実際に移すためのものだった。

いくつか記憶にあるものを紹介しておこう。

・教務委員会 教育学部の教育改善をシステムとして支えるためのものだ。おまけに、学部代表で全学の委員会のメンバーにもなった。印象に残っているのは、医学部創設に対応するための準備作業だった。他学部とは異なるシステムを持つ医学部は他学部との調整が必要だった。とくに教養教育においてそうであった。

余談だが、私も輪番制で教養「教育学」を担当した。その受講生の医学部一期生の一人から、近年私のブログをきっかけにして、連絡があった。千葉で、医師をしつつ福祉法人を運営して奮闘しているという話だった。

さらに、九州地区の教育学部の教務委員会の会議にもでかけた。出席者のほとんどが、50、60代の「実力者」であるなかで、40歳前後の私が一人いて、場違い感さえあったが、結構発言したと記憶している。

・入試改革 このころ、推薦入学を導入することが決まり、その方法についての協議と実施に向けて、いろいろな取り組みがあった。いわゆる内申書だけでなく、個別面接・集団面接など多様な角度からの「試験」を実施した。話題を呼んだのは、集団面接だったが、いわゆる集団面接というよりは、グループ創造だった。たとえば、1分ほどの音楽をBGMにして、数人のチームでパフォーマンスをする。3時間かけて、教育学部周辺を取材して、壁新聞を作成する。

じっくりと時間をかけたものだから、受験生と試験官との関係も深まり、入学後のつながりに寄与していった。なかには、推薦では不合格だったが、一般入試で入ってきた学生との関係も深まった。

他のタイプの入試でも、新たな試みをいろいろとした。たとえば、書籍の一章を受講生に渡し、1時間かけて読書した後、それについての討論をするという形をとったものもあった。本が読めているかどうか、歴然とするので、受験生の力を見るうえで、とてもよいと試験官の皆さんには好評だった。

多様な専門分野の教員がいる教育学部だからこそできる入試だろう。そのころ、医学部も推薦入学を実施するというので、先行実施していた教育学部に相談に来られた際、その対応に私も加わった。

2010年代後半になり、センター試験廃止に伴い、色々な形の入試が話題になっているが、その論議に出てくる形態の多くは、80年代後半に、私たちは実施していたのだな、と思う。たとえば、正解が一つではない論述式の試験に対応する大学教員の採点力量が話題になっているが、それなども当時、私たちが模索し、それなりに成果をあげていたことだった。

・こんなこともあった。突然、大型予算が年度途中で舞い込んできて、数か月でそれを消化せよという「天の声」が来る。会計係長が、なぜか私の所に飛び込んできて、なんとかできないかと相談にくる。

学部内に広く声をかけて、要求をとりまとめ、一億円ほどの予算計画をたてて実施したこともあった。世話役をした私自身は、その予算から何も得ない、全くの奉仕作業だった。

こんなことをするなかで、大学予算のことに詳しくなると同時に、面倒くささがわかるものだから、自分では、それ以降科学研究費など予算請求をすることを避けてきた。共同研究の大型予算の計画書を作成することのお手伝いは何度かしたが。予算書作成が上手くなったのだろうか、私が執筆に関わった科学研究費の計画書は、100%通ってきた。私個人で取ったのは、一回しかないのだが。

・教育実践センター創設など、ほかにもあるのだが、これくらいにしよう。(2017年3月17日)

8.2. 子どもの発達と生活指導の研究 全生研大会基調提案執筆

1980年前後から80年代半ばまでの私の生活指導研究は、子どもの社会性発達と生活指導ということに焦点をあてていた。きっかけの一つは、全国生活指導研究協議会（略称全生研）の全国大会で、小学校低学年や幼児教育や障害児教育の分科会を担当し続けたことがあった。その分科会では、城丸章夫さんと一緒にすることが多く、いろいろと学ばせていただいたし、その後の個人的おつきあいのきっかけにもなった。また、70年代後半から発達をめぐる問題への重要な提起を続けていた竹内常一さんの仕事にも大きな刺激を受けていた。

当時、子どもの発達にかかわる日本での研究と実践に対して、ピアジェ・ワロン・ヴィゴツキーなどの理論が強い刺激を与えていた。また、障害児教育の分野における田中昌人さんなどの研究は高いレベルを示していた。私は、それらに学びつつ、とくに社会性の発達の領域に焦点化し、と同時に、発達に関わる教育活動としての具体化に焦点を合わせて考えていた。

私の研究は、1981年ごろから公開され始める。たとえば「幼児教育（後期）から小学校低学年までの集団づくりの位置と課題」（『生活指導』1981年11月号）、「子どもの発達と集団づくりの教育課程」（全生研常任委員会編『障害児の集団づくり』明治図書1984年）などがそうである。

そうした時に、1984年の全生研大会の大会テーマが「現代の子どもの発達課題に挑む集団づくりを追求しよう」となり、その基調提案執筆を私が担当することになった。草案を何度も書いて、多くの方々の検討討論を経て基調提案となった。

30代後半の私にとってはやりがいがある仕事だけに、緊張の積み重ねであった。その過程で行き詰りかけていた私は、当時埼玉に住んでいたが、どこかにぶらり旅に出て気分転換をしようと東京駅まで行く。結果、房総の先っぽまで行き、歩き回り、見つけた国民宿舎に一泊する。気分転換は成功し、宿舎での執筆作業は、思いのほか進んだ。

それ以後、これら一連のものをさらに深め広げて単行本「子どもの発達と生活指導の教育内容論」明治図書1985年に結実させた。1985年夏には原稿が出来上がり、年末には刊行された。生活指導分野での私の初の単行本だ。80年代前半の私の生活指導研究を集約するものとなった。

この過程では、到達度評価研究をしているグループとの有意義な研究討論もあった。こうした過程で、多様な分野の方々との研究交流がさらに広がっていった（村越邦夫、中内敏夫、浅野誠、根本橋夫、平林弘編『教科外教育と教育評価』日本標準1984年参照）。とくに中内敏夫さんには、それ以降、私の理論的探求をめぐる、重要な示唆を繰り返し受けてきた。しかし、私の方が、中内さんの提起に応えきれないで、今日に至っている。それは私個人の課題だけでなく、広く教育研究の課題としていまなお積み残されているとあってよいかもしれない。（中内敏夫『生活訓練第一歩』日本標準2008年、中内敏夫「学力の社会科学」大月書店2009年など参照）

そのころ障害児教育学校、とくにその寄宿舎に訪問滞在し、子どもと担当職員と直に接するなかで実践的に考えていった。あるいは幼児教育保育にかかわる実践者との研究交流も進めていった。講座保育幼児教育体系の第一巻「保育の基礎理論」第2分冊『内容と方法の計画』（労働旬報者1987年）に「保育実践と子どものとらえ方」を掲載したのも、それらの研究の一環であった。（2017年3月24日）

余談11. 学術界との付き合いと博士論文提出話題

これまで述べてきたように、大学・大学院生活の研究生生活に占める比重が低い私には、「アカデミックな学派づくり」とは距離があった。小中高の現場実践と結びついて研究をするという姿勢を第一にしたことが、アカデミックの世界との付き合いに距離を置かせたというべきだろう。

その現場の一つは沖縄教育だった。沖縄の教育関係者が共同研究者であったともいえる。

学会との付き合いは、最小限にとどめていた。年一回の出張費がでるかでないかぐらいの研究費の少なさもあることはあったが、大きな理由ではない。それでも、1980年ごろから学会との最低限の付き合いはした。

一つは、日本教育方法学会で、出席するときは、何か問題提起した。生活指導研究と大学教育関連であった。そして、理事にも選出されたが、それほどのことはできなかった。1983年の日本生活指導学会結成への参加は、別の記事に書こう。

博士論文提出の勧めはあったが、迷いもなしに、出さないことにしてきた。

私の博士論文イメージは、中内、堀尾、稲垣さんのものが身近なものとしてはあった。他にも、触れる機会はあったが、これが博士論文かというものにしばしば出会い、がっくりくることしばしばだった。アメリカのものもあったが、私のイメージからいうと、卒論レベルが、せいぜい修論になるかならないか、というものだった。

研究職に就くためには、博士論文が必要条件であるアメリカと、そうでもない日本の違いが背景にあらう。もっとも、ここ20年ぐらいで、日本もアメリカと事情が似てきた。

博士論文を出す人が少ない当時、学術的な著書を出すことの方が、実質的に重視されていたという事情もある。出版は、「子どもの発達と生活指導の教育内容論」「集団づくりの発展的検討」「沖縄県の教育史」「学校を変える 学級を変える」、そして大学関係の二冊など、何冊か出版できて、私なりの仕事はできたと思う。それらを博士論文提出にむけたらとのすすめもあったが、検討もしなかった。

私が20歳ぐらい後の世代だったら、博士論文を出すことになっていたと思うが、振り返ってみれば、出さなくてよかったとさえ思うことがある。

というのは、出していれば、博士課程をもつ大学院の教員にさせられていただろうからだ。当時、そうした大学の大半は公募ではなく、内部の相談で人事が進められていた。ということもあって、私自身も、いくつかのそうした大学の候補者になっていたということの後から知った。ある大学で既に決定していたという情報が入ったので、別の大学は採用を断念したという話もあった。結果的に私の知らないところで双方ともなしということになったそう。

そうした大学の教員は、多くの場合、大学行政・学会運営のこともふくめて、大変な繁忙とプレッシャーのなかで、生活を送っているようだ。中には、若いうちに多忙理由で辞めて別の大学に移った人を何人が知っている。

体力的に問題のある私には勤まらない仕事だなあ、と思う。だから、そうした道を歩まなかった私の結果的選択は良かったなと思う。

そんな事情だから、修士論文や博士論文の直接の指導はしてこなかった。応援でしたことは何回もあるが。その意味では、「研究上の弟子」めいたものはいない。1980年代まで、現場実践で活躍する卒業生を作ろうとする意識は強かったが、それもやはりようを変えていった。

だから、「学術的一家をなす」発想とは縁遠い。2002年に自分で「文献目録・解題」を作成したのも、そういう発想からだ。「一匹オオカミ」ではないが、私流の独自スタイルで歩んできたことは確かだ。(2010年2月1

9日)

余談12. いろいろな分野・テーマに手を出してきた私

私はいろいろな分野・テーマに手をつけ、顔を出してきた。そのため、「専門分野は何？」という質問を受けることが多い。その際、『教育です』と、とても幅がある答え方を多いが、「教育のなかの何ですか」とさらに問われると、相手にあわせて、次のように、いろいろと説明するしかない。

「生活指導から出発し、それが今まで続いています。生活指導が教育方法分野でもあるので、教育方法といってもいいでしょう。

修士論文が日本教育方法史だったこともあり、琉球大学では日本教育史を担当しました。研究のうえでは、沖縄に絞って、沖縄教育史を研究してきました。そして、歴史的研究だけでなく、現実の沖縄教育についての研究を展開してきましたので、専門分野を沖縄教育論とすることもあります。

大学教員になったので、大学教育を実践的に研究し、いろいろと発言するうちに、私の専門は大学教育、しかも大学教育実践、大学授業論だとみなす人が出てきました。

90年代になると、グローバル教育論といわれる動向ともかかわり、共同研究をするようにもなりました。

生活指導研究は、小中高の現場実践を軸にすすめてきましたが、創設に参加した日本生活指導学会には、実に多様な分野の方が参加しましたので、そのつながりもあって、看護、福祉、司法福祉、矯正教育といった分野ともかかわって研究するようになりました。

以上のいくつかのからみの中で、私自身が実践しているスタイルは、ワークショップ、ないしはワークショップ型授業だということで、専門分野として、ワークショップ・授業論と書くこともあります。

また、もともとの専門の生活指導論は、人々の生き方にかかわるので、生き方論・人生論にも首を突っ込み、さらにそれは生活する地域の創造ともからみますので、地域づくりも専門分野になりそうな気配です。」

こんな具合だ。

列举すると、

教育、生活指導、沖縄教育、大学教育、授業・ワークショップ、グローバル教育、人生おこし・地域おこしといった具合だ。この先、新たなものが加わり、変化していくことはおおいにありうる。

こうしたことの背景には、こんなことがありそうだ。

「組織は、一貫して同一の組織に継続してかかわることが善だ、という発想からだんだんと遠ざかり、必要に応じて、研究組織にかかわり、あるいは、結成するという方向へと動いてきた。」

だから、学会の入退会もたくさんだ。全国学会に限って、これまた列举しよう。

日本教育学会、日本教育方法学会、日本教育史学会、日本生活指導学会、日本教師教育学会、大学教育学会。何か忘れているかもしれない。これに研究会を加えたら、数は倍以上になる。(2010年3月14日)

8.3. 集団づくりの新しい展開

集団づくりの主唱者の一人大西忠治は、1983～84年ごろ、集団づくりについての再検討を提起する。しかし、衝撃的な提起にもかかわらず、具体的な作業・討論はなかなか進まなかった。

そんな時、私は、そのころまで集団づくりの理論的実践的指針となっていた『学級集団づくり入門第二版』の徹底的な検討作業を始め、それを『生活指導』誌に連載し始めた(1986年11月～1988年7月)。それは、同書のなかで重要な文章を抜き書きし、検討する細かい作業だった。人によっては同書をバイブルとするほどだったので、禁断の領域に踏み入れる感じさえあった。

その過程で、1986年ごろだったか、全生研常任委員会のなかに「集団づくりの新しい展開」にかかわる小委員会が設置され、月一回のペースで開催された。そこに、沖縄から毎月通って出席した。そこでは、私の連載原稿を検討していただくことを討論の軸にさせていただいた。

2年間ほど、この作業に没頭し、最後に連載を集約して『集団づくりの発展的検討——学級集団づくり入門第二版——の検討』明治図書1988年刊を発刊した。

書名タイトルに「発展的」という言葉を加えたのは、『二版』が間違っているというのではなく、バージョンアップする必要があるというメッセージをこめた。それでも、『二版』の記述を「原則」だとする人達からは、批判が寄せられ、必要に応じてレスポンスした。

そして、私が提起したことのなかには、すでに現場実践のなかで築かれていた新しい動向も反映させていた。それは、全生研常任委員会編『班づくり』(明治図書1987年)などとして公刊された。

1980年代半ばにおける社会変化が、子ども達に投影し、それに対応する実践家たちにも、標準的とか模範的なものに沿う実践といったものではなく、創造的な実践が噴き出し始めたといえよう。その後、広汎に見られるようになった学級内クラブの実践がみられるようになったのもそのころだ。また、子どもたちに居場所を保障する多様な形の創造的な実践が生まれてきたのもそのころだ。それまでの理論枠組みだけでは収まりきれない問題がでてきたのだ。それらに応える実践理論をいかに構築するかという課題が立ち現れてきたのだ。

これらの作業を通じて、全生研常任委員会では、『二版』の改訂版を作ろうという機運が高まり、その作業が始まる。常任委員全員がそれらの作業の作業にかかわり、私がそれを集約する役目も仰せつかった。集約作業はなかなか難しかったが、なんとか進めていき、一応形あるものにまとめあげた。

そのころ、竹内常一さんが、沖縄の我が家に来訪されて、「沖縄で作業をすすめるのは大変だろう」などということと、「集約作業を引き取りたい」と話された。それに私は応じた。

ということで、集中した作業で、繁忙を極めた状態から解放され、宿題となっていた『沖縄県の教育史』執筆の本格的作業に移ったのは1989年のことで、第一次沖縄生活を終えるまでに残すところ一年間となった。

なお、私自身が学級集団づくりについて、理論的実践的に本格的な形にまとめて提起するのは、『学校を変える 学級を変える』『転換期の生活指導』(いずれも青木書店1996年)の2冊となる。(2017年4月4日)

84. 日本生活指導学会その後

1983年12月にスタートした日本生活指導学会だが、しばらくは埼玉の私の住所に事務局を置いた。そして、84年4月から、戻った琉球大学教育学部の私の研究室に事務局を置いた。事務局は、私の他に、藤原幸男さんや杉山緑さんを始め、沖縄の会員何名かで構成し運営していた。研究討論の場にしようと努めた学会通信編集には、藤原さんの奮闘があった。そして、学生アルバイトにはおおいに助けられた。

そして、3年余り務めた事務局と事務局長が、愛知教育大学の折出健二さんへと移ることとなったが、その後も、学会理事や編集委員会などの業務を担当し続けた。

1980年代半ばの学会の記憶を二つ語ろう。

○ 発題講演とそれに基づく分散会方式を含めた討論スタイル

若手が発題して、参加者が少人数の分散会に分かれてじっくりとした討論をするという趣旨だった。ほとんどの学会の全体会で見られたような、1～3名ほどの問題提起者の話と、代表的な方々の討論参加を軸にまわり、多くの参加者は聞き手になる、というありようを変えるということだった。

とくに学際的な構成となった会員間の討論を、参加者一人一人が築くという趣旨でもあった。

第三回大会（1985年）は浅野誠が担当し、翌年は高垣忠一郎さんが担当した。

私の発題講演のタイトルと章立ては次の通り

「今日における生活指導研究の課題」

生活指導実践の広がり

生活指導実践の広がりの歴史的背景と歴史的意味

生活指導実践のにない手の問題

生活指導の内容（ないしは目標）

生活指導の方法の問題

○ 地域生活指導研究会

教育関係者の多数は、学校教育における実践を対象にしてきたが、学際的な学会員は、病院・施設・組織そして地域など多彩な場で、実践を展開していた。それらの出会いを、学会討論の場だけでなく、現地調査という形でも展開しようという事で、地域生活指導研究会が何度か開かれた。その一つは、名古屋市南部で、医療を軸にした多様な展開を聞き取るものだった。そこでは、近藤郁夫さんが大活躍だった。

この研究会も含めた学会のなかですすんだ、保健師・看護師・カウンセラー・家裁調査官・社会教育実践者など多様な分野の方々との出会いは、私にとっても限りなく新鮮なものだった。

学会運営にあたって、多様な分野の方が活躍されたが、私にとって新鮮だったのは、看護関係の方だった。代表理事の見藤隆子さんが勤務する千葉大学看護学部（のち東京大学医学部保健領域に異動）の学部長室で学会理事会を開いたのも印象深い。同じ千葉大学看護学部の精神看護分野の横田碧さんには、多くのお世話を長年にわたっていただいたが、横田研究室からたくさんの大学院生が、毎年、新鮮な提案を学会にもってこられるのも学会の楽しみの一つだった。

ある年には、小児がんに取り組むかたのご提案を聴いたが、長男の時にもお世話いただいたことをその方と思い出深く語ったこともある。(2017年4月15日)

85. 学級に丸一日滞在し、実践を参観参与する

このところ、80年代後半に至るまでの私の研究について述べてきた。主として展開した発達と教育研究にしても、二版の検討にしても、多くの人によって築かれてきた財産を学習的かつ批判的に検討しつつ、私なりのものを加えるとといった感じであった。それらは、1960年代1970年代の研究の成果を踏まえるもので、それらの延長線上にあった。

だが、社会変化の進行は、そうした作業だけではすまない問題を多様に吹き出していた。そこにはパラダイム転換といわれるようなものさえ含まれていた。これまでのように大きな流れの一端を担うことを課題にすることだけではすまずに、私なりに新たなありようを模索創造することが求められることに薄々気づき始めた。

その点では、私個人の研究史の大きな飛躍が求められ始めたといえよう。すでに存在する蓄積に乗っかるだけではすまないのだ。

その創造作業は、私にとってかなり手探りであった。そこで、現実との丹念な関わり合いを蓄積していくことと、広汎な研究的挑戦の動向を探り、そこからヒントを得ることが、私のとったアプローチだった。そのアプローチは、80年代後半から始まり、90年代前半まで続けた。

現実との丹念な関わり合いということでは、小学校を中心に創造的挑戦を展開している現場教師の実践に直に触れる作業が大きな刺激を与えた。小学校の一つのクラスに始業時から終業時まで滞在して、クラスの子どもと関わり合いつつ、実践を参観参与し、終了後担任教師と、クラスにおける実践について、きわめて具体的に語り合った。

その一つは、小田原で実践していた神保映さんのクラスだった。前夜、神保さん宅に泊り、朝いっしょに出かけ、一日じゅうクラスに滞在した。それは、参観をこえて参与そのものだった。神保さんが「タッチ」といったら、私が引きついで実践をすると言うものでもあった。

国語の時間に教科書の読み取りをしている時、ある子どもが教科書の文章がおかしいとあって、引き下がらない時に「タッチ」の声がかかった。私も大緊張だったので、よく覚えていないが、その子どもの発言を聴いていると、筋が通っている。クラスの子どもたちも驚きの顔をしている。最後は、神保さんが、教科書会社に話してみるということになった。

その子どもは、学習を得意にするタイプではなかったが、神保さんが日ごろから「おかしいことには黙っていない」ことをきちんと教えていることが反映した結果のようだった。

東京中野の楠正明さんのクラスを訪問したこともある。朝クラスに行くと、一人の子どもがずっと楠さんにまどわりついて離れない。終業時までそうだった。その子どもは、家庭生活に恵まれず、楠さんと親のようにつき合いたいということで、早朝登校して楠さんを待っているのだった。

そんな状況を持つ子どもが多く、クラスを居場所にするための実践的な工夫を楠さんはしていた。班ごとに、ロッカーで間仕切りをつくり、班が一つの部屋の雰囲気をもつのがあった。(2017年4月25日)

86. 子ども分析・学級分析 異質協同 理論創造への歩み

前回書いたクラス訪問は、先に紹介した養護学校寄宿舎でしたことの続きであるし、90年代に入っても続けていき、中学などにも広げていった。滞在中に、クラスの子どもの分析や人間関係、グループなどの分析もして、そのクラスでのその後の実践の課題などを明らかにする作業も併行させた。終了後、担任とその分析を突き合わせることもしていった。

参観した実践については、神保さんや楠さんの実践記録（全生研常任委員会編『班づくり』（明治図書1987年））をご覧いただきたい。

また、それらの過程で、子どもたちのなかに存在する階層差異や発達差異の問題に注目し、問題提起をし始めた。2010年代になってクローズアップされてきた格差貧困問題についての先行的なものといえよう。

神保クラスをもとに検討したことは、生活指導学会で提起し、神保映「小学校現場からの報告」は、『生活指導研究』8号1991年に収録されている。同書には、生活保護家庭の中三の受験学習を援助した福祉職員たちの一人である建石一郎さんの記録も収録されている。それは、現在広がりつつあるこうした子どもたちへの援助の先駆けになる実践だ。

後のことになるが、鈴木和夫クラス訪問をもとに、私なりに書いたものを90年代前半にいくつか書き、『学校を変える 学級を変える』青木書店1996年に収録した。

前回冒頭に書いた「広汎な研究的挑戦の動向」という事では、諸分野の研究提起をあさり歩いた。80年代後半で刺激的だったのは、池谷壽夫ほか『競争の教育から共同の教育へ』青木書店1988年、尹健次『異質との共存』岩波書店1987年などだ。

それらに示唆を受けつつ、「異質協同」という用語に絞って理論化する作業へと向かっていくのは、1990年ごろのことだ。それは、いくつもの諸論を経て、「学級集団づくりの構想と展開—制度と社会—」全生研常任委員会編『メッセージ学級集団づくり』第一巻『学校の流れを変える』明治図書1993年に集約され、さらにまた、前掲の『学校を変える 学級を変える』（青木書店1996年）のタイトルを「異質協同の学級集団づくり」にしようかと考えるほどだった。

この異質協同の用語を多用するに至る前史として、二つの事をあげておきたい。

一つは、恵美子との関係である。恵美子との関係に限らず、夫婦は異質なもの同士が協同するなかで、関係を築いていくものだという考えに、紆余曲折を経て80年代半ばに、至った。

もう一つは、文化的な表現の世界のなかで、多様な人々がかかわって創造する文化表現のキャッチフレーズとして異質協同がぴったりくると感じたことである。この用語以前では、ハーモニーという用語を使用することもあった。それは、マカレンコや家本芳郎の考えにも示唆されていた。また、70年代後半に聴き読んだ民族音楽研究者の小泉文夫の考えに強く示唆されていた。

そして、私がかかわる文化表現の諸活動では異質協同を強く意識して展開していた。それについては、また触れるだろう。

この異質協同というキャッチフレーズは、その後継続して使い続け、2010年代の今日に至る。（2017年5月5日）

余談13 生活指導実践の理論を構築することをめぐって、全生研が持ってきた多

様な視野の歴史 個人体験を含めて その1

(2020年3月に行われた全生研の研究会での私の話題提供のためのレジメ。後半にあたるその2は、「私の人生2」に掲載予定)

A (全生研との直接的関与が薄い～1971年、2004年～) は、個人史として描く

1) 最初の出会い 1963年後半 全生研編「高校の生活指導」などを読みながら、生徒会長の仕事を務める。愛知県私立高等学校生徒会連合(後の、愛知私教連や高校生フェスの芽の前ぐらいのころ)

2) 学校協議会 参加への取組み 教育学部五者協議会(教授会・助手会・職員組合・院生協・学生自治会 建物の面積配分案作成) 確認書(全学協議会) 文化表現体験(学園祭・大学授業「ミュージカルづくり」・シュガーホール)

3) 「自治組織を強力に育てる」「広汎な結集をはかる(統一戦線の形成)」という二つのモチーフ

私自身の生徒会体験、東大体験において。そして、当時の民主運動においても。さらに生活指導・集団づくりにおける子ども自治の追求においても。圧倒的多数の支持を受けることで、状況が構造的変化を起こすことの体験を繰り返す。

4) 宮坂哲文(入学前に死去) 大田堯(ゼミ 教育学部長・・・) 大西忠治(書籍を通して) 竹内常一(学生が要請したゼミ(公式の授業として 「国家と革命」検討)

卒論 社会構造変化と地域教育実践

修論 戦前における児童自治活動の成立史

1971年8月 全生研常任委員就任 全生研の場で、実践家とともに学習・研究をスタート。城丸章夫をはじめとする研究者との出会いも生まれる。大会などでの実践分析の場での圧倒的緊張のなかで徹底的に鍛えられる。実践と緊密に結合した研究の道に踏み出す。

その時に「第二版」の発刊(執筆者 前沢泰 城丸章夫 竹内常一) 初版は1960年代前半(大西による試案は1950年代末)

5) 沖縄体験→愛知体験→トロント体験→第二次沖縄体験

B 社会構造変化に対応する集団づくりの動向

社会変動が集団づくりに反映していた。やや遅れ気味に(他の多くの分野でも?)

1) 1950年代 戦争体験(反省)と民主主義 社会の近代化

労働組合など民主主義組織の形成体験 60年安保のなかでの統一戦線体験

そうしたものを、子ども指導論子ども組織論学校学級論として展開した「学級集団づくりのすじみち(構造表)」

そこには、市民社会論的発想も含まれていたが、強力な集中型組織形成に力点がかかっていた。それをめぐっての批判も登場する。60年代をとおして、民間教育研究運動団体関係者による討論が盛ん。

2) 1960～1980年代半ば

経済成長追求の中でのせめぎ合い。右上がり発想(発展・発達という用語も、それにいろいろ使われていた)の時

期。合理主義の徹底のなかで、競争や実務性の強調の時期。「生活向上」や機会均等の強調。企業型ガンバリズム（ワーカーホリック）。受験学習・テスト体制の浸透・標準化

保革のせめぎあい。現代課題に対応する組織論追求。民主主義的組織論の追求としての集団づくり論（モデルとしての国家・労働組合）どちらが正しいかをめぐる闘いとして把握する傾向

ストレーター秩序確立と中心推進役としての学校。そのありようへの本格的検討批判は未熟。

3) 1980年代半ば～2000年代

低成長時代、「一億総中流」の崩れが表面化 「新しい社会運動」（フェミニズム・環境問題など）「学校への疑問と学校の相対化（学校離れ・不登校の増大、校内暴力）」「管理主義の新しい展開」

ユネスコ学習権宣言、子どもの権利条約などの世界的動向

大西の問題提起（ゆるやかな集団づくり 1983年）

竹内（生活の共同化） 地域生活指導運動

4) 2000年代～

新自由主義 経済の定常化・縮小のなかでの格差・貧困

ストレーターコースの縮小限定

オールタナティブの追求

5) 2020年代～ ??

C 揺れ・対立を豊かさとするかどうか 豊かにしていけるかどうか 集団づくりの組織論的探求のなかで

1) 集団づくりのなかには、二つの対立する（しているかにみえる）考えが併存することにしばしば出会う。それをどう見るのか。二つの間の揺れに見えることもある。

対立した考えを持つ人の論争めいた形で登場することもある。一人の人の中に併存して、揺れているように見えることもある。当人が気づかないこともある。

両者の妥協を排して、どちらかが正しくて、正否に決着をつけようとする動きもある。他方で、対立した考え方の広がりを作り出し、豊かさを生み出しているともいえる。

例

1) 後期的段階 現実の段階なのか、理想として掲げるだけの段階か。

管理や指導は集団発展のなかで「眠りこむものか」 民主的指導管理をめぐって

2) 中央集権型を追求するのか、統一戦線型を追求するのか。

制度を強力な民主的なものにする道

制度のなかから、民主的組織を多様大量に生み出す道

3) 強力な組織とサークル活動（1950年代から60年代にかけての青年運動における「学習」として展開私も高校時代、かかわる）後に、任意参加型組織と公的制度との関係として探求 自発的結社 学級内クラブの提案

構造表では、「私的グループ」として登場するが、公的組織を指導する高度なリーダー集団のイメージであった。市民社会の基盤としての、自由に結成解散参加退会する組織のイメージは弱い。

このあたりを「<生き方>を創る教育」（2005年大月書店）で展開

4) 「どちらが正しいか」という問いかけ。「正しいものについてこい」という発想

唯一正解主義にもとづく授業 説明中心授業の多く（考える資料を提供するというよりも、正解を注入する）

それらには、受け手の受身性を強め、創造的主体者としての発想が欠落。討論などの手法をとっても、正解へ

の誘導のための手段として使う。

子ども・参加者が共同するなかで、豊かなものが湧き出てくるワークショップ・授業

5) 統一戦線形成でしばしば言われた「違いを乗り越えて」なのか、多元性のなかでいわれそうな「違い持ち寄って」なのか

多元性多様性の追求が強調されるのは、少し後になる。

異質協同型集団づくり (浅野誠 「集団づくりの発展的検討」1988年、「学校を変える 学級を変える」「転換期の生活指導」1996年) 日本における多元主義の蓄積の弱さ 単一民族的発想からの卒業 多民族多文化の角度からの追求 移民移住の視点 浅野誠「魅せる沖縄」高文研2018年

多民族多文化をはらんだ社会的な問題を反映する場としての学級・学校

6) 参加を重視するのかもしれないのか

参加の是非 60～70年代における消極性

学校協議会 現在は? 学校協議会への積極的姿勢と消極的姿勢

学校論 下からの学校づくり論

地域と学校との結び合いのいくつかのタイプ 地方自治としての学校づくり 地域教育運動 「味付け」

としての地域 村を捨てる学校・村を育てる学校

7) 福祉への消極性 「福祉国家」批判 1960年代から70年代前半

例外への対処ではなく、「すべて」を対象として wellbeing という生活・つながりの視点から教育をとらえる。

1980年代以降の「福祉と教育」の視点 さらに90年代以降のケア論の隆盛

8) 競争をめぐる議論 個人競争ではなくて集団競争という論理

1970年代まで、なぜ競争に積極的だったのか

哲学畑からの、競争の教育批判 (80年代末) 競争と共同

競争論 機会平等論 実質平等論

D 心理的アプローチ

1) 個人の発達と集団の発展

政治論的アプローチと心理論的アプローチ

1960年代におけるカウンセリング批判 社会矛盾を個人内で解消しない

個人指導と集団指導

子どもの揺れをとらえる 竹内「自分くずしと自分づくり」 新たな視野の提起

2) 発達論 1970～80年代におけるピアジェ (・ワロン) の刺激 全障研 (田中昌人理論) の刺激 社会性の発達として 発達論と教育内容論 「未完」のままだが

「障害児の集団づくり」(全生研) 1983年「子どもの発達と生活指導の教育内容論」(浅野誠) 1985年

E 自己遡及論 (再帰論) 自己展開サイクル (浅野誠)

1) 権威主義から脱却、そして事実から出発する実践サイクルとして、

自治的民主的組織の運営原理 情勢分析→方針策定決定→実践→総括 (情勢分析) →方針 というサイクル

それにヒントを得て、子どもの事実→分析→指導方針作成→教師の実践→子どもの事実のサイクルを、1970年代末に「教育実践の自己展開サイクルとして提起」 沖縄の教師たちが、権威主義のなかに入り込んでいた (文科省的権威 民間教育研究運動の権威 「本土並み」) 沖縄内部で築いている優れた実践に立脚する。

1990年ごろから登場するギデンスなどの自己遡及論（再帰論）との異同

2) このサイクルを、実践記録執筆に生かしていく。1980年代末以降（大学授業でも、書かせた）

現在、学童支援員研修で、自ら実践を把握し、向上させていく手段として、実践記録を書くことを進めている。

40分で1000字書く グループを活用しつつ 権力がセットする基準に囚われている学校教師たちより、自由であり、子どもとの距離が近いこともあり、優れた記録を短時間で書ける。加えて、実践検討——討論
→文章発表・ロールプレイ 別の実践構想の提起 ストーリー性ドラマ性のある実践

3) 技術との関係

技術と思想ということ 1960年代の大西の先駆的問題提起

日本の実践記録は、90年代における世界的なナラティブ強調動向に先行する

戦前からの歴史的蓄積 子どもの記録ではなく、教師が自己の実践を対象化し、向上させるものとして。

(2020・3・22)

87. 大学授業について全国の諸大学・大学人との交流

1983年に刊行した日本科学者会議教育問題委員会・原正敏・浅野誠編『大学における教育実践』全三巻は、大きな反響をいただいた。

それをきっかけに大学授業にかかわるいろいろなことが私の周りで渦巻き始めた。それまでは、限られていた関心が、広汎なものになってくる。それは私の仕事にも影響を及ぼしはじめた。

その一つは、学会などからの原稿依頼が舞い込んだことであつた。それ以前の大学教育に関する論考は、私の方から持ち込んだものが多かったが、このころより依頼されて書くようになる。日本教育学会紀要の『教育学研究』53巻3号1986年に掲載された「大学教育実践の教育学的検討をめぐって」はその代表例だ。

また、大学図書館に勤務する人達がつくる大学図書館問題研究会の全国研究集会での講演依頼を受けたのもその一つだ。その場で、図書館職員が、その特性を生かして学生の学習活動の支援を展開する報告をいくつも聞いたのは私にとっても有益だった。教員が授業において図書館・図書館職員の活用という視点をもつことの有益さを知り、その後の私の授業に大きな示唆を得た。

また、80年代中ごろから、私の授業を参観する人が現れ始めた。代表的なものは、和光大学一行10名近くの方が、わざわざ東京からこられて、私の授業を参観なさったことがある。

私の授業への参観は、70年代後半から始まる。中村透さんとの共同授業「指導技術演習」でのミュージカル制作の時が最初だと記憶している。それは、教育大学協会の九州地区研究会が琉球大学で開催された時のプログラムの一つだった。参観者は、九州全域からの大学教員だけでなく、沖縄の小中高校教師たちも合わせて、100名ほどだった。30名足らずの受講学生は奮闘した。授業後の話し合いでは、議論が賛否両論で沸騰した。「こんなものは大学授業とはいえない」という意見まであったが、40年後の現在では、こうしたタイプのワークショップ型の授業は、少しずつ広がっている。

また、先に紹介した琉球大学教育学部での教育方法改善プロジェクトでは、授業公開を何度となくもった。私も公開したし、参観もした。また、複数教員による共同授業もしばしば行った。

さらに、80年代に入ると、若い教員の要請を受けて、授業参観をしてアドバイスするようになった。

こうしたことは、小中学校では広く行われてきたことだし、私もそういう機会を多くもっていたので、大学での授業公開・参観に違和感をもっていなかったが、ほとんどの大学教員にとっては初体験であり、違和感を持つ人が多かったところである。

そんななか、和光大学の教員たちが、東京からわざわざこられるということは画期的であった。そして、単に見るだけでなく、受講生のなかに入って、受講生と同じように授業参加なされた。なかには、著名な方もおられた。

このグループの方々は、いくつもの著作を出されたが、その一つである和光大学授業研究会「語り合い 見せあい 大学授業」大月書店1996年で、私の授業への参加について次のように書かれている。

「意欲的な試みをしている大学を選んで、訪問調査も始めた。行先はいきなり沖縄で、琉球大学の浅野誠氏（現在中京大学）が、訪問申入れを快諾したついでに、自分の授業を見てほしい、と意外な申し出。行ってみると、教職科目で、学生が自分たちを小学生に見立ててクリスマス会の相談やゲームをやり、生き生きとグループ活動をしていた。あとで思うところの時の感動が、わがグループのその後の授業研究への、貴重な伏線となったのである。」 p 11

2010年代後半の今も続く私の授業への参観のエポックをなすものとなった。（2017年5月15日）

8.8. 沖縄での地域教育実践とのかかわり

1985年に琉球大学教育学部では、教育実践研究会という名の組織をつくり、特定研究予算を得て、「小中学校における教育実践力向上に関する研究」を行い、私は総括幹事として参加するとともに、教科外教育チームに入って活動した。そのチームは、12月1日に地域教育実践交流会を琉球大学教育学部で開催した。（連載98回で少し触れた。）

そこでは、赴任して間もない社会教育分野の松田武雄さんが大いに活躍した。私自身も、それまで学校教育中心の活動をしてきたが、学校外教育の研究を一層推し進める必要を感じて、かかわった。同交流会では、「子ども集団の指導——沖縄を中心に」という基調問題提起を行い、その一部を原稿化し、翌3月に発刊した琉球大学教育学部「教育実践研究」に、「今日の沖縄における子ども集団の状況と指導の課題」と題して公開した。

なお同誌には、中村透「総合芸術創造実習の意義——オペレッタ「泣いた赤鬼」の製作・上演の実践を通して」も掲載されている。前回触れた70年代後半の私とのミュージカルづくりの共同授業の後、この分野で創造的な展開をすすめておられた中村さんの飛躍ステップだろう。その後、かれは本格的なオペラ・ミュージカル制作を展開され、全国的に著名な作曲家としての活動を展開されていく。

この集会では、

金城功恵「子どもとの信頼関係をどう作りだしていったか（中城クラブ「小学生バレーボール」の指導をとおして鈴木和子「子ども劇場の現状と問題点」

榎田正法「学童保育と保育実践 あそびと集団性を中心に」

宮城ヨネ「国頭子どもセンターの活動について」

が発表され、有意義な討論がすすめられた。

1970年代後半から1980年代にかけて、地域の子どものたちの生活に大きな変化が進み始めたころだ。従来の字（シマ）を中心とする生活・活動から、スポーツ少年団や塾など新たな形のものへと急激な変化が進行し始めた。

そしてそれに対応する実践的模索が展開し始めた。今日まで続くその変化を示す象徴的存在は学童保育クラブだ。この時期に、各地で学童クラブが、主として親たちの共同の営みで、都市地区中心に作られていく。そうしたクラブの連携組織の沖縄県学童保育連絡協議会が作られ、確か、その結成大会の際に講演をした記憶がある。同様に、児童館が各地につくられ、その研究集会も持たれ、講演をした記憶もある。

そうした動きに、私はかなり深くコミットした。連載108で書いた学童クラブなどで受講生が実習的な学びを展開する事例もそうだが、浅野研究室の卒業生が、学童クラブの指導員になる例も出てきた。浦添小学校区のなかま学童クラブも、その一つだった。

そのころ、東京学芸大学の小林文人教授を代表とする多数の社会教育研究者が沖縄の社会教育現場の調査をすすめておられ、来沖の折にご挨拶をいただいたこともあった。それには、松田武雄さんも参加しておられた。

しかし、この共同研究に私は直接のかかわりをもたなかったが、2010年ごろまで続いたこの研究の概要を松田さんたちからいただいた研究報告書や著作で深く知ることとなる。それは、2010年代から展開する私の地域研究に大きな示唆を与えた。とくに字誌や集落公民館に象徴される集落・シマ単位の活動のユニークさを深く解明なされた点は大いに学んだ。

余談だが、1987年発行の「なかま学童クラブ 5周年記念誌」には、浅野研究室卒業生で指導員になった榎田正法、砂川邦子、脇山公美子さんが原稿を寄せておられるし、二代目会長の垣花譲二（指笛で著名）ならびに、息子さんの垣花道朗君（5年生）の文も掲載されている。道朗さんは、2000年代から2010年代にかけて、沖縄全体の学童クラブ（さらには保育分野も）のリーダー的存在として活躍している。不思議な縁だ。（2017年5月27日）

89. 沖縄における民間教育研究実践 めだかサークル

連載29に書いたように、1970年代後半の沖縄には多様な民間教育研究団体がつくられ、旺盛な活動が展開されつつける。そのなかで80年代になると、沖縄自ら創造する実践が多様に展開されるようになった。

そうした沖縄の力が注目されて、研究団体の全国大会が沖縄で開催されることが多くなった。その一つの学校体育研究同志会が1984年に沖縄での全国大会を開催した。それに合わせて、継続して発行されていた『おきなわの教育実践』（そのころは、田港朝昭編集長）は、「体育、スポーツと平和教育」という特集タイトルで発行されていた。

そして、1989年には、全国生活指導研究協議会の全国大会を沖縄で開催することになったが、それは、もう少し後の連載に書くことにしよう。

さらに、1988年には、『おきなわの教育実践』編集委員会編『沖縄にねざすたのしい教育実践』を発刊した。章立ては次のようなものだった。

藤原幸男「教材づくりのすすめ方」

小田切忠人「「オペレッタ」風たのしい算数の授業」

杉山緑「確かな読みを実現する文学の授業」

田港朝昭「沖縄の「五つの顔」」

浅野誠「管理主義の克服と生活指導」

富田哲「わたしにとっての戦後沖縄教育」

このように、沖縄の民間教育研究はかなりの量と質をもつようになってきた。そのころ、富田哲さんを中心に沖縄民間教育研究所が立ち上げられたのも重要なできごとだった。

こうした動向のなかで、与えられたものを吸収するというよりも、自分たちで作りだすことを目指し、また日常的な支え合いを通じて親睦を深めていくようなサークル活動が重要だということ、私はずっと強調してきた。強調するだけでなく、私自身も、サークルづくりにかかわりはじめた。その時にたちあがったのは、若い20代教師を中心にしたメダカサークルだった。数人の小ぢんまりとしたものだったが、定期的集まり、相互の実践を語り合う会だった。我が家で開くことも多かった。1987年にスタートし、私が沖縄を離れてからも続いていた。

その会を支えた一人は西田純子さんだった。小学校教員を京都で勤め、夫の転勤で沖縄にこられ、彼女の実践に出会う沖縄の教員たちに強い衝撃を与えた。彼女の実践は、既成観念にとらわれない創造的なもので、とても明るいトーンに包まれていた。全生研全国大会でもレポートなさったが、参加者に強い衝撃を与えるものだった。

残念ながら早世されたが、追悼文集の原稿がそろい、出版を待つばかりである。

サークルの話に戻るが、80年代後半になると、沖生研では7つのサークルが活動を展開していた。サークルのイメージを共有するのに約10年もかかったが、着実な歩みが7つのサークルとして結実したといえよう。(2017年6月6日)

90. 沖縄教育史研究の本格化

1980年代初めにお引き受けした「沖縄県の教育史」執筆の件だが、繁忙の1980年代にあって、細々と積み上げていく作業は続けていた。

同書執筆にかかわる要請は、近世までの通史であったが、近世までの沖縄を書くとなると、時代的にも通史とはいいいにくいし、史料的にも困難であることが予想された。そこで、記述を明治末までにしよう出版社に要請し、承諾をいただいた。

このテーマでは、2～3本の先行研究はあったが、研究というよりも学校史を中心とした概観を示すものであったし、および教育関連資料に限られている事情で、作業は最初から難関であった。いくつかの「教育史」関係論文はあったが、その多くは、近世でいうと、士族向けの学校に限定されており、たとえば子育てについての記述はゼロに近かった。そこで、民俗学などの関連分野の研究書にも目を通した。「おもしろさうし」を通読したのも、何か関連するものを発見できないかという期待をもっていただけであった。しかし、活かせるものは少なかった。

ということで、関連分野資料や論稿をあさり歩き、そのなかから関連事項を見つける作業の連続だった。琉球大学図書館の郷土資料室にくりかえし「滞在」することが多かった。それでも、あたった資料のなかから、記述に有効なものの発見率は数%～0%という感じですらあった。史料探しと読み取りとその整理作業とは、時間がおおいに必要な作業であった。

そんな作業を数年間続け、抜き出し書き込んだカードは、束ねて横に並べると1メートルを超したから、おそらく千枚ほどになっていただろう。

遅々とした歩みだったが、1988年前半には、先述した集団づくりの新しい展開の作業が一区切りつき、88年後半には、沖縄教育史の作業を本格化させた。

また、転勤話がいろいろと舞い込み、沖縄在住生活にもかぎりが見えてきたことも、作業促進の動因となった。

これまでも関連記述がある土族の教育は別にして、百姓の教育関連資料はゼロに近かったので、関連資料、民俗調査の中の産育関連、わらべ歌や教訓歌、判例資料、村内法、地域史など、人々の生活が出てくる資料を探し続けた。また、明治初期に明治政府などが調査収集した資料にも使えそうなものがあった。それらのなかで、地方役人層についての史料が、「筆算稽古」と呼ばれるものに関連していくつか見つかったのは、重要な手掛かりになった。

また、「ていんさぐぬはな」の歌詞が、「子どもの発見」の文脈のものか、儒教イデオロギーにかかわるものか、分析に悩むものもあったが、いろいろと私なりに深めていった。当時、中内敏夫さんを中心に、産育の社会史研究が展開されつつあり、そこから刺激を受けたことは多かった。

明治期のことは、小学校就学実態研究を軸に、すでに何本か小論を書いていたので、それらを活用した。

こうして、1990年3月末、沖縄から愛知へ転勤する直前に原稿を完成させ、出版社に手渡した。翌91年には、出版に至った。『沖縄県の教育史』1991年思文閣出版である。（2017年6月16日）

9.1. 全生研沖縄大会の開催

1988年から、対応で忙しくなったのは、沖縄で1989年夏に開催することが決まった全生研（全国生活指導研究協議会）大会の準備活動だった。

全国から2000人規模の教師たちが三泊四日で参加して、研究討議する大会を運営するのは、量質ともに大変な作業である。1988年前半、引き受けるかどうかで、沖生研（沖縄生活指導研究会）内で大議論が積み重ねられた。実力をはるかに超える仕事であり、無理難題であるという実感をだれもがもっていたが、ナンクルナイサの楽天主義と体験してみたいというチャレンジ精神とが結び合って、引き受けることになった。

前年の大阪大会では、事前学習という意味をこめて、たくさんの沖生研メンバーが大会準備に参加した。また、沖生研として歓迎の意を示すパフォーマンスを全体会でした。その時、私はチョンダラーの役をやった。

元気者の平川節子さんを実行委員長にして、サークルごとに業務分担をして作業をすすめていった。私は、特定の担当にはならず、必要に応じて多様な業務をする。とくに外部折衝が多かった。数千の数の弁当注文、数百という数のTシャツ作成など、もあったが、大きなことの一つは、ツアーリスト選定だった。大会には、事前受付、会場・宿泊・交通機関の確保・配置を含めた大量の業務があり、当日は、ツアーリストも何十人も動員して行う作業だったので、通常の旅行手配の規模とは異なるものだった。そのころ大規模なコンベンションはめったにない時代だったので、そうした経験と力量をもつツアーリストは限られていた。ツアーリストにとっても、扱う額が数千万円以上にのぼる大変な業務だった。

いくつもの有力旅行社のなかで、結果として沖縄ツアーリストに依頼することになった。それに至る過程は、実に変だった。対応した私は、たくさんのことを学び、この業界のことに俄然詳しくなってしまった。10年近く後になって、全生研代表となり、毎年の大会で旅行社との折衝に関わり合った際にも、この時の経験が生きた。

この大会では、私は裏方に徹し、表には全く出ず、大会本部のあったパシフィックホテルに一週間缶詰めになった。外に出たのは、ホテル駐車場への一回だけだった。お蔭で、しばらくして足に強い痛みを感じ続けたが、どうやら冷房病だった。開催当日には、複数の台風が襲来し、それへの対応も求められるというハプニングもあった。

現地実行委員会は、100名余りの沖縄教員を結集し、大会は成功裏に無事終了した。他府県からやってきた浅野研究室の卒業生も何人かにわか実行委員になってくれた。

こんな大きな仕事をやり終えて、沖生研の実行委員たちの充実感はすごいものだった。大会終了時には、カチャーシーが終わらなかった。この体験などが、大きな財産となった沖生研とは、私の転勤のため、翌年お別れすることになった。

※ つい最近、フェイスブックの「友達」が「ていだぬふぁー」を話題にしてくれた。懐かしい話だ。この大会のテーマソングとして作られた曲だからだ（中村透作曲 宮城千恵作詞）。その後CDにも収められ、大会とは関係のない人々にも広がっていったようだ。（2017年6月25日）

92. 仲人ラッシュ 卒業生通信など

それまで多かった結婚式の演出司会などが、1980年代半ばころからは、仲人という役割に変わるようになった。その後90年代前半まで毎年のようにやったから、仲人ラッシュの時期だった。そして、90年代後半以降になると、祝辞や乾杯の音頭の役割へと徐々に移っていった。2000年代に入ると、結婚式への出席自体が激減していった。結婚する時期の卒業生が減ったのと、結婚式をしないことが増えたことがあろう。

仲人をした大半は、授業やゼミでカップルになり、無事ゴールインした例である。場所は沖縄だけに限らず全国各地に出向くことになった。おかげで、多様な結婚式事情をみることができた。

仲人の際の仲人挨拶は、夫婦でした。男の方が挨拶する例が多いが、おかしいと思ったからだ。たいていの場合、私たちが二人とも新郎新婦にかかわってきたからでもある。恵美子が主導的にかかわる例もあり、その際の仲人挨拶は、私がまず30秒ぐらいの挨拶をした後、「このカップルには恵美子の方が中心にかかわってきましたので、恵美子の方から深い話をします」といって、バトンタッチした。

私の挨拶の場合、自作詩を中心にすることもあった。鈴木庸裕・裕子夫妻の時がそうだった。なかには、仲人という名ではなく、実行委員長挨拶ということで話したこともあった。榎田正法・邦子夫妻の時がそうだったと、記憶している。

私のゼミ生は、教員就職を希望したものは、ほぼ100%近く教員採用試験に合格して、全国各地で教員になっていった。合格率が高い一因は、元気があるゼミ生が多かったことと、恒例のゼミ合宿で、面接試験などの特訓を展開したことがある。厳しい特訓に比べれば、実戦は楽々であったようだ。とにかくやる気溢れる卒業生だった。

私は、80年代前半から卒業生通信というのを年1～2回発行して、私からの情報に加えて、各地に散らばった卒業生の情報を流していた。

そして、学校現場にいる卒業生を、機会あるたびに訪問し激励してきた。うまくいかない例では、相談にのったり、慰め役励まし役をひきうけたりしたことも多かった。

このころから、沖縄教育史関連で卒論を書きたい他大学学生へのサポートも始まるようになった。80年代半ばから90年代までを合わせれば、10人ぐらいになるだろうか。そのなかには、現在北海道大学の近藤健一郎さんのように、専攻分野を沖縄教育史にする研究者も登場している。

東京大学大学院柴田ゼミ一行が、我が家を来訪して懇談したこともあった。今では50歳代に入って、各地の大学等で活躍しておられる。そんな風に大学・大学生とのつながりが広がっていった時期だった。（2017年7月5日）

VI 愛知への転勤 大学授業

93. 転勤話

1980年代に入って、全生研などを主舞台として、全国各地で開かれる研究会にかかわったり、講演講座をしたりする仕事が増えていくなかで、より一層全国各地と研究交流する仕事を展開したい希望が膨らんでいった。

しかし、沖縄からだ、小回りがきかないし、交通費がかさばって、いろいろと大変だった。とくに先方が交通費の面倒を見る場合には、多大な負担をかけた。私個人が負担することはせいぜい年一回ぐらいだった。

また、年齢も40代に入ると、いろいろと深いかかわりをしてきた琉球大学教育学部から抜けにくくなると感じ始めた。40代後半にもなると、機会を失するようになった。

ということで、80年代半ば以降、転勤を考え、そのためのアクションもおこし始めた。

大学の教員人事には、公募形式と、当該大学が内部で人選を進める形式とがある。後者の場合、候補者の了解どころか知らせないですめることが多い。徐々に公募形式が増えているようだが、内部ですでに候補者がいて、形だけの公募というもある。あるいは、公募形式だが、それを補う形での紹介推薦が重きをなす場合がある。無論、全くの公募形式で、多様な紹介活動が錯綜することも多い。

私も、何度か公募に応じたことがあるが、中京大学に就任するとき以外はうまくいかなかった。中京大学の際は、内部の人からの強力な勧誘があった。知人からの強力な勧誘がなければ、知らずに見過ごしただろう。といっても完全公募だったので、数十人の応募者があり、「激戦」だったようだ。

内部人選というのは、私自身がその選考にかかわったことがないので、事情はよくわからない。ただいくつもの大学で、何度も候補者になったようだ。いずれも、人事が終了してから、当該大学からではなく、全くの第三者から、候補者になっていたことを知らされた。その第三者がなぜ知っているのかは不可思議である。

公募形式をした大学で、知人が私に応募するよう説得し、締め切り数日前に応募したこともある。そこでは、第一候補になったが、学閥連合戦争に敗北して、だれも採用しないことになったとのこと。翌年も、全く同じことが繰り返されたとのことだ。学閥がきらいな私は、学閥の動きとは縁がなかったので、事情の大変さは関係者から聴くだけだが。

こんな風に、大学教員人事というのは、不可思議の世界だ。ということで、私自身は、大学人事にかかわることを避けてきた。そのため、人事委員になったことがないという例外的な位置をとってきた。会議数が減るし、無用なトラブルに巻き込まれにくいので、それでよかったと思っている。

内部人選の大学でも、有力候補になったことがあったらしいが、決まらなかった主要な理由の一つは、私が博士を取得しなかったからだと推測している。これは、実は私の作戦だった。1985年に発刊した「子どもの発達と生活指導の教育内容論」も、博士論文の形にしなかった。それでも、出版をきっかけにして、私にまつわる人事の動きができた。

もし提出し、内部人選の大学で教員になっていたら、相当な苦勞を積み重ねて、おそらく早期に「折れて」いただろう。そうでない流れをたどったのだけれども、2000年にはドクターストップがかかってしまった。内部人選をするような大学は、いわゆる有力だけに繁忙の極みに陥り、研究活動ができないといって、「有力でない大学」に転勤する人を、よく見かける。

脱線してしまったが、1987年ごろからいろいろな転勤人事の流れにまき込まれていく。そして、すべて、うまくいかないでいた。そんなころ、琉球大学教育学部に大学院を設置する動きが出てきた。設置審査は主に対象教員の業績審査が中心的な焦点となる。その点では、学部全体をみると大変厳しい状況にあるとの報告を聞いていたので、数年以上かかるなあ、と推察していた。(2017年7月14日)

94. 紆余曲折を経て、中京大学転勤が決まる

1989年5月ごろだったか、中京大学に勤務している友人から「公募があるので、是非応募してほしい」と強く説得された。

1990年から教員免許法が変わり、生活指導と特別活動の関連科目が必修となり、科目担当教員を採用する大学が急に増えた。それ以前は、これら関連科目担当教員は、全国の大学を合計しても数人程度だった。だから、これらを専門研究分野にする人は、別の科目担当として大学教員をしていた。私も、日本教育史担当としてやってきた。

それが、需給バランスを崩すほど、事態が変化した。急にあちこちから話がくるようになった。ある大学では、私をとりたかったけど、別の大学に内定したと聞いたから断念した、という話を聞かされた。ある大学も、別の大学も、私を対象にした人事がなされていたことは、その時初めて聴いたことだった。結果として、双方の大学とも私を採用する話は消えていた。

中京大学の話は、とてもいい話だった。そのころは、全国各地に出かけるうえで交通の便がいい東京近辺がいいと思っていたが、名古屋も交通の便がいいので、視野に入った。

後日談だが、中京大学の方では、私を第一候補にしたが、私に辞退の可能性があるともみて、第二候補まで決めていた。私は、そういう人事を知らなかったもので、後で聞いて驚いた。それほど、そのころ、この分野での人事が動いた時期だった。

一番大きな問題は、琉球大学教育学部に大学院を設置する動きのなかで、退職できるかどうかであった。事前確認のため、学部長に転任可能性があるが、差し支えないか尋ねたら、かまわないとのことだった。ところが、中京大学採用が決まった後、学長から「さしつかえがある」との話を聞いた。予想外の展開で大学院設置の内定があり、私は必要な要員だとのことだ。そして、要員となる資格をもつ人を後任として採用する必要があると言われた。

この時、同僚の藤原さんが全国の人事に詳しくて、有資格者で90年3月の退職予定者が3名いると調べていた。そのうちの2名が神戸大学だとのことだ。早速、藤原さんと私と、神戸大学に向かって、該当者にお会いして要請した。大変幸運にも斎藤浩志先生に快諾していただいた。そして、人事手続きが進行して、斎藤先生の琉球大学赴任が決まり、合わせて、中京大学からの私の割愛願が承認された。

実は、恵美子が勤務していた沖縄キリスト教短大では、恵美子の退職願が秋には承認されていたので、私が転勤できない際には、困った事態になるところだった。

中京大学に決まった当初は、生活の場は沖縄のまま、愛知に勤務する二重生活を考えていた。月に2回ぐらい沖縄に戻ろうと考えていたのだ。そんな考えは、そのころの沖縄では驚かれたが、中京大学の方では、そうした遠距離通勤

ないしは二重生活の人は、かなり多かった。そして、しばらくして、東京などと沖縄との二重生活で勤務する人は、結構いることに気付いた。

それにしても、私も恵美子も退職が決まったので、愛知に生活することに決め、その準備を始めたのは、1989年暮れから1990年1月にかけてだった。全生研沖縄大会の後処理も終わり、沖縄教育史執筆も大詰めを迎えていた。
(2017年7月24日)

9.5. 転勤 沖縄から離れる

前回述べた中京大学への転勤は、正確にいうと、公務員退職と民間就職だ。全く制度が異なるので、転勤ではないのだ。退職手続きが始まると、担当職員から20年以上務めると、退職金も年金も大きく変わることを聞かされた。そのことは頭にはなかった。後になって、かなり異なることを了解した。年金などは、年間100万円ほどの違いが出るようだ。私の琉球大学勤務年数は17年で、退職金は500万円だった。中京大学も13年だったので、これが同一大学継続勤務なら、あわせて、○千万円になったろうと思う。

そのことよりも、17年間でためこんだ資料などの処理が難題だった。教育学部移転委員会資料・教育方法改善プロジェクト資料・科学研究費資料・沖生研資料などをあわせると、研究室2部屋分ぐらいのとんでもない量になり、それらを廊下の空所などに保管していたのだ。それらは、関係教員や部署に引き取ってもらったり、大量処分をした。私個人の研究資料や書籍もかなり整理処分した。

それにしても、私・恵美子・家族の引っ越し費用は、100万円をはるかに超えてしまった。幸いなことに赴任にかかわる費用は、すべて中京大学が負担してくれた。けたはずれなので、これをきっかけに満額出す仕組みが変更されたと聞いた。そうだろうな、と思う。

それまで住んでいた小波津団地の家は、親戚の不動産屋に相談し、貸家にすることも検討されたが、最終的に、買手がついたので、お別れすることになった。

そして、名古屋の家探しもした。息子がサッカー部のない中学校校区は駄目という。そこで、名古屋の中学に勤務する友人に、その年の中学サッカー大会のトーナメント表を送ってもらった。そこで、息子は、優勝チームの学校にいきたいと主張する。結果として、その学校の校区の貸家に住むことになった。

この家探し、そして車の購入については、当時愛知に住んでいた卒業生の鈴木さんの大いなる世話に甘えた。

しかし、借りた新築マンションの完成が遅れ、しばし不動産屋が用意した古アパートに仮住まいだった。寒くて震えていた。名古屋に到着した最初に、近くのラーメン屋に家族で入った。しかし、沖縄の味に慣れてきた私たちには、辛すぎて合わなかった。「早く沖縄に戻ろう」という意見に一致した。

ともかく名古屋生活が始まり、子どもたちは公立中学小学校に転校し、私は中京大学の名古屋校舎と豊田校舎へと通勤する生活が始まる。恵美子も、非常勤講師として中京大学で教え、翌年、愛知みずほ短大に就職した。

これ以後の話は、いずれ再開継続することになる。

1990年1月以降は、沖縄教育史の仕上げと、転勤準備が中心にまわっていく。その間にも、卒業生の亀谷カップルの楽しい結婚式があり、また、1月には、招かれて八重山で講演をしたりもした。そして、友人たちが盛大な送別会を開いてくれた。嬉しかった。

写真は、友人たちに記念品として差し上げたものだ。恵美子の教え子のパートナーの陶芸家が、製作したものだ。私の研究室に所属していた学生は、斎藤先生が引き続いて指導して下さることになり、ありがたかった。

こうして、18年間の第一次沖縄生活に区切りをつけ、愛知生活へと移ることになる。(2017年8月3日)

96. つながり豊かな沖縄の人間関係

結婚して沖縄生活を始めて以降、お世話になった親戚は大変多い。義理の兄弟姉妹、そしてその子ども達を合わせると、数十人とつながりを持ってきた。私の実の兄弟姉妹は姉一人で、姉婿一人がいるが、子どもはいない。だから、対照的だ。

この親戚つながりでの出会いは、沖縄生活を始めた45年前から、今の今まで続いている。多い時は、週一回以上のペースで、少ない時でも月一回ぐらいは顔を合わす。

今回は、そのなかで3人の義兄について書こう。3人とも、今は故人になってしまったが、1970年代などは、ふらっと現れて、「碁盤出せ」といって、囲碁の指南をしてくれる。「泡盛飲もう」といって、遅くまで、時には朝までのこともあった。飲み屋に連れていってもらったことも多い。

このあたりのことは、すでに連載32で書いた。

無論、世話になるだけでなく、私たちがそれなりにした。結婚証人、旅の世話、道場チラシ作成のアドバイス、子どもたちの面倒。子どもたちの仲人もした。だから、当然のことだが、相互関係だ。

ということで、深いつながりをもった。

こうした親戚つながりだけでなく、沖縄ではたくさんのつながりができてしまった。初対面の人でも、話がすすむと、つながりをどこかで発見することが多い。

授業で、

〇〇小学校出身なら、△△先生を覚えているでしょう。研究会仲間だよ。

お母さんが、テキストの著者名を見て、「自分の先生の旦那さんだ」といっていたよ。

卓球で、

「〇〇高校出身なら、◇◇先生知っているでしょう。私の40年前の卓球仲間だよ。」

40年前の話なら、「私は、南風原代表で出ていたけど」「その時、私も一緒でしたよ。」

空港で

「浅野さんじゃないですか。30年前、同じ団地に住んでいた〇〇ですよ。お久しぶり。」

「学生時代、授業取りましたよ。覚えていますか。」

といった具合だ。1990年までの第一次沖縄生活では、おそらく数千人の方とつながりをもったようだ。その子ども達、そして孫世代が、私の授業の受講生になるなど、つながりは広がっていく。と同時に、忘れ、思い出し、新たなつながりへと広がっていく。(2017年8月15日)

97. 第一次沖縄生活をふりかえって

このあたりで、第一次沖縄生活（1972～1990年 25歳～43歳）の記事を終えることにしよう。終えるにあたって、少し振り返ろう。

1972年、善きにつけ悪しきにつけ、「本土」を背負って沖縄生活をスタートさせた。「本土」のなかの私なりに「良い」と思うものに身に付けて、それを沖縄でも広げようという気持ちはあった。それが「本土に追いつけ」という、沖縄教育界の動きと響きあいつつ、1970年代前半は沖縄各地を動き回った。と同時に、「本土に追いつけ」でいいのか、という疑問が湧いてきた。

そのことと一体となって、自分の知らない沖縄という世界を発見し体験し、ひるがえって自分自身についての再発見・再創造へと赴く。それは、沖縄自身の沖縄再発見再創造の営みに参加することでもあった。そのモチーフは、45年たった今も継続している。

この時期の最大の出来事は、息子の死だった。生きる死ぬ、人生とは何かについて否応なしに考え行動した。そして、そのことを胸に、その後猛然とした仕事を展開した。それが、1977年以降の私だった。その一つは、沖生研をはじめとする沖縄の学校教育現場にかかわる仕事だ。そして、大学教育実践、大学の教育改革にかかわる仕事の追求だった。

それらのなかで、研究面においても私なりのものを追求し、少しずつ形にしていっていった。それらは、80年代の単行本となっていく。「沖縄教育の反省と提案」1983年、「子どもの発達と生活指導の教育内容論」1985年、「集団づくりの発展的検討」1988年、「沖縄県の教育史」1991年、「大学授業を変える16章」1994年とつながっていく。それらは、完結型というよりも問題提起型のものが多く、その後の研究課題として継続発展させていくことが求められるものだった。

これらのなかで、私なりの研究者としてのありようが、そのころなりに確立していく。それは、生き方探求と結び合ったものであり、すでに離れつつあった権威主義的なものからの決別を意味していた。

こんな流れを経て、80年代後半になると、その後も引き続き掲げていた私なりのうたい文句の「異質協同」という用語を作り出す。それは、研究だけでなくワークショップ的な実践の創造と重なる。そして、身近な人間関係、とくに恵美子を軸とする家族でも体現し始める。そして、「こうでなければいけない」という感覚から「こんなこともあるのか」という発見感覚、そして異なるものとの協同による創造の追求へと、長い期間をかけて移行していく。

こうした私自身の変化は、社会変化と並行している。高度成長・右上がり象徴される社会のありようは、実際には低成長へと移行しつつも、世界的にみて「ジャパン・アズ・ナンバーワン」という言葉に象徴される絶頂期の日本、そして「本土に追いつく」ことを至上命令にしたがる沖縄の中の動向は、1980年代にピークに達する。と同時に、その陰りが見え始めるのも、80年代のことだった。

その転換のなかで、なおも成長・右上がりを求める動きが、その後を「失われた10年、20年」という言葉に象徴されるガンバリズムの世界として継続する一方、新たなありようを模索する動きとしても現れてくる。

そうした時代背景を感じ取りながら、模索・試行錯誤を続ける私。一度、沖縄を離れて、そのように「もがく」本土（日本）の課題に真正面と取り組みたいと思いつつ、沖縄を離れ日本の中に赴く。80年代末、そのことが決まったころ、城丸章夫さんに、「沖縄にいればいいのに」と言われたことが心に残る。

そして、1990年4月から愛知生活本土生活が始まる。と同時に、再び沖縄に戻る伏線も敷かれていく。そのことは、第二次沖縄生活（2004年～57歳～）として展開していく。

その前に、まだ書いていない第一次沖縄生活以前（～1972年～25歳）の思春期青年期の私の人生について綴らなくてはならない。（2017年8月27日）

98. 愛知時代へ 住宅探しでの驚き 1990年代のスタート

この連載の125回（2016年8月）までは、第一次沖縄生活（1972年～1990年3月）のことを書いた。その後、半年間、中高生時代のことを19回書き、一年余りの休止期間を置いた。

ここで、1990年に戻って、第一次沖縄生活から愛知生活へと移るころへと戻りたい。多分百回近くわたって、14年間余りの愛知時代を描くことになる。

ところで愛知時代はもう一回ある。1960年代前半の中高生期である。そのころと比べると周辺的环境は激変そのものだ。特に勤務先と住居をおいた名古屋東部から豊田にかけての一带はそうである。高度経済成長期、その後も続くモノづくりでは、日本の先頭を切ってきた場所だ。急成長した自動車産業に至る所で出会う。道路も電車も名古屋と豊田を結び、工場と勤務者の住宅を結ぶ道路は、豊田の工場の勤務シフトに合わせて渋滞が発生する。

1960年代初めまでは、名古屋の端は東山公園であり、市電もそこまでか、少し先の星が丘まで、その先は丘陵地帯が広がる「遠い」所だった。

私が勤務した中京大学は、名古屋の八事と豊田の二つにキャンパスをもっていた。双方で授業・学生指導・会議などが行われるので、まずは双方に通勤できるところに住居を探し求めた。そこは名古屋東部と豊田を結ぶ所だった。

まずは賃貸住居を求めるために、八事キャンパス近くの不動産屋に行く。そこで、不動産屋の「レベルの高い地域」という表現を聞く。価格レベルの高さと思ったら、話を通じない。要するに、受験偏差値のレベルが高いのだそうだ。小学校区ごとに分類されている。びっくりした。1960年代前半にもそんな感じはあることはあったが、不動産物件の話にまで登場するとは驚いた。

家族の中で住宅位置に一番こだわったのは、サッカー夢中の息子だった。サッカー部のない中学にはいかないと宣言されてしまった。そこで、名古屋で中学校教員をしている知人にサッカー部の有無を尋ねた。すると、その年の中学校サッカー大会のトーナメント結果が送られてきた。

という経過があって、本人希望で優勝チームの中学校区に住居を探し求めることになった。東山公園の東隣のマンションを借りた。その学区は、サッカーだけでなく受験偏差値「レベル」も高いところだった。生活しはじめて、近所の親たちとの子どもの進学先をめぐる会話で、恵美子は「近所の高校なら、どこでもいい」という発言をした。周りの親が驚いたのだが、その意味を恵美子とはつかめなかった。一位から三〇〇位まで、細かい高校ランクが細かくある愛知県の高校の中で、近くの高校は、すべて上位5校に入るから、「近所の高校なら、どこでもいい」という発言は驚異の発言なのだ。私達は、その驚きの反応に驚いた。ついでに書くと、息子と私とで進学高校先選択の相談をした時に、配ら

れた説明書の理解にとまどった。私達には、公立については一校を選択するものと決めてかかっていたからだ。当時複合選抜といって二校を選ぶシステムになっていたのだ。(2018年10月27日)

99. 大学教員生活の新しい体験

前回書いたような驚きから始まって、愛知生活に馴染むのにある程度の体験と時間が必要になった。25年以上前の生活経験の有効性はとても低くなっていたのだ。

驚いたことをもう少し書いておこう。

寒さもその一つだが、もう一つ、レストランなどでの味の濃さに驚いた。愛知生活第一日目に家族で食べたラーメンの味がとても濃くて、誰からかというわけではなく「沖縄に帰ろう」と言い出した。

もう一つは、近所付き合いがとても薄いことだ。全くの都市生活だ。つながりは、子どもの親同士のつながりと、卓球とか英会話とかのサークルつながり、そして職場つながりだった。

私は、この年から施行された教員免許法改正に伴い新設された生活指導科目と教科外教育科目の担当として、教職グループの一員だった。教職科目は全学部設置されているので、全学教育を担当する教養部の構成員ということになった。

週5コマの授業が最低ノルマだった。それまでの琉球大学教育学部が3コマだったので、増えたわけだ。といっても卒論とかの所属学生がいるわけではなかった。教職科目取得学生は、全学で500名内外と、たいていの大規模私立大学に共通する多さだった。そのため、クラス人数が100名を超えることがしばしばだった。

ということで、授業で苦戦することになるが、それは改めて書くことにする。

沖縄キリスト教短大を退職した恵美子も、中京大学で非常勤講師を務めることになった。翌年からはある短大の専任教員に就職できた。

なお、最低ノルマを超えて授業を担当すると超過勤務手当がでるというのも、私にとっては驚きの一つだった。私自身は、ノルマ以上は辞退する方向で動いてきたが。

さて、中京大学には二つのキャンパスがあるので、研究室はいずれかのキャンパスにもち、もう一つのキャンパスにも授業で赴くことになる。それにあたって研究室所在の希望が聞かれたが、たいていの人八事キャンパスを希望していた。ということで生じる苦情の処理のため、何年かごとに豊田と八事のキャンパスを交代することになっていた。でも、私は豊田キャンパスを希望して、退職するまでずっと豊田にいた。豊田の方が静かで広々しているし、教職受講学生も圧倒的に多いので、私にとっては都合がよかった。八事は都会的だが、都会より田舎を好む私の特性でもあった。

通勤は、電車と学バスの乗り継ぎか自家用車か、だった。会議と授業日程をまとめて、週二回豊田キャンパスへ、一回八事キャンパスに出勤するというのが、だいたいのスタイルだった。

豊田キャンパスの研究室棟は、1～5階の社会学部研究室の上の6～7階にあり、私は7階の北側だった。近い猿投山だけでなく、恵那山、よく晴れた日には御嶽山も見えるところだった。ところでなぜか31年間の専任教員期間のほ

とんどが北向きの部屋だった。南向きを希望する方々ばかりなので、貴重な存在だったかもしれない。豊田キャンパスは丘陵地帯にあり、周辺散策には適切だった。八事キャンパスも隣接する興正寺境内の散策をよく楽しんだ。

ということで、授業と会議以外は、大学にいない教員が多く、研究生生活を大学で送る人は少なかった。私もそれに合わせて、大学は会議と教育の場で、研究は自宅という風に分けていく。といっても琉球大学でも終わりのころはそうになっていたが。(2018年11月2日)

100. 教員と学生との距離

中京大学での私の教員生活において、琉球大学時代との違いの一つに教員と学生との距離があった。琉球大学時代、私の研究室には、いつも学生が誰かいる感じだった。私がいなくても学生がいるという具合だ。電話も代わりに取ってもらっていた。中京大学ではそれとは変わった。豊田キャンパスで、「レポート提出を研究室前のポストに」と指定した時、「研究棟に行ったことはありません」という応えが多かったのには驚いた。もっとも研究室に出かけても、在室の教員は、1割に満たないほどだった。なかには、東京や関西で生活しており、週の真ん中の2～4日だけ愛知に居る人もいた。

実は、私自身も、沖縄生活を続け、授業など所要の時だけ愛知に出かける生活を検討してみた。年間200万円近くの航空機代を出せば、できないことではなかった。だがそれを本格的に検討する前に、恵美子の沖縄キリスト教短大の退職が決まり、一家そろっての転居ということになった。

学生と教員の関係だが、毎年ゼミを1～2クラス担当したので、懇親会・ゼミ合宿・ゼミ旅行などをよく企画した。さらには、受講生を我が家に招待することもしばしばだった。これには学生たちが驚いた。教員の自宅を訪問する経験がある学生は例外中の例外だったからだ。訪問した学生とはたくさんのかたを語り合った。なかには、トイレで寝込んでしまう学生がいたというエピソードもあった。

ということで、学生から「風変わり」な存在と見られたようだ。でも、そんなつきあいがその後長く続いて、今日に至る例も少なくない。

次は、教員間のつながりについて書こう。これは私周辺だけのこともかもしれないが、のんびりと個人的な付き合いをする人は少なかった。飲み会を例にすると、大学同僚とのものは、年1～2回だった。琉球大学時代と比べると激減だ。

といっても、いろいろなつながりが生まれた。記憶に残ることであると、建売住宅を購入した我が家の庭にたくさん植木を贈呈してくださった方がおられた。教授会でたまたま隣り合わせになった海外から来た教員とは、なぜか日本語と英語とを教え合う関係になり、家族ぐるみのつきあいまで発展した。

といっても、ここでの付き合いは都市的なものといえるかもしれない。それまでの沖縄での田舎的な付き合いとは対照的だった。それは、ドライなつきあいといってもよいだろう。

話は飛ぶが、大学の経営サイドのテキパキした動きには驚いた。琉球大学は国立ということもあって、文科省の意向が強く作用し、また意思決定に時間をかけていた。私が委員メンバーの一人だった大学移転にかかわる委員会では、案をまとめ決定するまでに7～8年かかっていた。

対照的に、中京大学では、経営サイドが必要と考えたことについてはすごいで進化した。毎年一つずつといいほど、次々に新学部を設置していたが、設置に必要な教員が足りないとなると、すぐに公募し3か月もしないうちに新教員採用へと進んだのには驚いた。

大学建物も毎年のように新築されていた。新築される建物はデザイン性豊かで、ファッション感覚にあふれたものだった。私が勤め始めて10年ぐらいた時に、巨大なセンタービルができた。そこで一番驚いたのは、清掃職員だった。垢抜けした服装の女性職員が常時歩いて、落ちているごみを手際よく、ファッションブルに清掃するのだった。

(2018年11月7日)

101. 教室 非常勤講師対応 卓球練習場

中京大学の教室照明は明るかった。ある国立大学でも非常勤で教えたが、教室の雰囲気が異なる。最初は学生の違い、建物のファッション性の違いかとも思ったが、ある時、教室を照明する蛍光灯の数が、学生一人当たりで倍の違いがあることに気づいた。明るい教室と暗い教室の違いが歴然としていた。

別の話。中京大学では授業が終わると同時に清掃職員の作業が始まり、板書も消される。ある時、メモを取りたいと思っていた板書が消されてしまい、焦ったことがあったほどだ。

非常勤講師の世話も丹念にしてくださるのには感心した。琉球大学もふくめて国立大学では不親切も過ぎるという感じだったので、驚いた。

授業準備・休息・お話もできるような部屋が用意され、フリースタイル式の飲み物や茶菓があり、印刷物はその場で対応して準備してくださる。授業に必要な文具への対応もできる。特別なものが必要な時には予算措置が講じられ、数万円ほどなら大学側が準備する。当たり前のことだが、こうしたことをする大学は多くない。私立大学であっても、チョーク以外の文具を用意する例はほとんどない。

さらに学期末には、非常勤講師と専任教員との懇親会が、大学予算で設定されており、そこで、授業にかかわる情報交換ができて、とてもよかった。

無論、自動車使用する教員のための駐車場準備はできている。

こうした当たり前のことができてない大学が多いどころか、少ない。そういう大学は、非常勤講師に依頼しているという感覚ではなく、雇ってあげている感覚なのだ。

中京大学は体育学部があるので、スポーツ施設は抜群に充実している。とはいっても、体育実技授業や部活動で使用されるので、一般教員や学生が利用するのはなかなか難しいのが現実だった。

スポーツ施設の大半は、日常的には部活学生が維持管理している。同僚の顧問教員に頼んで、卓球部練習場に出かけた時の話だ。入口に着くと、部活一年生が、入り口にスリッパをもってきて、案内を始める。「練習したいのだが」と伝えると、「誰がお相手しましょうか」と応える。そこで「私のレベルは低いので、合わせられる人をお願いします」と伝える。すると、女子の一年生が相手をしてくれる。部員は、高校時代には各県代表クラス以上だったので、レベル

が違う。でも、ある時偶然、私が1セット取った。申し訳ない気持ちだった。私の授業を受けている卓球部生からから聞いた話だと、その対戦相手は、そのあと顧問教員からいろいろとアドバイスを受けたそうだ。

ということで、なかなか敷居の高い卓球場だった。数回出かけたが、終わりにした。

私の日常の卓球練習場は近隣にあった社会教育センターに落ち着いた。素人の大人たちがたくさん集まって練習していた。新しい出会いの人ばかりで、私の卓球実力はぐんとアップしたと思う。そのうち種々の試合出場の誘いがあり、参加してみた。愛知県は人口が多いだけでなく、卓球のメッカのようなところなので、大会も大規模だった。いろんな対戦相手で随分と学んだ。

2～3年たつと、近隣の人たちからチームを作って団体戦にでるといので、お誘いを受けた。なんと26部からの参戦だった。沖縄では7、8部ぐらだから、規模のレベルが異なる。(2018年11月14日)

102. 愛知生活の新居 大学改革

沖縄時代同様、愛知時代の最初のころも、近隣への家族ドライブをしばしばして、景観地によく出かけた。ハイキングコースなどにも出かけた。紅葉は素晴らしかった。四季が美しいこの地域は、沖縄とは全く異なる美しさを持っていることに改めて気づいたのだ。

寒さがこたえる所だったので、温泉に出かけることが楽しみになった。愛知県内だけでなく、長野県などにも出かけた。恵美子が始めた英会話サークルのメンバーが温泉好きで、よく一緒に出掛けた。そのうち私も英会話グループに参加することにした。

愛知生活に慣れてくるころ、建売住宅を購入することにした。沖縄の西原の家が売れたこともある。今思えば、バブル絶頂期で土地建物の一番高い時期だった。いくつか選択肢があったが、結局、森の中の二戸の建売住宅のうちの一つを購入した。家族会議の結果だ。子どもたちもそこから通える中学高校に進学した。

庭付きだったので、同僚から譲っていただいた花木をたくさん育てた。空いたところに野菜や花を植えた。庭畑づくりは、それまでと比べるときちんとやった。

二軒のうちのもう一軒の引っ越しは、一年後だったので、最初の一年は私達だけだった。街灯もない真っ暗な未舗装道を数百メートル歩いて、国道に出て、駅まで総計15分歩くという道だった。人が住んでいる家は我が家から数百メートル離れていた。だから隣近所などはゼロ状態だった。その後徐々に民家が増えてくるが、近所つきあいは薄かった。後からわかったが、そういう地域性のようだった。

転勤して1～2年は繁忙状態だった沖縄生活と比べると、時間的ゆとりがあり、身体の休息期でもあった。そして、積ん読状態のものをはじめ、これまで着手できていなかった関連分野の学習に励む日々が続いた。読書をもとに研究ノートを何冊も作り、最初の数年足らずで、A4で1000ページ近くになった。それをもとに90年代半ばからの爆発的執筆につながっていく。

しかし、ゆったりした生活も2～3年で終わる。

忙しさを作り出したのは、主として全生研での研究活動だが、その話はしばらく後にして、大学での話を書こう。その一つは授業での模索だが、その前に大学での行政的な仕事とそれにかかわる会議などがある。

最初の一年は、忙しい役目はなかったが、2年目には所属する教養部の将来計画委員長にさせられた。教養部は、多くの大学で統廃合される動きにあったが、中京大学では残され、70名余りの教員を擁し、中京大学のなかでは抜きんで最大の学部であった。その教養部の将来計画委員長なので、重大な役目だ。

そのころの私の大学改革のついでの考え方をここで書いておこう。大学改革には、1. 学部学科の新設統廃合、2. 建物設備の充実、3. 授業など教育活動の改革充実の三つがあり、その中で、教育活動の改革がもっとも重要でありながらももっとも軽視されて、取り組みが全く不十分にしかされていない分野だとみていた。その時点では、そこに力点を入れて取り組むことが中心課題だと判断していた。

そんな考えを持ち、多少は実績がある私を選んで任命されたと思い、期待に応えなくてはならないと考え就任を受諾したのだ。(2018年11月20日)

103. 大学業務と授業

前回述べた将来計画委員長の仕事は、順調に進み始めたと思っていた。しかし、そのうち、私を任命した方々にも私自身にも錯覚があったことがわかっていく。

任命した側は、教養部を改組して新学部を作ること、つまり前回述べた三つのうちの1番目が主目標であったが、私は3番目の授業改革が主目標だった。そのずれが鮮明になった時点で、私は辞任した。

私は、それまで学部内の勢力構造がよくわかっていなかった。というか対立構図が見えていなかった。ところが、私が辞任するやいなや、私を任命した側と対立している側から、「お誘い」の話が舞い込んだ。驚いた。辞任する理由は、そういう対立構図とはかかわりなく、大学改革の主目標の力点の違いだったのだ。

おかげ様で、私はそれ以後事実上の一匹狼の位置を取ることになった。といっても「狼」のように吠えもせず、静かな位置に収まった。ただ、教育の自己点検、初任者教育である基礎ゼミづくり、カリキュラム改革、授業改革など教育改革に取り組む際には積極的に活動し、それなりの役割を果たしたと思っている。

さて、私個人の授業改革だが、赴任後ほぼ3年間試行錯誤を重ねた。1970年代の沖縄での授業開始期には5年間の試行錯誤だったので、それよりは短くなったわけだ。

琉球大学教育学部時代は、半数以上の沖縄出身者で女子学生が多数を占めていた。それに対して、私が教えた体育学部中心の中京大学では、半数以上の東海圏出身者でかつ全国から集まる男子学生中心だった。このように、学生構成に大きな違いがあった。また、琉球大学時代は、2～3の例外を除いて、最大60名の受講生が相手だった。それに対して中京大学では、100人を超すほどの大規模授業が多かった。

そのため、それまでの経験では通じないところが多く登場した。いくつかのエピソードを語ろう。

中京大学での最初の担当授業は、体育学部の男子学生が受講する「教育原理」だった。学生たちの学校体験の語り合いから授業を始めようとした。「これまでの学校体験が一番楽しかったことを話してください」と切り出した。数分間の全員沈黙の中で、ある学生が、ここには書けないような下ネタ発言で対応してくれた。全身から気力が抜けてしまった。これまでの授業経験で築いたやり方が通じず、これからどうやっていくか、という創造課題を鮮明に突き付けられ

た瞬間だった。

付け加えて、その後、私の授業にかかわりなく、体育学部では学習熱心学生への変化が起きていったことを記しておこう。

赴任前に、私が「100人以上の大規模授業は大変だなあ」と語った際、ある同僚が「欠席者が多いから、100名以上といっても実質は数十名以下になるから大丈夫だよ」と返してくれた。当時の大規模私大では、そういう例に溢れていた。でも、それは私の授業「精神」が許さなかった。それまで通り、90%以上の学生が、出席するような授業にしたかった。

ということで、受講生の大半が出席し、討論や共同創造のある活発な授業の実現を目指して、ほぼ3年にわたる「試行錯誤的苦闘」が始まる。(2018年12月2日)

104. 授業での試行錯誤的苦闘

授業における私の「試行錯誤的苦闘」の焦点は、受講生一人一人が自分の考えを持ち、それを表明しつつ、話し合い共同創造していくことを基本に授業をすすめるにはどうしたらよいか、ということにあった。そのことを細分化して書こう。

- 1) 自分の考えを持つようにしていくこと。それはクラスメイトとの意見交換・共同創造で生まれ育み表明するに至る。その過程を作り出すための工夫。
- 2) 大規模なので、小グループをつくってすすめるが、その作り方・人数など
- 3) グループ内での討論・共同作業の進め方。
- 4) グループの考えを全体場で示すやり方
- 5) 全体討論の進め方。
- 6) それらの過程で、個人レベルでの考えを深めていく段取り。活動をめぐる個人の成績評価のしかた

このように、多岐にわたるが、それら各々について、たくさんの試行錯誤をした。おそらく百を下らないだろう。

試行錯誤の結果、「これは使える」と、私だけでなく他の大学でも他の人でも使えると思われることを、整理して『大学の授業を変える16章』（大月書店1994年刊行）に収めた。

同書は、私が出した書籍の中では、ぶっちぎりの売れ行きだった。そのころ若手の大学教員だった人、教員になろうとした人の多くに読んでいただけた。今は50～60代になる方々から、今でも「あの本を読んで、授業の参考にしました」と声をかけられることがある。

その後も、次々に授業の場で受講生と切り結ぶための工夫が必要になり、試行錯誤的な挑戦は続いた。

いくつか印象に残っていることを書こう。

いじめ問題が重要な問題だとして考えられるきっかけの一つに愛知県西尾東部中学校の自殺事件があった。当時、愛知教育大学で非常勤講師として授業を担当していたが、事件翌日の授業は急遽切り替えて、いじめ問題についての討論会にした。そこで、教師を目指す学生として真つ当な意見が続出した。そのなかで、次々に意見を出した分野とは異なる分野所属のある学生が、「発言した人の多くは、出世コースの分野の人たちで、タテマエで発言している印象を持つ」という爆弾発言をした。そして、この二つの分野とは異なる分野の学生が「私は出世コースとかではなくて、真剣な気

持ちで語ります」と泣きながら発言した。

この授業には、三つの分野の学生がいたわけだが、「偏差値レベル」が異なっており、出世コースに近い遠いかで、大きな違いがあることを表面化させるものだった。そうしたものがあことは、他の教員から聞いてはいたが、それがこのように鋭い形で表面化したことが、私にとっては驚きであった。

こうした、強力な偏差値体制のなかで生きている愛知県出身学生に切り込める授業をどう作るか、ということを一層真剣に考え始めるきっかけになった授業になった。

その際、少ないながら居た愛知県以外出身学生は、愛知県出身者たちの間でのこうしたありように、私同様に驚いたことだろう。そこで、以後、愛知県内県外の学生が会うことで生まれる発見に留意しながら授業を進めるようになった。それは、中京大学でも同様であった。(2018年12月9日)

余談14 前半期の後半(25～45歳)を振り返る チャレンジ精神とガンバリズム

本号のサブタイトルは、「チャレンジ精神とガンバリズムで、人生「上り坂」を駆ける 1972年4月(25歳)～1992年3月(45歳)」とした。そのあたりのことを書こう。

私は、1990年代後半ごろから、人生を二つにわけてとらえることを提案してきた。仮に90歳寿命だとすると、45歳が中間点となり、それまでを前半期とし、それ以降を後半期とするのだ。

その前半期をさらに二つに分けて、前半(～25歳)、後半(25～45歳)とする。本号は、その前半期の後半について、「私の人生」を振り返るものだ。

この4つの時期ごとに、編集発刊する計画だが、各々の仮のサブタイトルを紹介しよう。(長期にわたるので、大きく変わるかもしれないし、作業ができるかどうかさえわからないが)

前半期の前半(0～25歳) 生まれ、もまれ、生き残り、自分の生きる場(課題・仕事・関係)を探す

前半期の後半(25～45歳) チャレンジ精神とガンバリズムで、人生「上り坂」を駆ける

後半期の前半(45～65歳) 「下り坂」で、広い世界とつながる

後半期の後半(65～90?歳) 老のなかで、「生き方」と「世の中」の創造

では、本号に収めた前半期の後半(25～45歳)を振り返ってみよう。

沖縄の場で、研究(生活指導・沖縄教育・大学教育)と大学教員の仕事を、家族と多様な人間関係のなかですすめてきた。一時的な首都圏生活、そして最後には愛知生活・全国とかかわる仕事に突入する。

自分がイメージする、研究課題、大学教員生活、人間関係の軸にそって、「チャレンジ精神とガンバリズム」で、それらの「上り坂」を駆けあがってきたというものだ。途中、想像を超える様々な難題に会い、それらに対応するなかで、失望挫折はありつつも、自分自身を充実させつつ駆けてきた。と同時に、それらは、自分とかかわる課題・社会・関係の創造とも並行していた。

当初のころは先達が築き上げてきた財産を継承しつつ、先達を追いかけることが中心になった。それでも、数

年ほどすると、自分なりのものを作り出し始めた。本業である生活指導研究だけでなく、授業を中心とする大学教育論、沖縄教育論にも着手し、自分なりのものを見せていく時期だった。

いろいろなことに手を出したのだが、「チャレンジ精神とガンバリズム」そのものの展開であった。(2020年7月10日)